



THE 71ST JAPAN AMERICA STUDENT CONFERENCE ANNUAL REPORT

第71回日米学生会議 報告書

**The Evolving
Japan-U.S. Relationship:
Think Globally, Act Locally**

学生が紡ぐ日米平和

～対話と衝突から己を拓け～

第71回日米学生会議

日本側報告書

謝辞

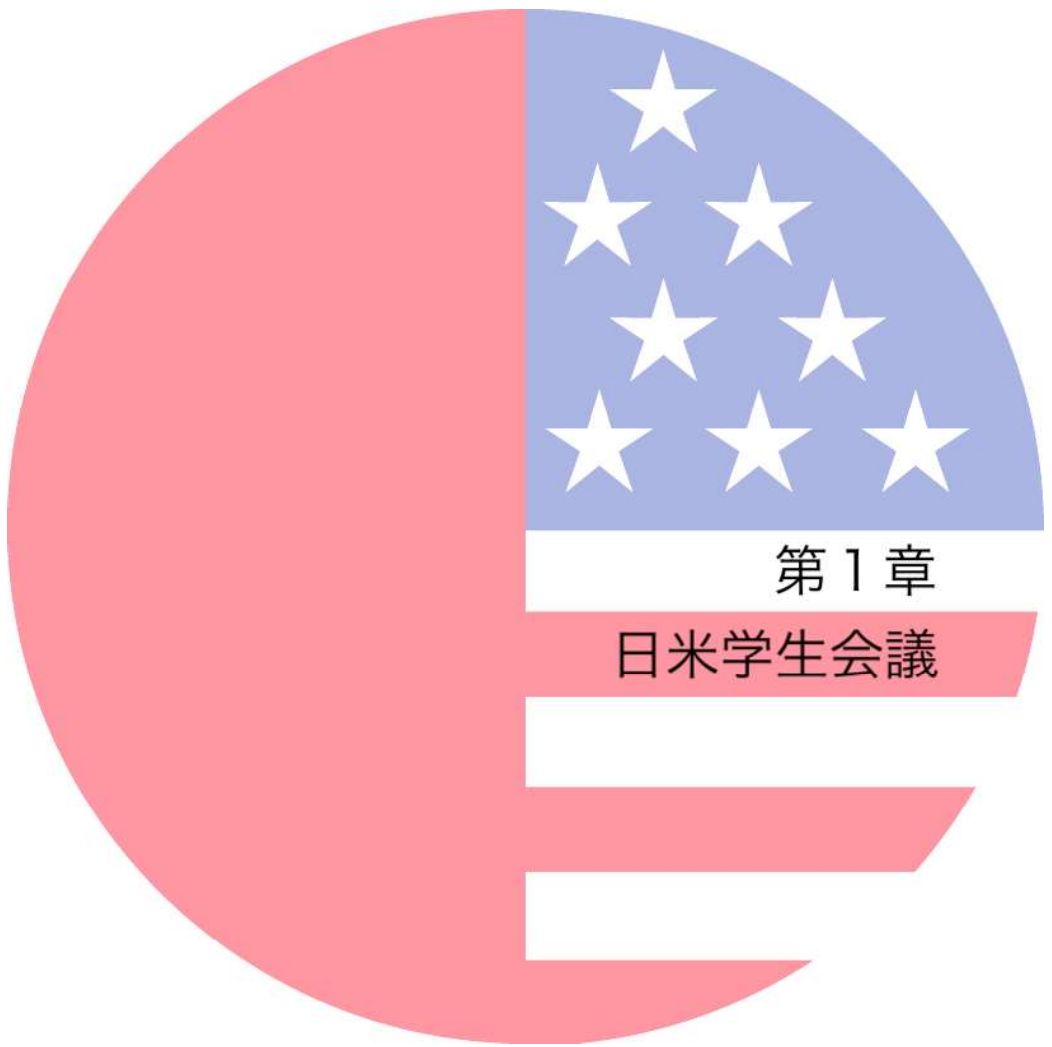
何もかも未熟な私たちを
支えてくれた全ての人々に
感謝をこめて

第71回日米学生会議日本側副実行委員長

編集長 南 秀弥

目次

第1章 日米学生会議	<u>P. 1</u>
1-1. 実行委員長挨拶	P. 2
1-2. 日米学生会議とは	P. 4
1-3. 日米学生会議の歴史	P. 4
1-4. 本文中の略語説明	P. 6
第2章 第71回日米学生会議 概要	<u>P. 7</u>
2-1. 第71回会議 テーマ	P. 8
2-2. 第71回会議 開催概要	P. 9
2-3. 第71回会議 活動内容	P. 10
2-4. 第71回会議 実行委員名簿	P. 12
2-5. 第71回会議 参加者名簿	P. 15
第3章 事前期間中活動報告	<u>P. 17</u>
3-1. 春合宿	P. 18
3-2. 防衛大学校研修	P. 25
3-3. 広島研修	P. 30
第4章 本会議期間中活動報告	<u>P. 40</u>
4-1. 第71回日米学生会議 in 高知	P. 42
4-2. 第71回日米学生会議 in 京都	P. 57
4-3. 第71回日米学生会議 in 岐阜	P. 65
4-4. 第71回日米学生会議 in 東京	P. 77
第5章 分科会活動報告	<u>P. 84</u>
5-1. 環境とテクノロジー	P. 85
5-2. スポーツが作る健康	P. 97
5-3. ダイバーシティ	P. 108
5-4. ナショナリズムとグローバリズムの関連性	P. 121
5-5. 東アジアにおける日米関係	P. 133
5-6. 法・技術の真価と人々の倫理	P. 144
5-7. メディアとソフトパワー	P. 158
第6章 後援・協賛・賛助・協力	<u>P. 172</u>
第7章 第71回会議実行委員あとがき	<u>P. 180</u>



第1章

日米学生会議

第1章 日米学生会議

1-1. 第71回日米学生会議実行委員長挨拶

2019年8月7日、高知県。実行委員の全体ミーティングの部屋へ向かう私の足取りは重たかった。約1年の準備期間の後に迎えた第71回の本会議3日目のこの日、実行委員会の雰囲気は最悪だった。前日にも想定外のトラブルで日米双方の実行委員の間で不満が溜まっていた中、この日のプログラムの担当であった実行委員と他の実行委員の連携が上手くいかず、皆のストレスが限界に達した。そして何を隠そうその担当の実行委員とは自分であった。この部屋に入ったが最後、全員が言いたい事を言い終わるまで自らが非難的になる事を覚悟した。ミーティングが始まる前、米国側の1番仲の良かった実行委員と携帯のメモで会話をした。終わったらハグしてくれと、ただそう頼んだ。

開始早々、「非難しに来たんじゃない。一緒に状況を改善したいんだ」と言われた。しかしその後には「非プロフェSSIONAL的だ」、「私達の信頼に関わる」と言ったきつい言葉が飛び交う。言いたい事を上手く英語で言えず、英語への通訳を日本語の分かるメンバーに頼むと、「全員が理解するために英語で喋ってくれ」と容赦ない言葉が返ってくる。泣き崩れミーティングに参加することすらできない実行委員さえいた。自分が悪いのをわかっていても、コミュニケーションの難しさを痛感した。お互いを傷つけあったようにしか見えなかったが、皆が会議を成功させたいという同じ目標に向かっていく故の事と皆理解していた。お互いの理想と思いがぶつかりあう瞬間がそこにはあった。

日米学生会議は1934年に日米間の平和を願う4名の日本人大学生によって創設され、少しずつ形を変えながら85年もの間存続してきた日本最古の国際学生交流団体である。71回目の開催となる今年度は「学生が紡ぐ日米平和～対話と衝突から己を拓け～」をテーマに日本側5名・米国側8名の実行委員で企画・運営を行なった。70回の参加者の経験やそれぞれが胸に抱く理想の会議像を詰め込んだテーマであった。85周年の節目の開催年ということもあり、日本側参加者には事前研修の段階から過去を振り返り日米の平和に向き合う時間を繰り返し設けた。夏の本会議では米国側参加者と共に戦争や原爆の歴史について議論し、我々日米学生会議の創設の理念に立ち返り本来の存在意義を確かめた。

平和とは表面的な議論で達成可能ものではない。その達成には互いに向き合わなければならない相手の一面を直視する必要がある、その一面が歴史であったり思想であったり政治体制であったりするわけだが、これを最小のスケールで考えると個人の価値観に行き着くのではないだろうか。日米学生会議の場合、もちろん日米の学生の交流を行う上で政治や歴史、国際情勢の話は必要不可欠である。だが本質的に最も重要なのはお互いの価値観をぶつけ合い、根底からの相互理解に向けて努力することだと、日米学生会議での経験を踏まえて強く思う。

この3週間お互いの価値観をぶつけ合い、吐きそうなほど自分の感情と脳みそを揺さぶられる経験にこそ、日米学生会議の掲げる「本音の対話」が存在すると私は考える。これこそ日米学生会議をそれたらしめるものであり、この長きに渡って数多くの学生を惹きつけてきたものなのだ。日米の平和が数十年も昔に達成され、他に数え切れないほどの交換留学プログラムや異文化交流事業がある今日だが、学生の手で作り運営される日米学生会議でしか経験できないものがあると、参加者・実行委員両方の立場を経験し自信を持って断言できる。

巷に溢れる、笑顔でレクリエーションをやって集合写真を撮るだけの「異文化交流」なんてと、この日米学生会議での経験を経た今、躊躇なくまた本心から思う。美辞麗句や単に楽しかったという言葉では語り切れないものがここには詰まっている。

この報告書で語られるのは、日米学生会議のほんの1部分でしかない。

もっと知りたくなった時、この本の中にある場面の中に入り込みたくなった時、日米学生会議への扉は、いつ誰にでも開かれている。

第71回日米学生会議 日本側実行委員長
タクール小迫 亜満

1-2. 日米学生会議とは

日米学生会議は1934年、満州事変以降失われつつあった日米相互の信頼回復を目指した、日本人学生たちにより創設された。この日本初の国際学生交流プログラムは「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という創立当時の理念に基づき、戦争による会議中断を含め様々な困難を乗り越え現代まで継承されてきた。日米学生会議は創設以来、学生の相互理解と友情、信頼関係を醸成し続け、毎夏日米交互で開催される約3週間の会議は、学生の手で企画・運営されている。

1-3. 日米学生会議の歴史

1934年～1940年 初期の日米学生会議

日米学生会議は1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも4名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

1947年～1954年 戦後の日米学生会議

戦争の終結によって会議は再開を見たものの、戦前とは異なり、1953年までは日本のみでの開催となった。翌1954年、戦後初の米国開催として第15回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は1955年から1963年まで再び中断された。

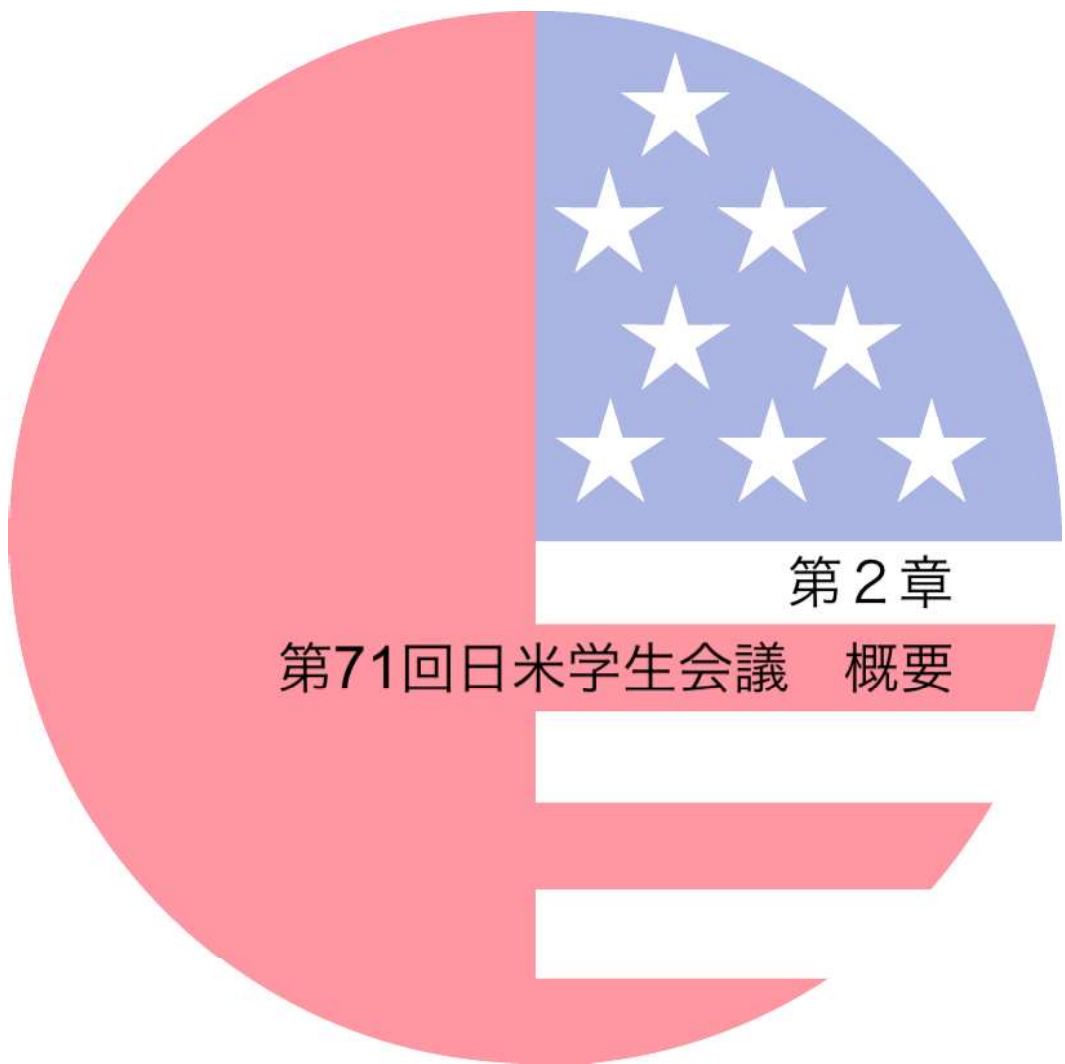
1964年～今日の日米学生会議

1964年、OB/OGからの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並治が理事長を務める一般財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第16回会議はリードカレッジで開催され、77名の日本人学生と62名の米国人学生が参加した。

1973年の第25回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を1ヵ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。80年の歴史を持つこの会議において、最も意義のあることは、創設以来、その企画、運営を両国の学生が主体的に行っていることである。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。日米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。

1-4. 本文中の略語説明

JASC(ジャスク)	: 日米学生会議 (Japan-America Student Conference)
JASCer(ジャスカー)	: 日米学生会議現役参加者及び過去参加者
IEC	: 日本側主催団体の国際教育振興会 (International Education Center)
ISC	: 米国側主催団体 (International Student Conferences)
EC	: 実行委員会、または実行委員 (Executive Committee)
JEC	: 日本側実行委員会 (Japanese Executive Committee)
AEC	: 米国側実行委員会 (American Executive Committee)
デリ、デリゲート	: 日米学生会議参加者 (Delegate)
ジャパデリ	: 日本側参加者 (Japanese Delegate)
アメデリ	: 米国側参加者 (American Delegate)
アラムナイ	: 日米学生会議 過去参加者 (Alumni)
サイト	: 本会議開催地 (Site)
RT	: 分科会 (Round Table)
環境 RT	: 「環境とテクノロジー」分科会
スポーツ RT	: 「スポーツが作る健康」分科会
ダイバーシティ RT	: 「ダイバーシティ」分科会
ナショナリズム RT	: 「ナショナリズムとグローバリズムの関連性」分科会
東アジア RT	: 「東アジアにおける日米関係」分科会
LTE RT	: 「法・技術の真価と人々の倫理」分科会 (Law, Technology and Ethics)
メディア RT	: 「メディアとソフトパワー」分科会



第2章

第71回日米学生会議 概要

第2章 第71回日米学生会議 概要

2-1. 第71回日米学生会議テーマ

学生が紡ぐ日米平和 -対話と衝突から己を拓け-

The Evolving Japan-U.S. Relationship: Think Globally, Act Locally

第71回日米学生会議は、私たちの原点である日米関係に今一度焦点を当て

その平和を次の世代へ継承していくことを理念に掲げる。

第71回日米学生会議参加者はこの理念に共感すると共に

会議での経験を通して成長する姿勢を養う事を大いに期待する。

普段内に秘めている思いや考えを参加者と共有することで

議論を深め、社会に新たな価値を提供する存在になることを切望する。



2-2. 第71回会議 開催概要

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第71回日米学生会議実行委員会

【開催期間】

会議開催期間：2019年8月5日～8月23日

事業実施期間：2019年4月1日～2020年3月31日

【参加者】

日本側：33名（実行委員5名を含む）

米国側：32名（実行委員8名を含む）

【開催地及び、日程】

高知県：2019年8月 5日～8月10日

京都府：2019年8月10日～8月13日

岐阜県：2019年8月13日～8月17日

東京都：2019年8月17日～8月23日

2-3. 第71回日米学生会議 活動内容

1. 分科会活動

【目的】

学生の知識・調査力の向上と相互理解、その過程を通じた人間的成長を主目的とする。
特定の議題に対し、4月～7月の事前準備期間、8月の本会議期間を通して集中的に議論が行われる。

【分科会一覧】

- 1) 環境とテクノロジー
- 2) スポーツが作る健康
- 3) ダイバーシティ
- 4) ナショナリズムとグローバリズムの関連性
- 5) 東アジアにおける日米関係
- 6) 法・技術の真価と人々の倫理
- 7) メディアとソフトパワー

【活動概要】

本会議において活動の中心となる分科会が7つ設けられており、日米各5名の学生が、本会議期間中に約40時間もの時間をかけて議論を重ねる。学生たちは、議題や開催地に対して理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、民間企業、大学、NGO、NPO及び研究機関などへ訪問・調査を行いながら、議論の質向上を図る。

特にフィールドトリップは議論の手触り感を飛躍的に高める重要な機会であり、議論に多面的な視点や、具体的な情報を得ることに繋がる。

2. 全体活動

【フォーラム】

各開催地のテーマに沿って随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、又は地域の方々、学生を交えたパネルディスカッションなどを通して、議論に新たな視点や客観性を得たり、社会に対して学生の意見を発信したりする機会を創出する。

【セッション】

全員が議論できるような議題や問題を設定し、分科会の垣根を超えた議論・交流の機会を創出する。

【リフレクション】

基本、各サイトの最終日に行われる。参加者が一堂に集い、会議中に感じた喜びや発見だけでなく、葛藤や悩みも自発的に共有する時間である。本心で語り合うことで、参加者間に相互理解が生まれ、信頼構築の一助となる。また、他者の思いを真に理解することで、本会議期間中がさらに密度濃いものとなる事を期待している。

【ファイナルフォーラム】

最終開催地で行われるファイナルフォーラムでは、主に分科会議論の内容や成果・活動報告を行う。第71回日米学生会議の成果として、学生なりの視点から見た現代社会の諸問題に対する考えを発信する。

2-4. 第71回日米学生会議実行委員名簿

日本側実行委員会



タクール小迫 亜満

国際教養大学 国際教養学部 2年
第71回日米学生会議日本国側実行委員長

コーディネーター:

高知サイト・東京サイト・「東アジアにおける日米関係」分科会

担当: 財務・防衛大学校研修・自主研修



南 秀弥

法政大学 国際文化学部 国際文化学科 情報文化コース 4年
第71回日米学生会議日本国側副実行委員長

コーディネーター:

高知サイト・京都サイト・「法・技術の真価と人々の倫理」分科会「ナショナリズムとグローバリズムの関連性」分科会補佐

担当: 選考・直前合宿・報告書・リエゾン



アドリアン ウィルダンディヤワン

電気通信大学 情報理工学域 4年

コーディネーター: 東京サイト・「ダイバーシティ」分科会

担当: 広報・春合宿・報告会



並木 祐太

明治大学 総合数理学部 4年

コーディネーター:

岐阜サイト・「環境テック」分科会・「スポーツ」分科会

担当: 広報・春合宿・自主研修



村上 真優

国際基督教大学 教養学部 3年

コーディネーター:

京都サイト・岐阜サイト・「ソフトパワー」分科会

担当: 選考・自主研修・直前合宿・報告会

米国側実行委員会



Jamie Miura

McGill University

第71回日米学生会議米国側実行委員長

コーディネーター: 岐阜サイト



Kaho Maeda

Northeastern University

第71回日米学生会議米国側副実行委員長

コーディネーター:

高知サイト・「法・技術の真価と人々の倫理」分科会



Shunji Fueki

Soka University of America

コーディネーター:

東京サイト

「ナショナリズムとグローバリズムの関連性」分科会



Aimee Rodrigues

Washington and Lee University

コーディネーター:

岐阜サイト・「環境とテクノロジー」分科会



Makiko Miyazaki

Wellesley College

コーディネーター:

東京サイト・「東アジアにおける日米関係」分科会



Mason Williams

University of St. Thomas

コーディネーター:

京都サイト・「メディアとソフトパワー」分科会



Nathaniel Chute

Wake Forest University

コーディネーター:

京都サイト・「スポーツが作る健康」分科会



Teresa Wrobel

University of Alaska Anchorage

コーディネーター:

岐阜サイト・「ダイバーシティ」分科会

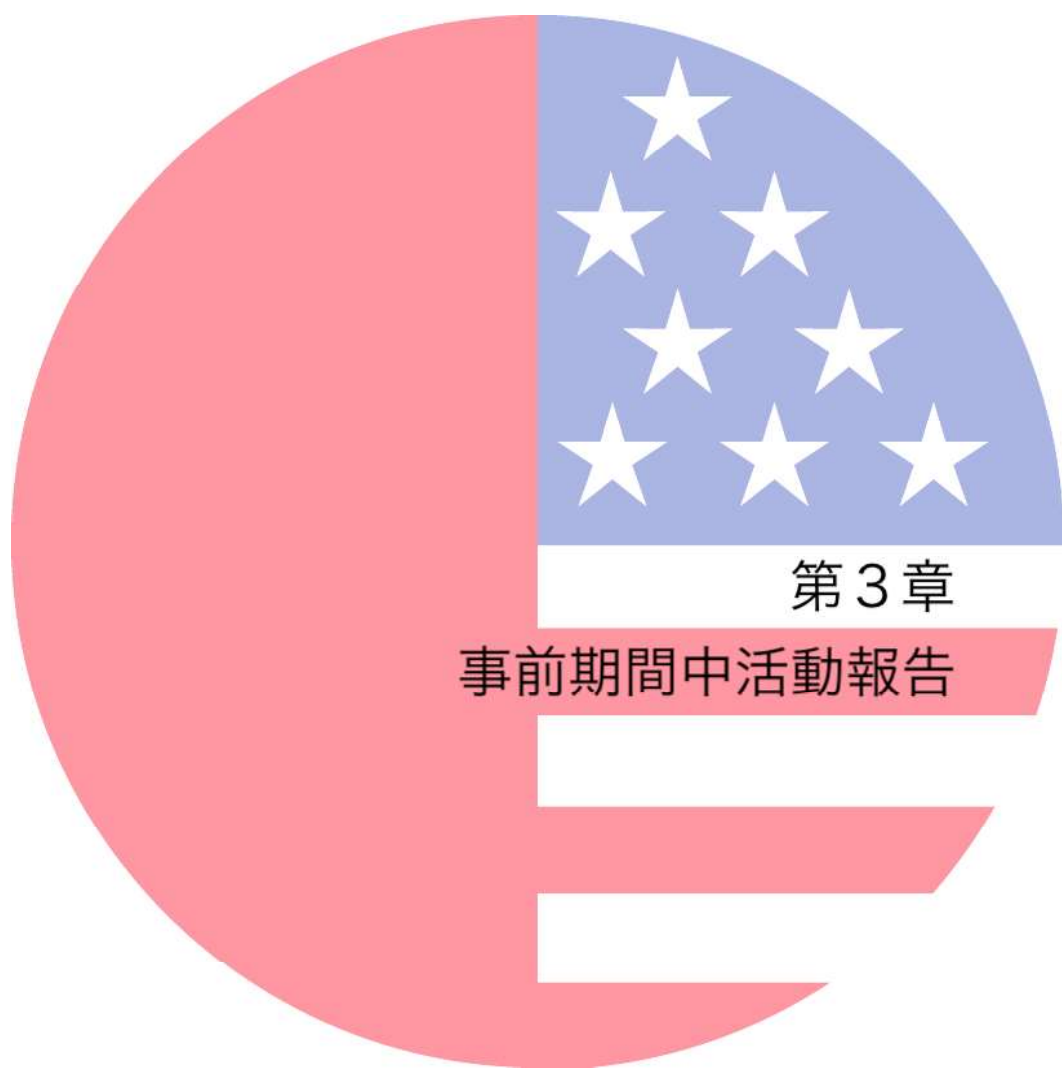
2-5. 第71回日米学生会議 参加者名簿

日本側参加者

氏名	大学	学部・学科・専攻	学年	分科会
白石 智鏡	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	2	ダイバーシティ
岩田 純奈	慶應義塾大学	医学部医学科	3	ダイバーシティ
岩淵 文和	福岡教育大学	教育学部初等教員養成課程英語選修	4	ダイバーシティ
高橋 真央	東海大学	教養学部国際学科	3	ダイバーシティ
植村 凧沙	早稲田大学	文化構想学部国際日本文化論プログラム	2	メディア
野澤 玲奈	早稲田大学	文化構想学部国際日本文化論プログラム	3	メディア
深津 佑野	上智大学	法学部国際関係法学科	2	メディア
雨宮 愛	京都大学院	経営管理教育学部	M2	メディア
木村 勇人	慶應義塾大学	法学部政治学科	2	東アジア
マーロー瑛実利 メガン	国際基督教大学	教養学部 アーツ・サイエンス学科	3	東アジア
小侯 裕紀	防衛大学校	人文社会科学群国際関係学科	3	東アジア
武末 崇義	東京外国語大学	国際社会学部国際社会学科	2	東アジア
徳永 大貴	九州大学	工学部機械航空工学科	3	ナショナルリズム
安藤 飛悠吾	名古屋市立大学	薬学部生命薬科学科	3	ナショナルリズム
井上 大誠	明治大学	国際日本学部国際日本学科	4	ナショナルリズム
若井 香穂	明治大学	国際日本学部国際日本学科	2	ナショナルリズム
坂東 菜唯	早稲田大学	政治経済学部政治学科	3	LTE
小溝 舞	慶應義塾大学	法学部政治学科	2	LTE
本田 智巳	早稲田大学	文化構想学部	4	LTE
野村 紗里	九州大学	共創学部	2	環境
細田 佳絵	慶應義塾大学	環境情報学部環境情報学科	2	環境
大澤 麻璃	明治大学	国際日本学部国際日本学科	2	環境
鈴木 龍一郎	国際教養大学	国際教養学部国際日本学科	2	環境
藤波 玲	慶應義塾大学	法学部法律学科	3	スポーツ
井口 リと	慶應義塾大学	環境情報学部環境情報学科	2	スポーツ
山崎 敏幸	獨協大学	外国語学部英語学科	4	スポーツ
山崎 綾香	法政大学	グローバル教養学部	2	スポーツ

米国側参加者

<u>Name</u>	<u>University/College</u>	<u>Major</u>	<u>Class</u>	<u>RT</u>
Amelia Stastney	University of Wisconsin, Madison	Intl. Studies	2020	Diversity
Kerry Walker	Smith College	East Asian Languages & Culture	2021	Diversity
Omar Benjamin	Wake Forest University	Japanese Language and Culture	2020	Diversity
Celinda Chang	Tulane University	Asian Studies and Health & Wellness	2020	Culture
Lindsey Kosaki	Gonzaga University	Intl. Relations, Asian Studies	2020	Culture
Michelle Tan	Washington University in St. Louis	Film and Media Studies	2019	Culture
Nia Whitmal	Yale University	Anthropology	2021	Culture
Madeline Wiltse	John Hopkins University SAIS	American Foreign Policy	M1	East Asia
Shihori Asaoka	University of South Florida	Global Studies	2021	East Asia
Quinn Bulkeley	Smith College	East Asian Languages and Literature	2021	East Asia
Shuhui “Nicole” Wu	University of California, Berkeley	Economics and Media Studies	2019	East Asia
Alec Mesropian	University of California, Berkeley	Global Studies	2021	Nationalism
Catherine Petersen	Barnard College, Columbia University	Political Science	2022	Nationalism
Carly Shiever	Hobart and William Smith Colleges	Intl. Relations and Asian Studies	2021	Nationalism
Christopher Wever	Indiana University, Bloomington	Finance and Info Systems Management	2020	Nationalism
Eric Xue	Yale University	Computer Science & Mathematics	2022	LTE
Kyra Rubinstein	Tulane University	Mechanical Engineering	2021	LTE
Lauren Hom	University of California, Berkeley	Data Science & Interdisciplinary Studies	2020	LTE
Emily Christopher	Pomona College	International Relations	2021	Environment
Lister Zhile Chen	University of California, Berkeley	Astrophysics & Applied Math	2022	Environment
Paul Horgan	Wake Forest University	Economics	2021	Environment
Sarah Ducharme	Smith College	Government	2021	Environment
Grace Hartley	Portland State University	Social Sciences	2019	Health
Steven Omondi	Williams College	Computer Science and Japanese Language	2020	Health



第3章

事前期間中活動報告

第3章 準備期間中活動報告

3-1. 春合宿



【概要・目的】

春合宿とは、選考委員会により約1ヵ月以上かけて全国から選抜された参加者28名が初の顔合わせする2泊3日のプログラムである。本合宿を通して、参加者は日米学生会議の歴史と文化を学び、英語での議論や、ビジネスマナー、分科会活動など、日米学生会議の基礎を身に付け、夏の本会議に向けての第一歩を踏み出す。

【日時】 2019年4月27日(土)～4月29日(月)

【場所】 国立オリンピック記念青少年総合センター

【スケジュール】

〔4月27日(土)〕

- 開会式 71回会議概要説明
- Ice Break
- 分科会議論

〔4月28日(日)〕

- Wake-up Talk
- RT Trip
- ようこそ先輩・懇親会

〔4月29日(月)〕

- Outside Time
- RT Report
- 春合宿Reflection

1日目 - プログラム詳細

【開会式、第71回会議概要説明、アイスブレイク】



第71回会議の実行委員長による挨拶の他に、前代表理事の伊部正信氏と現代表理事の金野洋氏によるご挨拶もいただいた。続いて、ハンドサインやJASCメールなどの日米学生会議の文化を参加者に紹介した。次に、開会式からの緊張をほぐすために、2つのアイスブレイクゲームを行った。1つ目は自己紹介ゲームであり、氏名や所属などのような一般項目の他に自分の面白いところもアピールしてもらった。2つ目はシャレードというジェスチャーゲームを行った。

【分科会議論(RTタイム)】



各分科会が集まり分科会のテーマやフィールドトリップ先や今後の分科会の方針などについて議論してもらった。その上に今後の活動に使用する公式のグループ写真も撮影してもらった。

【1日目 - 参加者の声】

合宿1日目。ワクワクと緊張。

無限の可能性を感じながら集まった、JASC春合宿。私たち第71回参加者は、活動に取り組む姿勢について、示唆に富んだ言葉を頂いた。それは、プロ野球の野村(元)監督がインタビューで引用した、平戸藩主松浦静山の言葉だった。

「勝ちに不思議な勝ちあり、負けに不思議な負けなし。」

「勝因は実力だけじゃない、偶然もある。今、自分がJASCに参加できたのも偶然の産物なのかもしれない。」自分がJASCに参加する事の意義を捉え直す貴重な機会を得ることができた。そして、この場に参加できなかった全ての人達の想いと共にこれから精一杯頑張ろうと強く感じた。

また、1日目は初めて参加者とお話をするとても貴重な時間だった。1人1人に目標や頑張ってきたことがあり、強く前に進む力があるように感じた。そして、それぞれ自分なりに乗り越えたい「何か」を持っていた。今私は、そんな切磋琢磨できる仲間と共に会議をより良いものにしたいという気持ちで一杯だ。新しい環境へ緊張する気持ちはほとんど消え、かわりに今後の討論へ向けての新たな緊張感がもてた日だった。

(植村凧沙・早稲田大学 2年)

2日目 - プログラム詳細

【Wake-Up Talk】



日米学生会議の本会議で避けては通ることのできないのが、英語でのディスカッションである。言語的ハンデを少なからず背負う日本側参加者たちがアメリカ参加者たちと対等な議論をするにはどうすればよいのかを考える足掛かりとなるプログラムであった。参加者たちは小グループに分かれて、1つのトピックについて利点不利点の双方を考慮することに留意して、建設的な議論を繰り広げた。

【RT Trip】



分科会ごとに自由に活動するための時間として設けられ、分科会独自の知識や見分を高めるべく、
宿舎であるオリンピックセンターを離れ屋外研修を行った。チームビルディングに励む分科会や、
外部団体と交流する分科会、それぞれのカラーが垣間見える時間となった。

【ようこそ先輩・懇親会】



日米学生会議過去の参加者の方々にお越しいただき、現役参加者との交流を行って頂くプログラム
である。会議が現在のキャリアにどのように活かされているのかというエピソードや参加者に向けて
アドバイス等貴重なお話を伺う機会を頂いた。また、懇親会では過去の思い出話に花を咲かせる場
面も見受けられ、有意義な時間となった。

【参加者の声】

2日目の夜、私たちは「ようこそ先輩」に参加し、これまでJASCの歴史を築いてきた先輩の皆様と交
流する機会を頂いた。午前中に名刺交換などの基本的なマナーを教わり、参加者同士での練習を
行ったが、今までに出会ったことのない様々な世界で活躍されているアラムナイの方々との交流に初
めは緊張してしまう。しかし、次第にお話を聞くうちに先輩方に圧倒されるだけでなく、アドバイスや声
援に背中を押され、自分もこの大きなコミュニティの一員だという実感が持てるようになった。平成と
令和、2つの時代の境で活動をする第71回参加者として、これから自分が日米学生会議という長い
歴史の一部になり、そのバトンを受け継ぐ責任の重さを痛感すると共に大きな使命感を感じた。貴重
なお話を聞いていると時間が経つのもあっという間で、もっとお話ができればと悔やむ程に有意義な
時間を送ることができた。

(白石智鏡・立命館アジア太平洋大学 2年)

【2日目 - 参加者の声】

前日の夜、議論が夜中の2時まで白熱したその環境に感謝の念を覚えながら、「議論は楽しいけど、このまま机上の空論で終わるのは嫌だ」と何かくすぶっていた。そんな中で、初めてフィールドに出かけた時、百聞は一見にしかずということわざを体感することになった。私にとって、LGBTQの人と接するのは初めてで、全体の熱気に驚きながら、インタビューをして個人の生の声が聞けたことは、今まで読んだどの本よりも強く印象に残っている。今日出会った全員がレインボーの1つ1つの色のように輝ける社会を実現すべく、彼らの声を常に思いながら議論していくことを決意した。

ようこそ先輩で、最も心に残ったアドバイスがあった。「君たちは、会議で出会う子供達にとって憧れの存在だ」。自分がJASC71の参加者だということはすなわち、議論して結果を出す参加者であるだけでなく、次のJASCや社会を作る子供が目指すロールモデルになることでもあるという自覚を持つことになった。自分の想い、仲間の想い、現場の想い、支えてくれる人の想い、そして子供たちの想い、全てを受け止めながらJASC71に全力投球したい。

(岩田純奈・慶応義塾大学 3年)

3日目 - プログラム詳細

【RT Report】



他の参加者から自分の分科会に活かせるアイデアを集める目標で、今まで分科会内で議論したり計画したりした内容を発表してもらった。そして、聞く側からフィールドトリップ先のアイデアやお薦めの参考書などを付箋に書いて共有してもらった。

【春合宿 Reflection】

日米学生会議の1つの文化であり、1時間程度自分と向き合う時間である。今回は35人の全員が円を作って座って、2泊3日の春合宿での出来事や各自の今後の目標などについて考える機会を設けた。

【参加者の声】

参加者全員が1つの部屋で大きな輪を作り、自由に思いの丈を語る事ができる「なんでも共有していい場」、リフレクションは、春合宿で私が1番自分自身と向き合うことの出来た瞬間であった。私は正直初めは何も共有するつもりはなく、共有したいことなど思いつきさえもしなかった。しかし、他の参加者が正直な気持ち・考え方・夢などを次々に語り、自己表現している姿を見ているうちに、徐々に彼らに圧倒されてしまった。自分は劣っているのではないかという不安から自身を素直に表現できず、誤魔化してばかりいた自分自身の受け身の姿勢に気づき心の底から恥ずかしく感じた。この葛藤を言語化し、本心から変わりたい・成長したいという想いをその場で共有したことで、リフレクション終了後には実は同じ不安を抱えていた、共感したといった言葉を仲間から聞くこともできた。自身を素直に表現したことで、自分のみならず他者に対しても初めて正面から向き合えたリフレクションは、私にとって春合宿で最も充実した時間だったと言える。

(高橋真央・東海大学 3年)

【3日目 - 参加者の声】

春合宿3日目は、各分科会が議論の進捗報告と本会議に向けての見通しをプレゼン形式で発表した。参加者1人1人が全く異なる学術的背景や見方・考え方を持つ上に、発表準備に割ける時間が限られており、分科会として意見をまとめ発表することは決して容易なことではなかった。しかしながら、そのような状況下においても各分科会からは熱意のこもったレベルの高い発表が行われ、私自身刺激を受けると同時に、日米学生会議の一員である自覚を改めて感じた瞬間でもあった。

日米学生会議では、個々人が自らの考えを惜しみなくぶつけることができ、全ての参加者がそれに応え得る知識と能力を有している。このような環境下で議論を交わすことは学術的知見の拡大や理解の深化だけでなく、意識の改変や固定観念を壊すチャンスにもなると考える。今後の事前研修・本会議における議論や他者との関わり合いの中で、日米学生会議が自他共に成長できる意義ある場になるよう努めたい。

(岩淵文和・福岡教育大学 4年)

【春合宿全体を通しての感想】

春合宿の初日、年齢やバックグラウンドも違い、ましてや知人などほとんどいないところにいきなり集められた28名は、本気のディスカッションができるのか、他の参加者々と本音で語り合えるのかなど、様々な不安な思いを抱いていた。だが春合宿が終わった今、3日間という短い時間とはとても思えないくらいの結束力の高さ、そして個々人の自信を感じる。その大きな要因の1つにタメロ文化があると思う。我々は普段、年上を目の前にすると敬語を使い、相手の気を悪くしないようにと本心を伝えることを控える。

しかし、タメロ文化のおかげで年齢や所属を考慮することなく、同年代の友人の様な気持ちで本音を話すことが出来た。「私にはこう思う」「その意見には反対だ」など、心中を率直に述べることで、相手への信頼を築くことが出来た。議論の外でも、自分の興味のある分野や、趣味に関して、なんのフィルターを通すことなく会話を楽しむことが出来たと感じる。その結果か、発言を尻込みすることもなくなり、自分は意見を強く述べる事ができるんだという自信を持つことが出来た。

春合宿を通して得たこの2つは、自分自身の今後の日米学生会議の活動を実りある物とするための大きな一歩になったと思う。

(鈴木龍一郎・国際教養大学 2年)

【春合宿全体総括】

春合宿とは日米学生会議日本側参加者にとっての入学式であると考えている。昨年9月、春合宿の企画担当になり、28名の新たなJASGerを迎える準備が始まった。私の中でこのイベントの主旨は2つあった。1つ目は全国から集まる専攻も学年も異なる大学生たちを1つのチームとして結束させ、本会議に向けた最高のスタートを切ること。2つ目は例年春合宿中に行われる「ようこそ先輩」で歴代のアラムナイに今年の日本チームをお披露目して先輩方からアドバイスを頂くこと。地方参加者も少なくない中、実行委員会と28名の参加者が一度に顔をそろえ2泊3日の時間を共に過ごすことは、貴重であり非常に有意義なものであったと感じる。

近年の日米学生会議の歴史でも異例の実行委員5名体制での運営となった今年度の春合宿は、吉田恵里奈(第70回参加者)、堀晃希(第70回参加者)、2名の協力なしには成し遂げることは到底不可能であったと実際にイベントを終えて改めて感じる。運営に手いっぱいになりかけていた実行委員に代わって参加者への細かい配慮や、機転を利かせた判断でトラブルを防いだ場面もあり、大変心強い存在であった。春合宿は71回実行委員会にとって初めて運営を担うイベントであり、反省点も多く見つかったが、今後に向けて多くを学部ことが出来た。この経験が参加者、実行委員を問わず、71回会議メンバー全員の今後の成長のきっかけになることを祈る。

(並木祐太・明治大学 4年)

3-2. 防衛大学校研修

【概要・目的】

本研修の目的は、神奈川県にある防衛大学校での1泊2日の研修を通して、日本の安全保障体制について見識を深めることにある。研修では、教官の方々による講義、防衛大学校内の見学や基本教練という基礎訓練の体験、そして防衛大学校の学生との討論会が行われた。1日の最後には防衛大学校生との懇親会も開催されるなど、学生同士の交流を促す場も設けられた。今年度は会議のテーマとして日米平和を掲げ研修で広島を訪れるなど、安全保障や防衛といったハードな意味だけでなくソフトな側面から戦争を考える機会が多く、例年にも増して自衛隊はもちろん日本の安全保障体制のあり方について真剣に考える良い機会となった。

自衛隊の海外派遣はどうあるべきか、また日本を取り巻く安全保障上の変化にどう対応するべきか、そしてこれからの日米同盟はどうあるべきか、というような本質的な問いについて現場の自衛官や教官からお話を伺い、未来の幹部自衛官達と議論を交わしたことは、8月に本会議を控えていた私たちにとって大変貴重な経験となったと言える。

【日時】2019年6月6日(木)～6月7日(金)

【場所】防衛大学校

1日目 - プログラム詳細

特別講義① 防衛学

- ・講師: 河上康博 1等海佐
- ・テーマ: 自由で開かれたインド太平洋構想 ～日米同盟のさらなる進化～

防大ツアー (資料館研修)

学校内にある資料館にて、防衛大学校について解説したビデオを鑑賞し、歴史などの側面から防衛大学校の生活を学んだ。



基本教練

防衛大学校での生活の基本や規則について説明を受けた。その後、各主動作の説明を受け、実際に体験した。厳しい規則の中で生活する防衛大生が、普段どのような教育や訓練を受けているのかを学んだ。

防衛大学校生との懇親会

議論などの堅い交流だけでなく、同世代の学生同士として親睦を深める観点から立食形式での懇親会を行った。非常にフランクな雰囲気の中食事と会話を楽しみ、防大生とJASC側参加者の距離が縮まったのを明確に感じた。



学生舎の見学

防大生が普段生活している空間に、特別にそのままの状態ですを踏み入れることが出来た。

また、日夕点呼や清掃の見学も行い、目の前で繰り広げられる自分達の育ってきた環境とは360°違う景色は、多くの参加者にとって衝撃的だった。

学生討議



【参加者の声】

防衛大学校に到着し、私たちは作業服と呼ばれる訓練着に着替え基本教練という基礎訓練に参加した。行進の動作や掛け声の練習をする間、まるで実際の防衛大生になったかのような気分だった。その後約2000人の学生の歓迎を受けて一斉喫食、そして午後の河上康博1等海佐による日米安全保障に関連する講義、資料館・防大ツアーと普段立ち入ることができない防大の中身を広く知ることが出来た貴重な経験だった。その1日目の締めくくり、学生討議の時間は各分科会ごとにさまざまなテーマを防大生と議論した。私の所属する分科会では安全保障やPKO、核保有についてなどセンシティブな問題を扱ったが、お互いに本音で語り合えたことで様々な視点や考えに触れることができ、双方にとって充実した時間だったと感じた。

(若井香穂・明治大学 2年)

2日目 - プログラム詳細

課業整列見学

防大生は毎日AM 08:10(マルハチヒトマル)の国旗掲揚の後、整列して行進をする。防大生と同様に国旗掲揚をし、行進を高台の特等席から見学した。まるでパレードかのような一糸乱れぬ見事な隊列にただ圧倒された。

特別講義② 国際関係学

講師: 武田康裕教官

テーマ: 日米同盟と東アジアの安全保障

【参加者の声】

2日目は5:30に起床し、日朝点呼見学のため学生舎へ向かった。6:00丁度になると起床ラッパの音が響き渡る。蜂の巣を突いたかのように次々防大生が建物の前に出てきて、いつの間にか整列をして乾布摩擦や筋トレをする様子を見て圧倒されたが、寝起きとは思えない俊敏さで作業する様子に防大の規律の正しさを感じた。その後、見学した課業整列でも同じく規律正しい行進を見ることができた。講演では武田康裕教官から「日米同盟と東アジアの安全保障」というテーマでお話を伺った。日本国憲法から現在の米政権事情など多岐にわたる問題について学生と一緒に意見を交わしていただき、大変充実した時間となった。急遽観閲行進の練習も見学させていただけることとなり、あいにくの雨天だったが何事もないかのように執り行われた一糸乱れぬ行進は圧巻であった。

(井口りと・慶応義塾大学 2年)

【総括】参加者

幹部自衛官を目指す人のための防衛省所管の学校、防衛大学校。この学校の存在を私は日米学生会議に参加するまで知らなかった。

一言で表すならば、この1泊2日の研修は私にとって「衝撃」そのものだった。防大生は皆秒針のある腕時計を身につけ、びっしり詰められたスケジュールをこなすために常に時間を気にしている。朝6時に起床を知らせるラッパの音が響き渡り、わずか5分の内に身支度を整え、6時5分には寮前に全生徒が整列。団体行動では当たり前の時間厳守を日々訓練するだけでなく、日常の中で完璧に実践していた。さらに驚いたのは防大生1人1人の志の高さである。ある防大生がインフルエンザになった時のことを、「完全な自己管理不足。有事の際に出動できないのは自衛隊員失格だ。」と話していたのは衝撃的だった。私達一般市民ならば、おそらく仕方がないの一言で片付けてしまうのではないだろうか。しかし彼らは「日本の平和と独立を守る」自分達の任務を第一に考えており、既にその責任感と意識の高さは立派な自衛官のそれであるかのように感じた。

また自衛隊云々以前に、同世代の学生が夢に向かって毎日頑張っている姿を見て、自らの日常のあり方を見つめ直すいいきっかけにもなった。こう感じたのは私だけではないはずだ。防大の校門を出た時には、JASCメンバーの顔が心なしかやる気に満ちている様に感じた。

(藤波玲・慶応義塾大学 3年)

防大側担当者 (第70回日米学生会議参加者)

6月6-7日の2日間に渡って防衛大学研修が行われた。

「昨年度、日米学生会議に防大生として参加して経験できたこと、得たことを他の防大生にも体験してほしい。」その強い思いから、今年度防大研修は責任者としてホストをした。

そこで、防大生という立場から本研修を振り返ってみたい。防大生は平日の外出が禁止されているため、外部の人と接する機会の少ない閉鎖的環境で生活していると言える。しかしながら、将来の士官に必要な広い視野を養うためには自らの知らない世界や価値観に触れることが不可欠だ。そのため、この研修ではJASCと防大生が交流できる機会を例年より大幅に設けた。訓練服装を着ての基本教練体験、安全保障の授業、懇親会、学生討議と、様々なイベントを通して、過去最多である約100名の防大側参加者含め、JASC側の参加者も新たな世界や価値観に触れられ、双方にとって刺激的な2日間であったと思う。

日本の国防を担うためのアプローチは決して軍事に止まることはなく、政治、経済を始め多岐に渡る。参加者1人1人がこの研修で知り合った仲間とこれからも交流を続けながら互いに高め合い、それぞれの分野で将来の日本を背負っていければ、本研修の究極的な目的は達成できたと言えるだろう。30年、40年後が楽しみだ。

(吉田恵里奈・防衛大学校 4年)

3-3. 広島自主研修



(2日目に訪れた原爆ドームにて)

【概要・目的】

今回の自主研修では広島県、その中でも広島市と福山市の2都市を訪れる。この自主研修の前半では、福山という一都市を題材にその地域で活躍している事業家・政治家の皆様にお話を聞き、実際に地方の現状とそれを踏まえて「地方創生」という言葉の中身には何が詰まっているのかを考察する。また、実際のお話を聞く中で自らのキャリア形成に役立てる。後半の2日間では広島市立を訪れ「平和」をテーマに学習をする。今年度の本会議のテーマ「学生が紡ぐ日米平和」を基本とし、今自分達の享受する平和のあり方について考え、それを継承・発展させるためには何ができるのか、学生という立場を意識して考えつくす機会としたい。

【日時】2019年6月29日(土)～2019年7月1日(月)

【場所】広島県 福山市・広島市・宮島

宿泊:ホステル「川手屋」

【スケジュール】

〔6月29日(土)〕

- ・鞆の浦見学
- ・カイハラ(株)会長や福山市政担当者様による産業講義
- ・出原広島県議、喜田福山市議、太田福山市議、小林衆議院議員による市政パネル
- ・グループディスカッション
- ・シャンティインディアにて夕食
- ・広島市へ移動

〔6月30日(日)〕

- ・平和記念公園にてガイドツアー
- ・平和記念資料館にて伝承講話、資料館見学
- ・広島市青年交流会館にて植松広島大学名誉教授による平和講義
- ・グループディスカッション

〔7月1日(月)〕

- ・フェリーにて宮島に移動
- ・宮島観光
- ・朝鮮高級学校にて見学、グループディスカッション

1日目 - プログラム詳細

①鞆の浦見学

鞆の浦地域をガイドさんに説明していただきながら散策し、街の歴史と今の姿を比較し学んだ。



②産業講義

プログラムの会場であるものづくり交流館の展示を材料に、福山市市役所産業振興課より中村様をお呼びして福山市の産業について見聞を深めた。



③市政パネル

カイハラ(株)代表取締役会長、出原広島県議、喜田福山市議の3名をお呼びし、福山市はもとより広島県、乃至は全国的な地方振興という多面的な切り口でパネルディスカッションを行った。



④グループディスカッション

パネルディスカッションのゲスト3名に加え、小林史明衆議院議員(地元選出)、大田ゆうすけ福山市議会議員のお二方を新たに交えて、学生とグループディスカッションという形で意見を交わした。複数個に分けたグループにはそれぞれディスカッションの最後に結論を出すテーマが与えられ、その形成に向けて異なる5人の大人の視点を盛り込みながら議論をし、発表した。

[テーマ一覧]

1. 福山市の総観光客数を倍増させるには
2. 持続可能な地方の農林水産業とは
3. 福山市の40歳未満の人口を増加させるには
4. 地方創生の社会的な意義/必要性とは何か



【参加者の声】

自主研修の1日目は福山市で「地方創生」という広範、また多角的な分野をテーマに、各々の理解を深められた時間であった。午前中は福山市の観光名所、鞆の浦を訪問し福山市の歴史的価値とその観光都市としての現状について学んだ。午後は実際に福山における産業と行政を第一線で動かししているゲストの方々のパネルディスカッションとグループディスカッションを通して「地方創生ってやっぱり面白いよな」と講演後、参加者が口を揃えて話していたのは彼らの地方創生にかける熱量と想いを感じたからだと思う。分科会として設定されていないテーマであったからこそ、参加者は各々のアプローチでその熱量に答えようと議論と発表を行うことができた。大変有意義な時間な時間であった。

(木村勇人・慶応義塾大学 2年)

2日目 - プログラム詳細

①平和記念公園見学

ガイド案内のもと、平和記念公園の歴史などを聞きながら施設を見て回る。平和を訴える象徴的な施設を訪れ、そこに込められた歴史や人々の願いを知った。また1日を通じて「平和」について考える土壌を築いた。



②伝承講話

被爆体験伝承者とは、被爆者の高齢化が進み、被爆体験をお話しされる方が少なくなっている中、被爆者の体験や平和への思いを語り継ぐ者として、広島市が平成24年度から養成。伝承者が受け継いだ被爆体験証言者の被爆体験と平和への思い、被爆の実相（戦時下の人々の暮らし、原爆被害の概要、原爆の人体への影響など）、伝承者としての平和への思いなど60分間の講話を聞く。

③平和記念資料館見学

平和について考え議論する前に、戦争とは何か、人の命が失われるとは何かを展示されているものから学んだ。本で読む以上の間接的にリアルな学習をした。



④グループディスカッション

1日を通じて自分が感じたこと、思ったことをグループ単位で共有し、そこから「平和」に関してテーマ別ディスカッションを行った。集中して平和について考える1日の集大成として、考えをまとめて共有し合った。



⑤平和講義

広島大学平和センターより名誉教授をお呼びし、近年の原爆に対する研究や被爆体験者としての視点をお話しいただいた。



【参加者の声】

2日目は広島市にて平和学習を行った。この日は日本側参加者にとって最も重要な学びの日になると、私は自主研修以前から意気込んでいた。実際はその期待以上に平和の尊さについて主体的に考え、白熱した議論を交わすことができたと考えている。今回、私は改装後初めて資料館を訪れたが、4年前とは展示資料が大きく変わっていたことに驚く一方で、核なき世界を目指す「ノーモア・ヒロシマ」の痛烈な叫びがとても印象に残った。「戦争の記憶」が「記憶の戦争」になってしまわぬように。21世紀の平和を実現するために、私たちはこの歴史をどのように受け止め、どのように現代を生きていくのか。この日の平和学習は本会議を控えた参加者各々に強烈なメッセージを与えたに違いない。

(井上大誠・明治大学 4年)

3日目 - プログラム詳細

宮島観光



広島朝鮮初中高級学校訪問

広島市内にある朝鮮初中高級学校を訪れた。

日米学生会議の歴史の中で一度も足を踏み入れたことがなく、参加者全員も全く初めての経験であった。教頭先生より学校の概要や学校を取り巻く状況について説明を受けた後、グループでの座談会形式で高校2年生の生徒達と交流を行なった。



【参加者の声】

3日目は、宮島観光、広島朝鮮初中高級学校への訪問および、学生との交流を行った。

宮島では厳島神社を訪れ、牡蠣めしやもみじ饅頭など広島名物を堪能した。これまであまり話したことがなかった参加者と話す機会が多く、本会議への不安が期待へと変わった。

広島朝鮮初中高級学校では、学生たちに校舎の中を案内してもらった後に1時間交流の時間があつた。朝鮮学校での学生生活や、将来の夢など初対面とは思えないほど活発な交流を行うことができた。朝鮮学校の生徒と交流する機会がこれまでなかったため最初は緊張したが、生徒達の明るさやフレンドリーさが緊張をほぐしてくれた。

(野村紗里・九州大学 2年)

【参加者の声】

「地方の産業振興」と「平和」という2つのテーマを掲げ、2泊3日の自主研修で広島を訪れた。はじめに訪れた福山では、地域で活躍する政治家の方々や、世界的に有名な「カイハラデニム」の貝原良治会長から興味深いお話を聞くことが出来た。その後、今まさにホットトピックである「地方創生」について、我々と議論を交わす機会もいただき、非常に学びの多いものとなった2日目には、原爆ドームと平和記念資料館を訪れた。教科書や写真で見るとは全く違う圧倒感があり、目を奪われると同時に衝撃を受けた。また、多くの外国の方が熱心に解説などに耳を傾けている姿が印象的で、「平和」という言葉の重みを再度実感した。本会議まで後1ヶ月。この広島研修で学んだことを生かしながら、さらなる準備に取り組みみたいと強く思った。

(藤波玲・慶応義塾大学 3年)

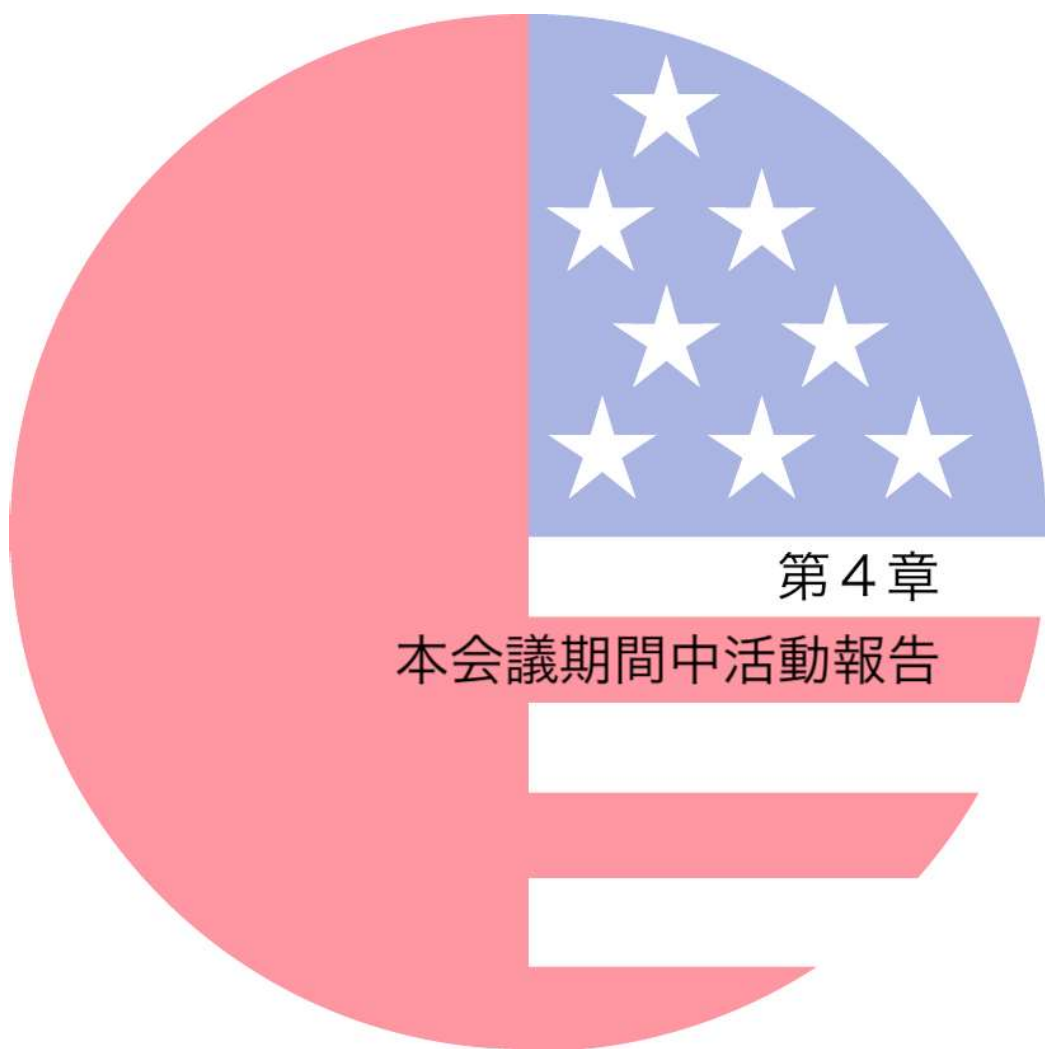


(最終日、広島朝鮮初中高級学校にて交流した学生達と)

【自主研修担当から】

私にとって自主研修は、71回の実行委員としての活動の中で、最も失敗を経験し、最もやりがいを感じ、最も目的意識を持ち、最も達成感を感じたものであった。1番参加者に聞かれた質問であった、なぜ「広島」なのか。答えは大きく2つある。1つ目は、「広島」に行くというよりも会議創設のきっかけとなった戦争の歴史、そして何が起こったのかを学び考えること無しでは、この会議が存続する意味は無いと考えたからだ。確かに日米間の平和は達成されたかに思えるが、それが永久に続くという保証はない。だからこそ我々日米関係の一端に関わる者達は、次世代に少なくとも2国間の平和を継承する義務があり、その上で過去の戦争について誰かの感情ではなく事実を学び、もし何かしらの感情を抱いたのであればそれを自分の中で落とし込めるまで考え、最後にアメリカ側の参加者と共有するというプロセスが必要だと考えた(自主研修の最後のプログラムとして8月の本会議中にディスカッションの時間を用意)。過去に取り残された関係とは往々にして醜いものがある。いつまでも過去しか見ないのであれば未来は永遠に生まれえないことは、どことは言わないが野菜の発酵食品が有名な国が証明している。その目的を達成するために広島が最適だと思った。2つ目は至極単純で、自分の生まれ育った故郷を仲間に知ってもらいたい、そこでどんな人がどんな思いで活動しているのかを伝えたかった。また、昨今ニュースで政治家の不祥事などが相次いで報道されることなどから、政治そのもの以前に政治家へのマイナスイメージが根強いことを周りの反応から感じていた中で、私の知る熱意を持って政治の道を進んでいる人の考えに触れて欲しかったというのも福山を選んだ(その企画を実現可能な場所として)理由の1つである。少し私情が混じった気がするが、結果オーライだと思う(多分)。結局終わってみればたかが2泊3日の小旅行のような短いものだったが、もし私が日米学生会議のハイライトを選ぶとすれば間違いなくこの自主研修を選ぶ。1番自分自身の嫌いな側面と直面したし、もっといい研修にできたと思うし、自主研修担当になんかならなければこんな仕事やらなくてもいいのにとしたことさえ何度もあったが、やってよかったと心の底から言える。この研修の実現にお力添えをいただいた福山市役所の皆様、鞆の浦観光案内所の皆様、パネル・グループディスカッションのゲストの皆様、広島平和記念資料館様、広島大学平和センター様、川手屋様、そして広島朝鮮初中高級学校の皆様、ありがとうございました。最後に、もしこの文章を最後まで読んでいて日米学生会議への参加を考えている人がいたら、参加者になったら自主研修に参加してみてください。きっと充実したものになります。

(タクール小迫 亜満・国際教養大学 2年)



第4章

本会議期間中活動報告

第4章 本会議期間中活動報告



4-1. 第71回日米学生会議 in 高知



【サイト概要】

日本の三大清流の1つである四万十川が流れ、四国山地と黒潮に接し、海、森林、川と豊かな自然に恵まれた高知県。雄大な自然の隣で暮らす、豪快かつ自由で温かい人々。そのような気風はジョン万次郎、坂本龍馬、板垣退助など近代日本の礎を築いた数多くの先人、偉人を輩出した。

一方で、高知県の現状を見つめると、現代日本社会が抱える地方の問題が浮かび上がってくる。ヒト・モノ・カネのサイクルが縮小し続ける人口減少は、地域経済に大打撃を与え、地方創生を目指す上で厚く高い壁になっている。

高知県では、観光、産業、文化面で様々な地域活性化の取り組みがなされている。戦後の不況を吹き飛ばし、市民の健康と繁栄を祈願して1954年に始まった”よさこい祭り”も高知県の個性豊かな地域文化を発展させ、今や全国に広がっている。

第71回日米学生会議は、”よさこい”のエネルギーを感じつつ、高知県で地方創生の取り組みを学び、また、その提言もしたい。近代日本を切り拓いた偉人の思いを継承し、日本社会が抱える大きな難題を突破すべく、次世代の開拓者を輩出しこれからの社会に貢献したい。

高知サイト担当実行委員

タクール小迫 亜満

南 秀弥

Aimee Rodriguez

Kaho Maeda

【高知サイト プログラム日程】

直前合宿期間: 2019年8月4日～2019年8月5日

高知サイト開催期間: 2019年8月5日～2019年8月10日

〔8月4日(日)〕

- ・日本側直前合宿 @高知県立青少年の家

〔8月5日(月)〕

- ・米国側参加者合流 @高知県立青少年の家
- ・両国参加者参加者交流会 @高知県立青少年の家

〔8月6日(火)〕

- ・第71回日米学生会議開会式 @オーテピア高知図書館
- ・IYEO高知(高知県青年国際交流機構)ワークショップ @オーテピア高知図書館

〔8月7日(水)〕

- ・土佐清水高校交流
- ・カツオのたたきワークショップ @清水高校
- ・足摺岬見学ツアー @足摺岬

〔8月8日(木)〕

- ・ジョン万次郎博物館ツアー @ジョン万次郎博物館
- ・宗田節ワークショップ @土佐清水市公民館
- ・土佐清水セッション @土佐清水市公民館

〔8月9日(金)〕

- ・学生よさこい @高知城
- ・高知フォーラム「地方創生フォーラム ～高知の今を知り、未来を語ろう～」@かるぼーと
- ・レセプション @かるぼーと
- ・よさこい祭り前夜祭 @高知市内

〔8月10日(土)〕

- ・坂本龍馬記念館見学 @坂本龍馬記念館

0. 直前合宿及び、両国参加者合流(8月4日～8月5日)



【概要/目的】

本会議前、日本側だけで活動する最後のイベント。

これまでの活動、議論を振り返りながら、本会議期間中、どう進んでいくのか、1人ひとりが考える重要な時間を過ごした。

直前合宿担当実行委員

南 秀弥・村上 真優

8月4日(日)

- 本会議プログラム説明
- 実行委員 業務説明&相談会
- 分科会中間発表準備

8月5日(月)

- スキット練習
- 分科会中間発表
- 分科会の垣根を超えた議論 (Joint RT)
- 米国側到着&Welcome Party
- 直前合宿リフレクション



↑ 両国参加者初顔合わせ



↑ 米国側到着(台風一過)

1. 第71回日米学生会議開会式(8月6日)

【プログラム内容】



式次第	
主催者挨拶	一般財団法人国際教育振興会代表理事 金野 洋
内閣総理大臣祝辞	日本国内閣総理大臣 安倍 晋三様(メッセージ)
実行委員長挨拶	第71回日米学生会議日本側実行委員長 タクール小迫 亜満
実行委員長挨拶	第71回日米学生会議米国側実行委員長 Jamie Miura
来賓挨拶	高知県文化生活スポーツ部部長、高知県サポート委員会副会長 橋口 欣二様
記念品紹介	日米学生会議特別仕様 鳴子(以下、写真在り)
閉会の挨拶	日米学生会議同窓会副会長兼会長代理 岡本 実様

【参加者の声】

第71回日米学生会議の開会式が広島に原爆が落とされた日と重なったことは感慨深かった。竹馬の友である日本側実行委員長が広島県出身者としてスピーチをしたときは、名状しがたい感情を覚えた。こうした個人的な心情を含め、本会議への第一歩を踏み出したことへの昂揚感や不安などがあつた中、日米学生会議の3週間の意義とは何か、高知県で学ぶべきことは何かということを聴講した。私にとってその中で最も印象に残ったのは、高知県出身のジョン万次郎にまつわる史話である。一介の漁師が米国と日本をつなぐ先駆者となったことは、学生という存在が日米の架け橋となれる可能性を示唆しているという話を国際教育振興会代表理事兼CEOである金野洋様から頂戴したが、社会的な枠組みから一定の距離をとっている学生が昨今の世界が直面する問題について屈託なく議論し尽くすことに一定の価値を付与されたと感じた。1934年から続く日米学生会議が初めて高知で開催され、その歴史の一部になれた実感とともに、自分の隣に座る日米から集まった学生と新たなページを創っていくことができる期待を胸に抱き、本会議の嚆矢となった開会式に出席した。

(安藤飛悠吾・名古屋市立大学 3年)



2. IYEOワークショップ(8月6日)



【プログラム内容】

テーマ1: 人生

坂本龍馬とジョン万次郎の共通点を踏まえ、土佐の自然や風土から受けた影響と最期の抛り所となった家族や友愛を提示し、自らの人格形成要因と最期の抛り所を考える。

《両者の共通点》

- ❖ 運命的なリーダーと出会い、最高のグローバル教育を受けた。
- ❖ 国が直面している課題を鳥瞰し、人生の方向性を決めた。
- ❖ コミュニケーション力が突出し、老若男女社会的地位を関係なく誰からも好かれた。
- ❖ 幾度と迫り来る困難に立ち向かい、諦めない人生を駆け抜けた。

テーマ2: アイデンティティ

大阪なおみ選手や八村塁選手に代表されるように、“日本人”のイメージやアイデンティティは変化している。グローバル社会の中で国民や郷土人としてのアイデンティティとはどのようなものか考える。

テーマ3: 日米模擬プレス

今起きている事象を、国や文化を比べながら、インタラクティブな形式で理解していく。

《補足説明》

- ❖ 日米学生会議から代表者を両国それぞれ1名選出する。
- ❖ 代表者は補佐役を両国それぞれ3名選出する。
- ❖ 代表者は、補佐役の意見を参考にしながら会場からの質問に応じていく。
- ❖ 質問内容は日米貿易や防衛問題など。

【参加者の声】

首相(代表者)として参加させて頂いた、「模擬プレス」が強く印象に残っている。

私は代表者として登壇する前、会場は、「私がゼネラリストの様な発言をする」と当然期待していると思った。そして、その期待を良い意味で裏切る為に何が出来るか必死に考えた。

結果、自分の特性を活かし、専門分野に大きく偏った意見を発言に取り入れられるよう努力し、伝えることが出来た。とはいえ、自分の考えを確りと英語で伝えることは非常に困難で骨の折れる経験だった。言語の壁を乗り越え、考えを伝える難しさと可能性を再認識した。

また、アメリカ側の発言から多く感じ取られたものとして、「いわゆるリベラル」と呼ばれる目線がある。自分はこれを知ってはいたが、実際に勉強してこなかった。この経験はそのことへの後悔と、今後勉強しようという原動力に繋がるものであったともいえる。

(小俣裕紀・防衛大学校 3年)

【ワークショップ風景】



3. 清水高校生との交流(8月7日)

【概要/目的】

土佐清水市内で唯一の高校である、清水高校の生徒10名と鯉の薫焼き体験や足摺岬散策などを通じて交流した。日米学生会議の活動の中ではもちろん普段の生活ではなかなか関わることの出来なくなった高校生との交流、そして土佐清水にくらす同じ世代の人々と関わる事で座学以上の視点の獲得を目的とした。



【参加者の声】

高知サイトの2日目に、土佐清水市内の清水高校にて現地の高校生と交流する機会を得た。高知の特産品であるカツオのタタキを、米国側も交えた参加者と高校生で1から作った経験は、数ある高知サイトの文化体験の中でも特に印象的なものであった。

本会議の2日目ということもあり、アメリカ側の参加者と日本の参加者が初めて共に作業する姿が垣間見え、議論に興じるだけではなく2国間の学生同士の友好的な関係を築くという文化交流的な側面から、日米学生会議の本質とは何かを再認識した。中にはカツオを食べることすら初めてという者もいる中、出来上がったタタキを高校生とともにお腹が一杯になるまで堪能する一方、彼らから清水高校や地域の抱える課題や現状について、話を聞くことができた。

またその後は足摺岬へ赴き、壮大な太平洋の景色と自然を彼らと楽しんだ。東京のそれとは心なしか違って感じた真夏の太陽の中、汗だくになって歩いたのはいい思い出である。

慣れない英語での会話にも関わらず積極的に交流してくれた学生達や、貴重な機会をくださった教職員や市の職員の皆様に感謝をしたい。

(マーロー瑛実利メガン・国際基督教大学 3年)

4. ジョン万次郎博物館見学(8月7日)

【概要/目的】

日本開国の折に、日米の架け橋となり類稀な活躍をした幕末の偉人、ジョン万次郎。「たまたま米国に行き着いただけの人」と言えるのかもしれない、だが彼の人生はどのような意思や決断によって形作られたのかを学ぶことで実際はそんな簡単なものではないことを知り、そして我々にとって先人とも言える存在が見ていた世界の一片を感じた。



【参加者の声】

高知県3日目に土佐清水市のジョン万次郎資料館を訪れた。

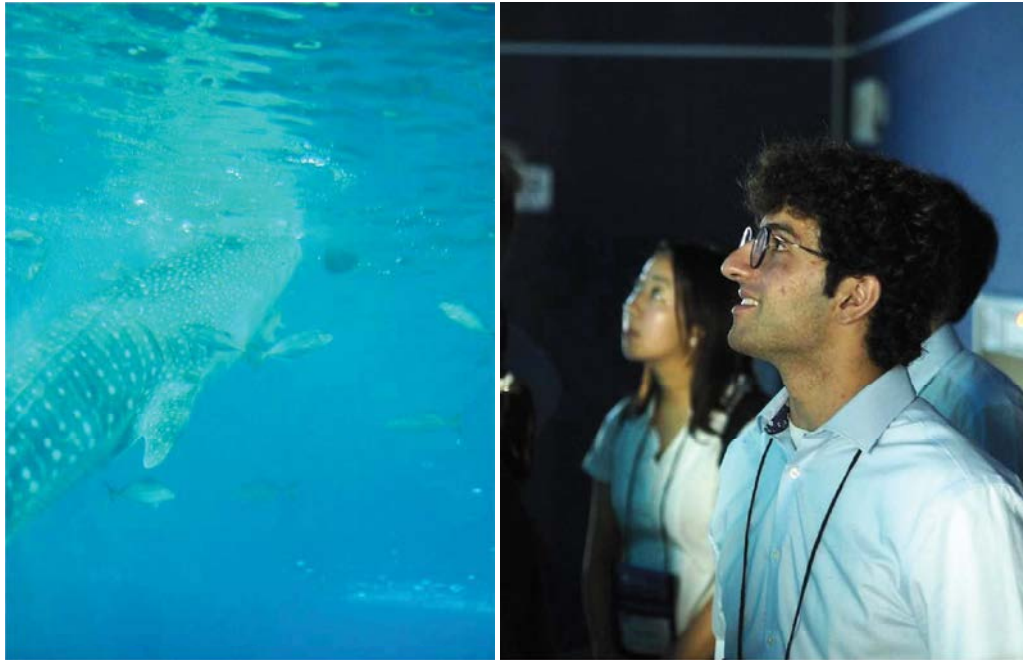
我々が学生として日米関係について考え両国の友好の一翼を担うのであれば、「日本人」として初めて米国に渡り高等教育を受け、日米関係の歴史上の分岐点において多大な影響を与えた中浜万次郎の生い立ちと功績を学ぶことは欠かせない。かなり年上の先輩の話をしているような気分でこの時間を過ごした。ごく普通の漁師の次男であった彼がこのような数奇な運命をたどった事実、それは偶然の幸運(セレンディピティ)にも思える。しかしその彼の人生と数々の功績は、常に水平線の向こうへと向けられた好奇心とそれに裏打ちされた行動力があってこそものだと言える。彼の強い意思と世界を見据えるまなざしは、我々現代の日本人が失いかけているものなのかもしれないという危機感と、世界を股にかけ活躍する人間になりたいといういつかの憧れを私の胸に思い起こさせた。

(山崎敏幸・獨協大学 4年)

5. 宗田節ワークショップ/海遊館以布利センター見学(8月8日午前)

【概要/目的】

土佐清水の持つ観光/産業資源を体験した。日本国内での生産量が1位の宗田鯉の鯉節から作られるだし醤油づくりを体験した。また大阪海遊館で飼育展示されているジンベエザメほ捕獲・研究している以布利センターを訪れ、土佐清水が誇る豊かな自然を垣間見た。



【参加者の声】

土佐清水市が日本一の生産量を誇る宗田鯉から作られる、宗田節作りのワークショップに参加し、海遊館以布利センターで近海で捕獲されたジンベエザメの飼育を見学した。土佐清水市は、太平洋に面し黒潮の潮流の恩恵に与る港町だ。

正直なところ、私は土佐清水を訪れる前は宗田節に関して知識があるどころか、名前すら知らなかった。だが、市役所の方々の講義や彼らの表情から、市の特産品を誇る熱い気持ちを感じられた。アメリカ側の参加者の中には、鯉節はよく見かける薄くスライスされたものしか知らないものも多く、黒くて硬いカツオ節を前に不思議な表情を浮かべていたのが印象深かった。

また以布利センターで見たジンベエザメは、それ自体よりもジンベエザメが生息しているという事実こそが、土佐清水の豊かな自然を物語っているように思えた。足摺岬から見た広く美しい清水の海に広がる豊かな自然を、いつか自分の目で見て見たい、そう思わせる貴重な経験であった。

(マーロー 瑛実利 メガン・国際基督教大学 3年)

6. 土佐清水セッション(8月8日午後)

【概要/目的】

2日間の土佐清水で得た学びを、「地方創生」という観点からグループディスカッションを行うことでまとめた。高知サイトを通じて幾度となく問われるテーマに対して土佐清水をケーススタディとして扱い、具体的なレベルまで議論を落とし込んだ。



【参加者の声】

2泊3日の土佐清水市での滞在を締めくくるプログラムとして、「土佐清水セッション」と題し短い期間ながらも自分達で見聞きした物をもとに土佐清水が抱える課題から、日本の「地方創生」と一般化しつつ議論をした。普段米国の都市部の大学に通う私には正直あまり考える事のないテーマだったが、米国のやや地方部で暮らす学生や日本の地方大学に通う学生など、1つのグループの中に様々な環境で暮らす人の意見が存在しており想像以上に議論自体を楽しむことが出来た。日本の地方の振興という観点で話をすると、大体が観光資源や地場産業をどうPRするかという方向に話が進むとグループのメンバーが語っていたのに対し、自分のグループが生産年齢人口を増やす、即ちそこに訪れる人ではなくそこに暮らす人の数をどう増加させるかという風に議論が進んだのは非常に興味深かった点である。日米両国の学生が真剣に日本の未来について考える事ができ、双方にとって有意義な時間となったと感じた。

(前田花帆・North Eastern University 3年)

7. 学生よさこい (8月9日午前)

【概要/目的】

翌日からのよさこい祭りに先駆けて行われた大学生の全国大会、「学生よさこい」にゲストとして参加、演武を披露させて頂いた。当日の朝に、高知県内の大生から構成されるよさこいチーム「旅鯨人」のメンバーの方々に基本的な振り付けを教えて頂き、高知城内のステージで披露をした。米国側の学生は勿論日本側の学生にとっても新鮮で貴重な機会となった。



【参加者の声】

高知サイト最終日の午前中私たちは現地の大学生から「よさこい」の基本的な踊りの手ほどきを受けた。大半の参加者にとってよさこい自体が初めてで、最初は全員が振り付けを覚えるのにも苦労していたと記憶している。ステージの上に立った私たちは大勢の観客を前によさこい踊りを披露した。途中ふと周りを見渡してみると、皆がアイコンタクトを取りながら笑顔で踊っている姿があった。自分は音楽やダンスを習ったことはないが、人と人が繋がるために言語は障壁にならないと感じた瞬間だった。今回のために高知県庁様に特別に作っていただいた鳴子には日米両国の国旗が印刷されており、日本とアメリカ、そして高知との絆を感じることができた。このような素晴らしい機会をくださった事に感謝をしたい。

(細田佳絵・慶應義塾大学 2年)

8. 高知フォーラム（8月9日午後）地方創生フォーラム～高知の今を知り、未来を語ろう～
【プログラム内容】



①日米学生会議 参加者「未来の日本の姿～明治維新150周年と共に～」

登壇者：井上 大誠、Omar Benjamin

②高知県立大学「よさこいのクレオール化」

登壇者：岡 麗寿、田中 有美、山本 悠

③国立高知大学「アートと高知」

登壇者：野村 ころ

④パネルディスカッション

- **コミュニティの豊かさ**
 - 地域でよさこいチームを作る
 - ひろめ市場と高知家という考え方
- **高知の魅力に関して**
 - 若者の県外流出と、それに対する登壇者の考え
 - 地元に残るのか残らないのか
- **地方の在り方**
 - 地方創生は何をもって成功と言えるのか
 - 地域性を失わず、多様性に満ちたグローバル化の姿

《登壇者》

岡 麗寿(高知県立大)、近森 藍璃(国立高知大)
此尾 友花(高知工科大)
Kaho Maeda(第71回日米学生会議米国側副実行委員長)
木村 勇人(日本側参加者) Alec Mesropian(米国側参加者)

⑤グループディスカッション

パネルディスカッションの内容を踏まえ、会場の皆様が参加、議論。

【フォーラム風景】



【参加者の声】

高知サイトの最後を飾るサイトフォーラムにパネルディスカッションのパネリストとして参加させて頂いたことは、私の日米学生会議での経験の中でも最も勉強になったものであった。高知サイトでのインプットの内容を踏まえ、アメリカの学生、また高知の学生とともにフロアを分けた形でのパネル発表においてはその準備に大きな学びがあった。

「地方創生」やその日米間での認識の差、その中での学生の立ち位置について発信に重きを置きつつ話をできるように構想を練ることで、それまでの1週間弱、分科会という垣根を超えてプログラムで得て来た情報をさらに深掘りし、ローカライズすることで自分の問題として認識するための時間を取ることができたことがその学びに最も貢献したのではないと思う。中でも高知で育ち、大学も高知県内に進学した学生と、県外から高知県に流入して来た学生とが登壇し、「高知県の若者の人口を増やす未来としては県内進学者を増やすべきか、それとも学生の流入人口を増やすことに務めるべきか」という話を密にできたことは非常に地方創生の現代でのあり方を再考するこの上ない機会になったと感じた。

(木村勇人・慶應義塾大学 2年)

9. 坂本龍馬記念館見学(8月10日)

高知県、そして日本の未来を切り開いた偉人、坂本龍馬。
サイトの最終目的地として桂浜・坂本龍馬記念館に訪れ、彼の生き様を垣間見た。



【参加者の声】

私はこの日をとても待ち望んでいた。龍馬を愛する私にとって館内は興奮に溢れていた。勝海舟との出会い、海援隊の旗、歴史を動かした船中八策などの展示は、小説やドラマ以上に龍馬の激動かつ数奇な人生を物語っていた。私は館内で同行していたアメリカ人の友人にこう伝えた。「坂本龍馬がいたからこそ今日に至る日米の強い友好関係がある。もし彼がいなかったら、この日米学生会議は発足していなかったかもしれない」と。龍馬の人生に目を輝かせる彼らの姿から、私は改めて龍馬の偉大さを実感した。

そして記念館見学後、私は桂浜を歩いた。巨大な龍馬像が見つめる先はきっと果てしない海であり、世界であった。明治維新から約150年を経た現在、私たちは世界中を旅し、海の向こうに夢を膨らませる時代を生きている。私は龍馬が成し得られなかった夢を追いかけている様な気持ちになった。そして龍馬の志を胸に、世界を舞台に生き続けていくことを誓った。

(井上大誠・明治大学 4年)

4-2. 第71回日米学生会議 in 京都



【サイト概要】

桓武天皇による京都遷都から、明治維新における東京奠都までの千年あまりに亘り栄えてきた日本の古都、京都。日本文化、特に公家、仏教文化が栄え、国宝の約20%、重要文化財の15%を有する日本文化の中心地である。能楽や裏千家の茶道など、日本の伝統文化が体験でき、多くの海外観光客を魅了する。今後、文化庁の全面的な京都移転が予定されており、2020年の東京五輪・パラリンピック開催を控える中で、京都は世界に日本文化の諸相を発信する都市としてその存在感を増す。「クールジャパン」というとアニメ・マンガに目が行きがちだが、日本のクールさはそれだけではない。京都の人々の生活から生み出された芸術、自然と融合した芸術など、京都ならではの独自のクールさを探求し、いかに人づくり、街づくりを行い、地方創生につなげているのかを学びたい。加えて、京都で、文化の豊かさとは何か、様々な視点から考察することで、伝統継承と現代社会の関係性について学びたい。

京都サイト担当実行委員

南 秀弥

村上 真優

Mason Williams

Nathaniel Chute

【京都府での滞在日程】

京都サイト開催期間：2019年8月10日～2019年8月13日

〔8月10日(土)〕

- ・宇多野ユースホステル到着
- ・スキット発表 @宇多野ユースホステル
- ・高知リフレクション @宇多野ユースホステル

〔8月11日(日)〕

- ・京都市内散策(RT毎)
- ・茶道体験 @裏千家今日庵
- ・RT Time @宇多野ユースホステル

〔8月12日(月)〕

- ・京都市内散策(RT毎)
- ・能体験 @金剛能楽堂
- ・Kyoto Site Session @宇多野ユースホステル

〔8月13日(火)〕

- ・岐阜県に向けて出発

1. スキット発表(8月10日)

両国の学生が自国の文化やトレンドを交えて、寸劇を披露し合う毎年恒例のイベントがスキットだ。限られた準備期間で、完成度の高いモノを作り上げる。真夏の暑さなど比にならない熱気で、会場は満たされていた。



2. 京都散策(8月11日-8月12日 両日午前中)

【参加者の声】

私の所属していた分科会は、RT timeや自由時間を京都観光に充て分科会内での関係を密にすることを最大の目標とした。京都2日目の午前には伏見稲荷大社を、午後には金閣寺を訪れ京都の伝統に触れた。3日目の午前は、嵐山の竹林を散策した。分科会で集まる時間のほとんどがFinal Forumの準備のための議論に充てられ、全員が議題以外の話題について話す機会が少なかったが、観光を通じて日常のさりげない会話が分科会内で自然にできるようになった。そして、この後の岐阜・東京での議論の時間をより有意義に活発化させることができる心的要因を作り出したように思われる。

(小溝舞・慶應義塾大学 2年)



3. 裏千家茶道体験(8月11日)@今日庵

裏千家茶道を訪れ、平成茶室で講義、呈茶を受けた。学生は、菓子とお茶のもてなしを受け、最後に扇子のお土産を頂いた。

【茶のこころ】

茶道とは「もてなし」と「しつらい」の美学だといってもよいでしょう。亭主となった人は、まず露地(庭園)をととのえ、茶室の中に、掛物や水指・茶碗・釜などを用意して、おもてなしの準備をします。これらはすべて日本の風土が育んできた文化的な結晶といえるものばかりです。だから茶道とは「日本的な美の世界」だということができます。そして亭主と客の間に通う人間的なぬくもりが重要な要素となります。それを「和敬清寂」の精神といいます。

現在は人が人を大切にする時代ではなくなってしまいました。他人のこころを傷つけ、他の人を踏み台にして自分だけがのしあがっていけばよいという人々であふれかえっております。こうした時代に人を敬い、和みの世界と物事に動じない心を生み出していくのが茶道なのです。茶道とは、世界に誇ることのできる精神文化といえるのではないのでしょうか。

(裏千家 今日庵 HPより引用)



【参加者の声】

檜皮葺の兜門をくぐった先には静寂に包まれた非日常的な空間が広がっていた。私たちが案内されたのは薄暗い明かりの灯る、広い茶の間だった。亭主によると、その空間の薄暗さがその場の人々の心の距離を近づけるそうだ。そのような空間で共に茶道を学び、体験した私たちの心は確かに近づいたように思う。その日、その瞬間のために準備された掛物や水指、茶碗などには「おもてなし」という日本的な美しい伝統精神が凝縮されていた。当日の掛け軸には「無事」と書かれており、亭主にその意を尋ねると「今日皆様が無事にこうしてここに集まることのできたことに感謝を込めて、その2文字を選ばせていただきました。」とおっしゃった。茶道の基本作法を学び質疑応答を終えた後、夏の風物詩である花火が描かれたお茶菓子と、美しい深緑のお茶をいただいた。慣れない正座で長時間を過ごし、苦しい表情をしていた参加者も多く見受けられたが、日常の喧騒から離れ、日本の美的な伝統精神を身を以て体感したことでそれぞれの感性が磨かれたことは間違いないだろう。茶道に凝縮された日本の美しい伝統文化がこの先もずっと受け継がれていくよう私はこの経験を胸に刻み、「おもてなし」の心と「和敬清寂」の精神のもとに生きていきたい。

(大澤麻璃・明治大学 2年)

4. 能楽鑑賞/体験(8月12日) @金剛能楽堂

金剛能楽堂にて金剛流能楽師の金剛龍謹様より講義、謡・舞の指導を受け、最後には仕舞(鶴)をご披露頂いた。



【金剛流の魅力】

金剛流は能楽シテ方五流派のひとつで、古くは奈良の法隆寺に奉仕した猿楽座の坂戸座を源流とし、室町初期には春日興福寺に勤仕する大和猿楽四座のひとつとなり、のちに金剛座、そして現在の金剛流へと至りました。

金剛流の芸風は、豪快でめざましい動きの中にも、華麗・優美さがあり、「舞金剛(まいこんごう)」といわれます。

(金剛能楽堂 HPより引用)

【参加者の声】

中学校の団体鑑賞以来、能楽堂へ。JASCで訪問した1番の醍醐味は、少人数での双方向コミュニケーション。神聖な舞台上で能を習う機会に恵まれ、他の参加者も謡を担当し、“全員が主役”として参加。講義では、「女性の鬼の能面『般若』には鬼の角があるが、婚礼の和装に用いる『角隠し』はこのことに由来すると言われている」「最近では女流能楽師も出てきたが、『翁』の演目だけは男性にしか出来ない」「無表情を表す言葉として『能面』が使われるが、角度によって表情は様々」等、能は現代の思想/慣習/言葉にも影響を与える文化と実感。通訳者は能を20年嗜まれているようで、「日本語では触れられていないが、理解するには必要な知識」を足されており、「江戸時代は約400年前」といったように、アメリカ人に分かりやすいよう西暦を補足した訳は、私も全国通訳案内士なので、勉強になった。質疑応答では、「何故、客席が正面と横の2面に設けられているか？」と伺うと、「絵師の作品にも演者の後ろ姿が多く描かれており、能は多面的舞台」とのお答えを頂戴し、能楽師の日常生活に関する質問では、「子育てが楽しい。スマホも使うし、マクドナルドにも行く」と話されおり、能の奥深さと、能楽師の意外な一面を垣間見た、千載一遇の体験学習だった。

(雨宮愛・京都大学院 2年)

5. Kyoto Site Session (8月12日)

Question & Topic
What does culture mean to you and how has your definition been challenged by your experience at kyoto site?
Do you think culture should be preserved as an unchanged style or should it be adapted to the era (new technology)?
What do you think about cultural appropriation?

【参加者の声】

京都ではサイトフォーラムがない代わりに、参加者が文化の定義について再考察し、文化がどのように時代に適応していくべきかについて議論した。私の班は、カリフォルニア大学バークレー校に通う参加者が買って来た八つ橋を食べながら、文化の保全について議論した。班としての結論として、時代の潮流に文化が合わせて変化する必要はなく、寧ろありのままの文化を後世に伝えていくことが重要であるという大まかな合意に至った。また、各個人がもつ宗教などの背景を鑑み、accessibilityの向上の必要性も話し合った。茶道や能のもつ魅力を体験し、今という時間軸の中で文化を分析するという知的営みを参加者が楽しんだという確信がある。

(安藤飛悠吾・名古屋市立大学 3年)

4-3. 第71回日米学生会議 in 岐阜



【サイト概要】

日本のほぼ中央に位置し、全国第7位の広さを誇る岐阜県は、御嶽山、乗鞍岳、奥穂高岳など標高3000mを超える山々や「日本の名水百選」にも選出された長良川など豊かな自然に恵まれており、「清流の国」とも呼ばれる。また、自然のみならず伝統技術を活かしたモノづくり産業やアパレル産業、航空機産業が盛んでもある。近年では観光産業にも力を入れており、ユネスコ文化遺産に登録されている白川郷合掌造りの集落やユネスコ無形文化遺産の本美濃紙といった岐阜県独自の歴史や文化は、多くの外国人観光客から注目され、そのインバウンド需要は日々拡大している。このように製造業・観光業の発展が著しいが、一方で多文化共生の側面においても見過ごすことはできない。改正入管法の施行や技能実習制度の開始により岐阜県では在住外国人の定住化が進んでいる。日米学生会議史上初めてのサイトとなる岐阜県では、自然と伝統を学びつつ、多様な文化的背景を持つ在住外国人との多文化共生社会の実現について考察する。

岐阜サイト担当実行委員

並木 祐太

村上 真優

Jamie Miura

Teresa Wrobel

【岐阜サイト プログラム日程】

岐阜サイト開催期間：2019年8月13日～2019年8月17日

〔8月13日(火)〕

- ・鵜飼レクチャー @長良川うかいミュージアム
- ・鵜飼観覧乗船

〔8月14日(水)〕

- ・白川郷ツアー

〔8月15日(木)〕

- ・岐阜市における多文化共生ディスカッション@みんなの森 ぎふメディアコスモス

〔8月16日(金)〕

- ・サイトフォーラム @岐阜県図書館 多目的ホール
- ・レセプション @岐阜県図書館 レストラン杏

〔8月17日(土)〕

- ・東京へ向けて出発

《プログラム詳細》

1. 鵜飼（8月13日）

【長良川うかいミュージアム】

ミュージアムでは、実際に鵜飼漁で使われる用具などの実物資料や、漁や暮らしの現場を感じさせる映像・写真資料などを展示物を見学した。また岐阜高校のESS部の生徒が協力し、館内ツアーを英語で通訳してくれた。



【鵜飼観覧船】

鵜飼について知り、観覧することで、1300年以上の歴史を持つ日本の伝統的な漁法を学ぶと共に、後継者不足が課題となっている鵜飼の未来について考察した。



【参加者の声】

鵜飼の見学は伝統と文化的価値の差異の顕在化を実感できた貴重な経験となった。私は20年間日本で育ち、岐阜県を幾度も訪れたことはあったが、鵜飼を見学するのは初めてであった。鵜飼は日本の伝統文化として保護されている一方、国内外から動物虐待という文脈で疑問視されている。私自身、鵜飼を文化として位置付けていたため、動物虐待として鵜飼を捉える視点との出会いはまさに目から鱗であった。特にアメリカ側参加者や現地の高校生とうかいミュージアムを見学しながら議論できたことは、現地で実際に見聞したからこそできるものであったと思う。アカデミックなレベルの議論も大切であるが、経験ベースの議論の重要性に気づけた瞬間であった。

（深津佑野・上智大学 2年）

2. 白川郷(8月14日)



【背景】

昔ながらの生活を現代に継承し、最大の特徴ともいえる美しい合掌作りが有名な岐阜県大野郡白川村。守り続けてきた村とその生活スタイルが生きた文化遺産として高く評価を受け、1995年にユネスコ世界遺産に登録されました。文化遺産登録をきっかけに国内外からの人気を高め、日本有数の観光地となっている。近年ではその加速するツーリズム需要に対応が追いつかず、役場を中心とした村全体での対応が行われている。経済効果としては非常に恩恵の大きい観光業であるが、その一方で白川村の人々は伝統的な生活スタイルの維持と環境客の対応の両方に追われている。また、観光客の中にはいわゆるインスタ映えの写真撮影のみを目的とした人たちも少なくなく、白川村が世界遺産として誇りをもつその生きた伝統文化をどのようにして訪れた人々に伝えればよいのか、日々模索がなされている。

【目的】

現在、白川村が目指す「ディープ白川郷ツーリズム」と典型的な「The白川郷ツーリズム」のギャップ調査を行い、現在村で課題となるオーバーツーリズムへの対応を考える。

The白川郷ツーリズム - 文化背景よりも見た目など表面的な部分に注目を置いた観光の仕方
ディープ白川郷ツーリズム - ガイドや説明を通して生きた世界文化遺産の本質を理解しようとする観光の仕方(現在白川村ではディープ白川郷を促進を目指している)

【タイムスケジュール】

野外博物館合掌造り民家園 成人式見学			
グループ①		グループ②	
10時00分			
10時30分	ザ・白川郷 自由散策		ディーブ・白川郷 合掌造り民家園 文化体験
12時00分	国重文和田家 見学		世界遺産ガイド 村内ツアー
	食事処いろいろ 昼食、休憩 (郷土料理)	10時30分	
12時30分		13時00分	国重文和田家 見学
	ディーブ・白川郷 合掌造り民家園 文化体験 世界遺産ガイド 村内ツアー	13時30分	食事処いろいろ 昼食、休憩 (郷土料理)
13時30分		14時30分	ザ・白川郷 自由散策
16時00分	荻町多目的集会施設 (挨拶、振り返り)		
16時45分	白川郷の湯 (入浴)	17時00分	しらみずの湯 (入浴)

【各活動詳細】

成人式見学

・訪問日が白川村の夏の成人式と重なり、その様子を見学した。村の成人式は毎年真夏に実施されるため、参加者たちは振袖の代わりに浴衣を着用している。

自由散策

・村内を自由に散策し、美しい風景の撮影、お土産の購入、集落の見学など。

国指定重要文化財和田家訪問

・集落内最大級の合掌造りで、国指定重要文化財に登録されている。白川村の歴史や合掌造りの構造を説明する目的で当主が案内人を務め、貴重なお話を訪れた人々に伝えている。

お食事処いろいろ

・飛騨・白川郷の郷土料理として名物の飛騨牛を頂きお昼休憩。

文化体験学習

・合掌造り民家園スタッフ協力のもと、伝統文化である「ひで細工」と「草木染め体験」を実施。

村内ガイドツアー

・地元の通訳ガイドが村内を文化的背景の説明を交えながら案内し、自由散策では決して得られない深い文化理解を目指した。

ディスカッション

・各活動を踏まえた上で参加者たちが肌で感じた印象や感想をもとに今後の持続的なツーリズムへの糸口を議論し、役場の方々に発表した。

温泉入浴

・1日の疲れを温泉で癒し、白川村でのプログラムを締めくくった。



【参加者の声】

JASCの岐阜サイト2日目の大きなプログラムは白川郷への訪問であった。今回の訪問は夏であったため、雪に包まれる白川郷、のような情景を目にすることはなかったが、多くの観光客が白川郷を訪れていた。白川郷を訪れていたのは近隣諸国の観光客だけでなく、実に様々な国・地域から来た人々であった。そうした様子を目の当たりにし、白川郷は世界遺産としてその名を世界に広く知られているのだと強く実感できた。一方で、白川郷が抱える課題についても身をもって体感することができた。白川郷の大きな特性に、今なお実際に人々が住んでいる家屋が世界遺産として登録され、それらが観光客の訪れる場所になっているという点がある。観光客はいわば人の家に観光目的で入っていることになり、同じ状況になれば誰でも不快感を覚えるに違いない。そういった観光資源とプライバシーの保護をどうするのか、と言う今まで自分の中になかった観点を得ることができた。勿論その場その場によって様々な問題があるが、白川郷に来なければこの観点を自分では得ることはなかったように思う。大変勉強になった良い機会だった。

(武末崇義・東京外国語大学 2年)

3. メディアコスモス(8月15日)

【岐阜市における多文化共生】



【背景】

外国人市民の定住化が進む岐阜県岐阜市において、誰もが国籍や文化などの多様性をお互いに理解し合い、共に新たな魅力を創造するまちを目指し、「岐阜市多文化共生推進基本計画」が5年間に亘って実施されてきた。彼らを地域社会の構成員として位置づけ、共に市を活気づけるために協力していくためのこの計画は2020年に次期計画に移行される。今回の会場として、市民交流の場として建設された「みんなの森ぎふメディアコスモス」をお借りし、その美しい建築構造で知られる施設の見学ツアーも実施された。

【目的】

岐阜市が目指す多文化共生を理解し、日米学生会議ならではの視点をもって計画促進に有益なアイデアを提供し、また理想的な多文化社会とは何なのかを考える。

【タイムスケジュール】

9時30分	みんなの森ぎふメディアコスモスの施設見学ツアー
10時00分	岐阜市長ご挨拶
10時20分	「岐阜市多文化共生推進基本計画」について市からプレゼンテーション
11時00分	各グループごとにディスカッション

【活動内容詳細】

日米をまたいでの文化交流プログラムとして歴史の長い日米学生会議の参加者たちは市の職員から現行計画や直面している課題に関するプレゼンテーションを受け、ディスカッションテーマに分かれて担当の市の職員の方たちと意見を交わした。

【ディスカッションテーマ】

- ・様々な媒体を活用しての情報提供
- ・効率的な対話方法の確立
- ・日本語学習の環境構築
- ・留学生支援
- ・多文化共生への理解促進
- ・地域社会への外国人市民の巻き込み方 など



【参加者の声】

岐阜の学生は、どんな思いで暮らしているのか。留学生がわざわざ岐阜を選ぶ理由とは何か。参加したいイベントや講演会の会場がほぼ東京や大阪で、九州在住という地理的不利を日常的に感じている自分にとっては疑問だった。尋ねてみると、意外にも高校まで愛知県にいたという学生が多いことがわかった。またある留学生は、親族との縁から岐阜で学ぶことを決め、卒業後は母国に戻って学んだことを還元したいのだそうだ。地方創生と聞くと観光や特産品の売り込みなどを想像していたが、大学を整備し学生を呼び込むのも有効な手段なのではないだろうか。多くの人の第2の故郷となるポテンシャルを秘めた岐阜をまた訪れたい、率直にそう思った。

(徳永大貴・九州大学 3年)

【岐阜大学生交流】



【背景】

学びの場を岐阜に選んだ生徒たちと対話の立場を設けることで、学生の視点から見えてくる岐阜の魅力や課題が見えるのではないかと考え、岐阜大学に協力を依頼することとなった。日本全国、アメリカ、そして岐阜大学の生徒で繰り広げられる交流にはお互いを刺激し合うものがあり、相互メリットになることを期待した。当日は悪天候で一時は中止も検討されたが、9人の生徒に協力を得ることができた。

【目的】

異なるバックグラウンドをもった学生たちがフランクな立場でお互いのストーリーを共有し、刺激し合う。また、それぞれの価値観から見える岐阜の魅力や改善点を議論する。

【タイムスケジュール】

12時00分	昼食
13時00分	グループディスカッション① 私の大学生活
13時30分	グループディスカッション② 岐阜の魅力とは
14時00分	グループ内での意見や考えの全体共有

【活動内容詳細】

およそ10グループほどに分かれた日米学生会議参加者たちのテーブルに1人ずつ岐阜大学の生徒に加わってもらい、テーマを変えながら交流時間とした。異なるバックグラウンドをもつ生徒たちの学生生活を共有し、互いを知ったうえでこれまで過ごした岐阜の印象や魅力を話し合った。初日の鶉飼や白川郷については伝統継承問題や、加速するインバウンド需要への対応アイデアを出し合い、岐阜市の多文化共生推進については実際に岐阜大学に通う留学生の意見を参考にしながら議論が進められた。



【参加者の声】

メディアコスモスでは指定されたグループに分かれて、今後外国人市民と日本人がどのように共生していくべきかについて話し合った。私たちのグループは日本語能力が高い留学生に岐阜市で活躍し続けてもらうための有効的な支援策としてどのようなことが考えられるかというテーマを与えられた。海外経験が豊富なグループ内のメンバー自身が感じていた「外国人」として暮らすことの障壁をアイデアの起源として、それぞれのアイデンティティを理解しあうためのコミュニティ作りをするなど多くの意見が飛び交った。多文化共生という言葉自体がまだまだ耳慣れていない日本において、日本やアメリカなど様々な角度からこの問題について話し合えたことは大きな意義があることであったと思う。

(本田智巳・早稲田大学 4年)

4. 岐阜サイトフォーラム(8月16日)



①基調講演

「岐阜県におけるインバウンドの取り組み」

《講演者》

岐阜県観光国際戦略アドバイザー 古田 菜穂子 様

②岐阜サイトでの活動報告

《内容》

この日までに岐阜サイトで学生会議のメンバーたちが訪れた場所を順に紹介し、議論、提案してきた内容をまとめてアメリカ側実行委員岐阜サイトコーディネーターであるTeresa Wrobelからプレゼンテーションを行った。(日本語通訳: 日本側参加者 鈴木 龍一郎)

《登壇者》

日米学生会議参加者 鈴木 龍一郎、実行委員 Teresa Wrobel

③パネルディスカッション「伝統文化の継承と観光業の促進」

《内容》

- 日本人にとっての伝統文化とは
- 白川郷におけるオーバーツーリズム
- 今後の日本の伝統文化継承

《登壇者》

日米学生会議参加者 若井 香穂、Catherine Petersen、Christopher Waver
白川村役場 観光振興課 課長補佐 尾崎 達也 様
岐阜高校生 鈴木 ありささん

【参加者の声】

直前合宿のガイダンスの時から「どうしても、パネラーとしてこの場に立ちたい」と強く思っていた。岐阜県は地元でもあったし何より自分にとって大きな挑戦になると思ったからだ。終わった今感じることは感謝の気持ちと悔しさである。まず「英語に自信が無いから」という理由で応募することをやめようと思った時やらないで後悔するぐらいならやってみな、という言葉をかけてくれた仲間へ、「楽しんで！」と励ましてくださったサポートをくれた仲間へ、面白いことを言って緊張していた私を笑わせようとしてくれた仲間へ、JASCメールを通じてたくさんのフィードバックをくれた仲間へ、ただありがとうと伝えたい。そして、白川郷のオーバーツーリズムなど伝統文化が抱える問題などについて実際に白川郷で働いている方とのパネルディスカッションを通して深く知れたことは何よりも大きな財産である。同時に「もっとこう言えばよかった」「もっとここを強調して発信できたらよかった」と後悔が残る。何れにせよ、この機会は私を大きく変えたことに間違いはない。

(若井香穂・明治大学 2年)



4-4. 第71回日米学生会議 in 東京



【サイト概要】

日本の政治経済の中核として行政機関や外国公館、企業の本社などが集中する一方で、伝統的な文化と近代的な文化が混在する日本の首都「東京」。

2020年のオリンピック開催を控え、海外からの訪問者数が近年急増している。戦後70有余年、戦火で焼け野原と化した東京は今や下町文化が栄える浅草、ファッション街の原宿、ポップカルチャー街のアキバ(秋葉原)、ビジネスオフィス街の丸の内といった様々な顔を持つメガポリスへと発展、変貌を遂げた。平成が終わり「令和」となる2019年には天皇の退位即位に伴う一連の儀式が行われる。東京のトレンドが日本全体、世界に与える影響は計り知れない。

日米学生会議の参加者には東京での活動を通して日本の伝統と発展を感じてほしい。全体の活動を総括して、各分科会の議論や成果を社会に発信したい。

東京サイト担当実行委員

アドリアン ウィルダンディヤワン

タクール小迫 亜満

Makiko Miyazaki

Shunji Fueki

【東京都でのプログラム日程】

東京サイト開催期間：2019年8月18日～2019年8月23日

〔8月18日(日)〕

- ・LGBTQ+パネル
- ・広島自主研修報告セッション

〔8月19日(月)〕

- ・日本航空(株)様共催 グローバルブランディング戦略ワークショップ
- ・米国大使館主催レセプション @米国大使館公使公邸

〔8月20日(火)〕

- ・ファイナルフォーラム @明治大学駿河台キャンパス

〔8月21日(水)〕

- ・第72回会議実行委員会選挙
- ・外務省主催レセプション

〔8月22日(木)〕

- ・TOMODACHIセッション
- ・タレントショー

〔8月23日(金)〕

- ・ファイナルリフレクション
- ・閉会

【プログラム詳細】

1. LGBTQ+パネル (8月18日午前)



【概要/目的】

Lawyers for LGBT and Allies Network (LLAN) の代表理事である藤田直介氏ならびにLGBTに関するトrow・クルールの代表取締役である増原裕子氏を招き、LGBT+コミュニティの権利を守る運動における政府およびallyが果たせる役割についてパネルディスカッション形式で議論を行った。

【参加者の声】

LGBTQ+パネルディスカッションにパネリストとして参加することは私にとってチャレンジだった。LGBTQ+とはセンシティブかつ複雑な分野であるかつ当事者意識がなかった私だからこそどのように話し、意見を言えばいいのかわからなかった。同じように、LGBTQ+については「私たちの問題ではない」と分けて考えてしまっている人が多いのではないかと考える。そんな中、パネルディスカッションで聞くことができた当事者やアライの意見は新鮮だったとともにとても勉強になった。また、日常的に何気なく使っている言葉や性別に対するステレオタイプがLGBTQ+のコミュニティに対して不安な思いをさせてしまうこともあることに気づかされたとともに、社会がどのようにLGBTQ+のコミュニティに対して支援することができるのかヒントをもらった。LGBTという単語は年々日本でも広まりつつある。しかし、日本はまだ当たり前にも多様なセクシャリティの人と共存する社会にはなっていない。1人1人が理解しようとする姿勢を示し、寄り添っていくことが必要だと考える。これは「彼ら」の問題ではなく「私たち」の問題なのである。
(高橋真央・東海大学 3年)

2. 広島セッション（8月18日午後）

【概要/目的】

6月に日本側の参加者のみで訪れた広島自主研修の報告、及びそれに基づいて歴史認識や平和構築、核兵器の保有/廃絶などのテーマでディスカッションを行なった。日米学生会議の原点とであり、第71回のテーマでもある「日米間の平和」について考えることはこの会議の醍醐味かつ存在意義そのものであるという認識のもと、屈託なくお互いの意見をぶつけ合った。



【参加者の声】

“Hiroshima, Nagasaki and YOU” そう締めくくったときの参加者の表情と拍手を忘れない。JASCは学生が日米・世界の平和構築の一翼を担うことを願って創設され、「平和」は今年のテーマの1つでもあった。しかしアメリカの参加者は、原爆に重きをおいた教育を受けていないと話していた。原爆と平和を遠い昔のことではなく身近に実感してもらうにはどうするか—Nagasakiと数奇な運命で繋がっているのは参加者の中で唯一自分だけという事実を思い出した。私の祖母は、長崎で爆心地から1kmの小さな村に住んでいたが原爆投下の半年前に疎開し奇跡的に生き延びた。彼女は8月9日の鮮明な記憶と、アメリカと日本の学生に平和を守ってほしいというメッセージを私に託した。「私は、祖母が疎開しなければ今こうしてみんなの前に立っていない。広島と長崎は私だけでなく、私を通して貴方の人生にもきっと繋がっている。」祖母から私へ、そしてJASCへ繋いだ平和への想いは、プレゼン後の多くのJASCmailを読み、確実に伝わっているとわかった。JASCから日米、そして世界へ、平和への想いがバトンパスされることを願う。

（岩田純奈・慶應義塾大学 3年）

3. JALワークショップ (8月19日午前)

【概要/目的】

日本航空株式会社グローバルマーケティング部部長の光益彰様からご自身の経験を踏まえて、様々なケーススタディを用いながらブランド戦略とマーケティングについてワークショップ形式で講義を受けた。人文系のテーマを取り扱う事が多かったプログラムの中で、ビジネス的観点から実践的なレベルで議論を行った。



【参加者の声】

JASC71の終了後、今なお1番印象に残っているのは JALのワークショップにて講義して下さった、光益様の仕事に対する情熱と楽しそうな表情だ。光益様のお話を聞き、自分もいつか天職と言える仕事に出会いたいと心から思った。

高知、京都、岐阜の温泉や和室で地方活性化や伝統、文化、政治について議論してきたからか、高層ビルの立ち並ぶお台場でビジネスについて話し合う風景が少し新鮮だった。いかに顧客を魅了するか、参加者の創造性と独自性が問われた。現状を分析し、解決策を提示する行政関連のプログラムとは異なり新しい何かを生み出すビジネス。両者を同時に経験することで、似ているようで全く違うアプローチを備えていることに気づいた。

ビジネスとしての立ち位置を持つ航空会社であるが、飛行機は交通手段として人の訪れる場所を左右する力を持つ。異なるようにも思える、民間企業と行政のアプローチは相互作用し、お互いを支えあっていた。このよう幅広い分野の専門家の話を聞き現場に触れることで業界を問わず、社会はお互いを支え合うことで成り立っていることを実感した。JASC71で出会った参加者たちと、将来は社会人として、お互いを支え合える日が訪れるのが、非常に楽しみだ。

(野澤玲奈・早稲田大学 3年)

4. 米国大使館レセプション (8月19日午後)

【概要/目的】

在日米国大使館様主催のレセプションが米国公使公邸にて行われた。豪華な料理がテーブルを埋め尽くす中、実際に日米の架け橋として活躍される方々からお話を聞く事が出来た。また、連日プログラムが続く中、参加者にとってはリフレッシュできた良い機会でもあった。



5. ファイナルフォーラム @明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント

【概要/目的】

日米学生会議では慣例的に各サイトの学びのまとめとして「フォーラム」を開催するが、東京サイトではサイトでの学びだけでなく分科会議論の成果発表及び全サイトの成果報告も併せて実施する。



【プログラム詳細】

①各サイトでの活動報告

登壇者：日米学生会議実行委員

内容：

各サイトのテーマ及び各サイトで行った、或いはこれから行う予定のプログラムについて、各担当の実行委員からプレゼンテーション形式で報告を行った。

②分科会活動報告

登壇者：日米学生会議参加者全員

内容：

事前準備期間からこの日にかけて各分科会内で議論してきた内容をまとめて発表を行った。

③パネルディスカッション「現代と将来におけるJASCが果たす役割」

モデレーター：株式会社 KS International Strategies 代表取締役社長 島田久仁彦氏

登壇者：日米学生会議参加者 岩淵 丈和、坂東 茉唯、Amelia Stastney, Kerry Walker

【フォーラム風景】



【参加者の声】

この日は多くの日米学生会議参加者にとって分科会議論の成果を披露する、謂わば集大成の様な場である。個人的にはパネリストとしてJASCの意義と今後について議論する場への参加が叶い、「これからへの第一歩」にもなった。

特に印象に残ったのが、モデレーターを務めてくださった島田様の”Agreeing and accetping is different. Just accepting is okay and very important.”という言葉だ。『本音の対話』としてJASCでも大事にされていることであり、国際交渉人としてキャリアを築かれてきた島田様の口からも聞いたことで、今日におけるJASCの意義を改めて感じた。

今回の日米学生会議ひとつをとっても、そこには参加者の数だけ想いがある。私にとってJASCは、劣等感と向き合い、挑戦しようと思わせてくれる場である。分科会の発表準備に忙殺される中、パネリストに手を挙げたのもそんな想いからであった。緊張や知見の足りなさが露見し、正直結果は努力点50点というところだった。しかし、幸運にももう1年JASCに携わるチャンスを受けたので、自分の受け取った分を還元し次の世代へ繋げていくとともに、今年痛感した自分の弱点を克服したいと強く思う。

(坂東茉唯・早稲田大学 3年)

6. 外務省レセプション

【概要/目的】

ホテルルポール麹町にて、外務省のご厚意により、レセプションを開催された。ご臨席賜った、高円宮妃殿下より貴重なお言葉を頂いた。また参加者達は、国際的に活躍されている職員の皆様と会話できる貴重な時間を過ごした。



【参加者の声】

外務省レセプションにてアラムナイの皆様にご挨拶することが、次年度実行委員として初めて取り組む職務であった。「85年続くこの会議のバトンを次年度に引き継ぐ」という大役を担っていることから、大変緊張した。しかし、それ以上にアラムナイの皆様から参加当時のお話を伺ったことで、85年もの長い間どのようにそのバトンが繋がれてきたのかを知ると同時に、そのバトンの重みを実感し、身が引き締まる思いであった。また、高円宮妃殿下にもご臨席いただき日米学生会議がどのように日米関係に影響を与えてきたのかお話できたことは、日米学生会議参加者として大変光栄な機会であった。

(深津佑野・上智大学 2年)

7.タレントショー

【概要/目的】

日米学生会議におけるコミュニケーション手段は言語のみにとどまらない。毎年日米学生会議では本会議中に、タレントショーという参加者が自分の趣味や特技を発表する場を設けている。今年は、フラダンス、ウクレレ、ギター、歌、劇の発表があり、多いに盛り上がった。

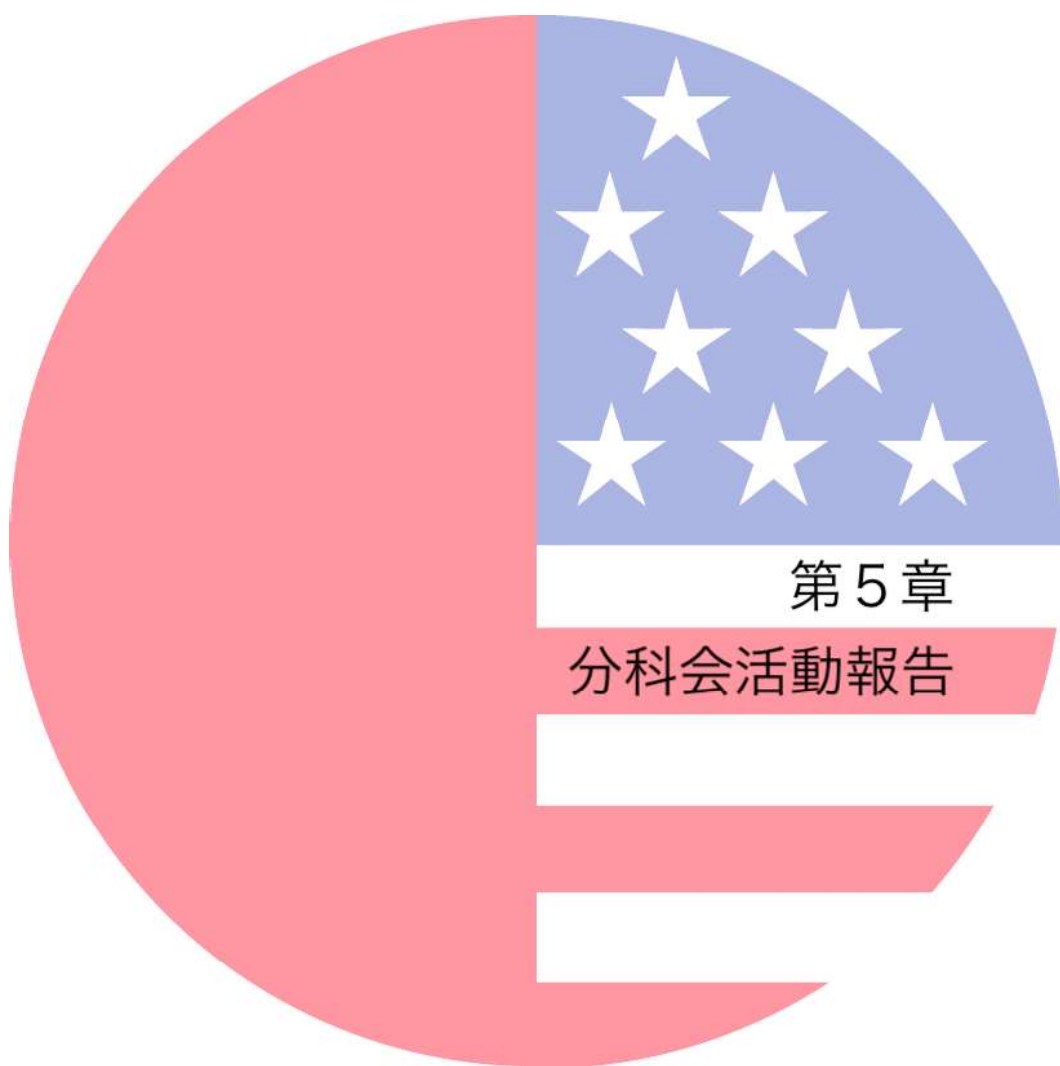


【参加者の声】

JASCの仲間たちと三週間過ごしてきたが、学術的、あるいは観光などのプログラムで形成された非日常的なJASCの環境の中では、参加者一人ひとりの普段の生活というものが想像できなかった。しかし、タレントショーはJASCのプログラムの中で最も参加者たちの日常を映し出すものであった。共に議論をしていくなかで見せる大人びた一面とは違って代わり、そこでは出演者たちの年相応の無邪気な顔が見れた。学術的なことだけに限らず、多彩な才能や、勇気のある演技を披露した参加者に私達は驚き、魅了された。このイベントは他のどのプログラムよりも出演者たちとの距離を近くしてくれたように感じた。

(山崎綾香・法政大学 2年)





第5章

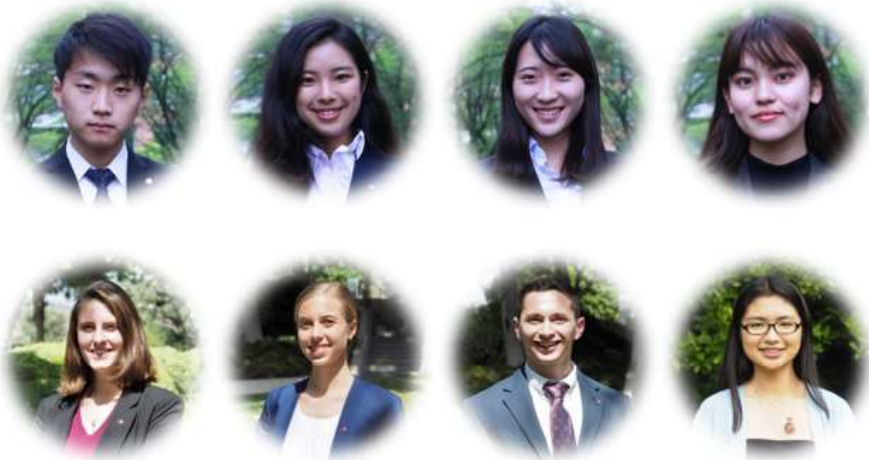
分科会活動報告

5-1. 環境とテクノロジー

～持続可能な社会に向けた環境にやさしいテクノロジーを目指して～

Environment and Technology

Ecological and Technical Solutions for a Sustainable Society



【概要】

現代社会において、人類および人類が生み出した科学技術が自然環境に与えてきた影響は大きい。自然災害、汚染、気候変動、人口過密などの諸問題に我々は国連の持続可能な開発目標（SDGs）にも策定されているような明確な目標を掲げ、革新的な取り組みをしていかなければならず、ビジネス、政治、社会における関心も高まっている。

どのように環境破壊による危機に備え、事後の対処をしていくのか？限られた資源で対費用効果を考え、どのような取り組みが可能か？環境問題に対して、ビジネス、政治、社会全体にどのようにして相応な責任を持たせるのか？

日本と米国では環境問題に対する取り組みは異なるが、両国ともに限りある資源をさまざまな形で有効活用するのに十分な技術発展を遂げている。この分科会では人間とテクノロジーが自然環境にもたらす影響について議論すると同時に、生態系を保護する観点から、持続可能な社会の構築に有効な方法を模索する。

事前準備期間の議論/活動

【春合宿】

分科会で取り扱う環境問題を「衣食住」の観点から分類して考えるということを決めた。具体的には大量生産・消費の構造が環境を破壊するファストファッション、様々な過程で環境に負荷を与える食肉産業、住む街から環境に優しくなるスマートシティなどである。フィールドトリップでは、環境保護NGOであるグリーンピースの方々とプラスチックを使わないピクニック、そして気候変動に対して学生ができるアクションについて考えるワークショップなどを行なった。環境問題について考えるだけでなく、環境に優しいピクニックをすることで、環境保全のために自分が実際にできることについて再検討することができた。

【防衛大学校研修】

当研修では、防衛大学の学生たちと「食肉産業と環境問題の関わり」について議論を行なった。肉を生産する過程が環境に大きな負荷を与えているということに関して日米学生会議の参加者がプレゼンテーションを行った。その後は食肉産業をどうすべきかについて白熱した議論となった。肉の生産によって温室効果ガスの排出量の増加、海洋汚染、森林伐採など様々な環境問題が引き起こされている、だから消費を減らすべきだという意見がある一方で、肉を食べることが食文化である人たちに対して肉の消費を制限することは、彼らの文化を迫害していることになるという意見もあった。防衛大学校学生の積極的で鋭い発言や質問に日米学生会議参加者も思わず熱くなる議論であった。

【フィールドトリップ】

- 環境保護NGOグリーンピース「気候変動と若者ができるアクション」
- Veganクッキング「肉を使わずに美味しいキャラ弁を作ろう」
- Fridays for Future 井上様「気候変動に対して立ち上がる若者たち」
- 竹本秀人様「江戸時代の持続可能な生活」「テクノロジーを用いた持続可能な農法」
- Friends of Earth高橋様「技術は本来何のためにあるのか」

【事前準備活動】

- Cre-en田中様「環境問題対策と企業のCSR」
- 柏の葉スマートシティ「持続可能な都市づくり」

以上7件のフィールドトリップ行なった。フィールドトリップの形態はディスカッション形式や、プレゼンテーションに対する質疑応答形式、ワークショップ形式など様々であった。環境保全に技術を用いて様々な切り口から取り組んでいる多様な立場の方々や有識者の方とお会いし、お話をさせていただくことで、環境問題がいかに関わりの生活のあらゆるところに関連するトピックであるのかということを確認することができた。またこれまでの議論では考えてこなかった新しい視点を得ることができ、議論をより多様な観点から分析して深めることができるようになった。

【オンラインミーティング】

環境とテクノロジー分科会では、週に1回の頻度でオンラインでのミーティングを行った。参加者は東京、秋田、福岡と日本全国に散らばっていたため、事前準備の段階においてオンラインミーティングで顔を合わせて話す時間は本会議に向けた準備のためだけでなく、参加者同士の友好を深めるために重要な機会であった。

オンラインミーティングでは、主に分科会トピックに関する情報共有、ディスカッション、活動の振り返りを行っていた。分科会のトピックに関する情報共有においては、毎回のミーティングで環境問題または技術に関する時事ニュースでそれぞれが興味を持ったものについて事前に調べ、ミーティング時に他の参加者に向けてプレゼンテーションを行った。自分がこれまで全く知らなかった情報を知る良い機会であった上に、参加者同士の興味分野も知ることができた。ディスカッションでは6月頃から批判的思考力を養い、自分がこれまで知らなかった考え方からも物事を分析する力をつけるために、4人の参加者を2ー2に分けてディベート形式で行った。全体のミーティングのディベートに備えて、ペアの参加者と事前にミーティングをした。主張や根拠となる事実・事例をお互いに共有し、役割分担をすることで全体でのディベートに備えた。毎回ペアの組み合わせを変えることで全ての参加者とディベートで組むことができ、これまで知らなかった相手の一面を発見することもこの活動の醍醐味であった。

会議中の流れ及び総括/考察

【高知サイト】

本会議前の活動や興味関心分野などの情報共有

高知サイトではまず日米両サイドの事前期間中にどういった話をしてきたのか、どういったことを学んできたのかなど、大まかな情報交換からラウンドテーブルの議論がスタートした。日本側は、本会議前のフィールドトリップから学んだことや、衣食住という3つのカテゴリー分けをして環境に優しい暮らしのあり方について考えてきたことを説明した。アメリカ側は日本側と比べて事前期間に時間をとるのが難しいという点から、テーマなどはまとまっていないように見受けられたが、個人個人の知識などを議論の要所所所的に補助してくれた。またRT paperでどのようなことを論じたのか、それぞれ簡潔に説明する時間を設け、それぞれが追求していきたい分野をお互い共有した。これによって環境問題という大規模な問題を扱っていく上で、どこに焦点を絞って議論を深めていくべきか定められるのではないかと考えていたのだが、それぞれの興味関心分野が大きく異なっており、正直なところ先が思いやられた。その後はファイナルフォーラムでどのようなプレゼンをするのかを念頭に置いて議論を進めていったのだが、「議論」というよりも情報共有の時間が多かったように感じる。

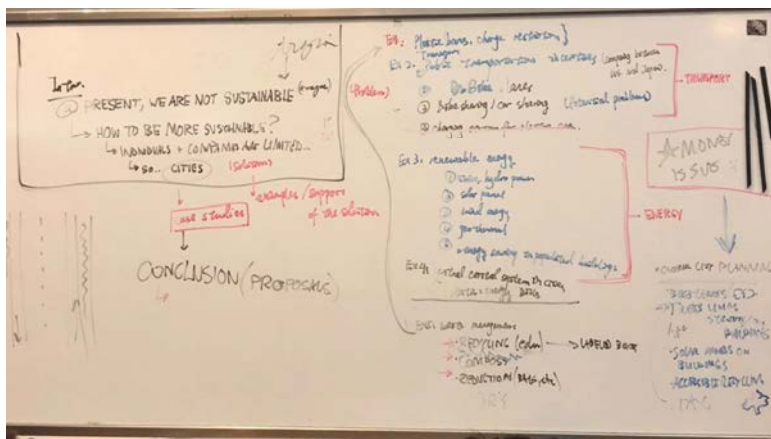
【京都サイト】

環境問題の解決に必要なものとは何か

情報共有がRT timeのほとんどを占めていた高知サイトに比べ、京都では議論を深めることができた。主な議題は「環境問題の解決に必要なものとは何か」ということである。

最終的には環境問題の解決には“government”, “cooperation”, “indivisual”の3つのセクションによる相互協力が不可欠であるという結論に至った。この関係をダイアグラムに表し、それぞれが現状どのように作用しているか、そしてそこにおける問題点と改善策について議論があった。ファイナルフォーラムではこのダイアグラムが何を示しているのか、そしてそれぞれの働きについて例を挙げながら説明し、議論を進めていく上で見つかった問題点とそれに対する改善策を発表し、私たち1人1人が“indivisual”として環境問題に対して何ができるか提言しようということでもとまった。

【岐阜サイト】



ファイナルフォーラムに向けた準備と腑に落ちない議論

岐阜サイトでは、京都サイトで大方まとまったファイナルフォーラムでの発表内容を細分し役割分担するために改めて話し合いをした。議論を進めていくうえで修正すべき点が見えてきたため、右往左往したが、「持続可能な町づくりのためにできること」を主要テーマに掲げ、そのために必要な政策、そしてその実現における“government”, “cooperation”, “individual”のそれぞれの役割や重要性について話し合った結果を発表するという、京都での決定事項とはやや異なる形で落ち着いた。持続可能な町づくりのために必要な“waste management”, “renewable energy”, “transportation”についてそれぞれが調査を進め、その内容をRTtime内や空き時間に共有し、それに対する意見を交わした。一見スムーズに事が進んでいるように感じるが、ファイナルフォーラムを意識し過ぎてしまったことで解決の糸口が見えない複雑な課題について自由に議論することができず、建前上の話し合いにしかならなかった。そのせいか発言数が減っている参加者も見受けられ、それぞれがモヤモヤした気持ちを抱えたまま、最終サイトである東京へ向かうこととなった。

【東京サイト】

本音の議論とファイナルフォーラム

東京サイトで初のRT timeにおいて、岐阜での建前上の議論に対する気持ちを泣きながらぶつけてくれた参加者がいた。確かに岐阜で主に話し合ってきた内容はこの日米学生会議でなくとも話し合えるようなものであり、それぞれが本当に意見をぶつけ合いと思っているものというよりも、ファイナルフォーラムで形になりそうなものに逃げてしまっていた。RT内のほとんどのメンバーが同じことを感じており、ここで一旦仕切り直し、それぞれが心の底から議論したいことを自由に議論する時間を設けた。ファイナルフォーラムまでの時間が限られてる中でのこの決断はリスクを伴うものだったが、それぞれが抱えていたモヤモヤが解消され、ここでやっと、本音の議論というものができるように思う。しかしながら高知サイトで感じていた通り、それぞれの関心分野があまりにも異なるので、ファイナルフォーラムでの発表内容を変更するまでには至らなかった。フォーラム前日はそれぞれ担当するスライド作成と台本作りに集中しながらも、これまでの活動を振り返ったり、写真を見返したりなど、和気あいあいとした雰囲気作業を進めることができた。当日は無事発表を終えることができ、全員が安堵の表情を浮かべていた。



分科会議論の結論

“Think globally, Act locally.” という本会議テーマにヒントを得て、ファイナルフォーラムでは「持続可能なまちづくりの構築」を主題に据えた。中でも私たちが注目したのは以下の三つの事柄“waste management”, “renewable energy”, “transportation”である。まちづくりにおける“government”, “cooperation”, “indivisual”の関係性に注目しながらそれぞれの問題に対する打開策を講じた。

- 持続可能な交通機関の創発

生活に最も密着している交通機関について、まずは両国の違いを明確にした。日本では現在、全体の約15パーセントが公共交通機関を利用している。特に都心部では鉄道でいけない場所はないと言っても過言ではないほど、鉄道が張り巡らされている。また日本が誇る新幹線はとどまるところを知らずに進化し続け、使用電気量も徐々に減少している。さらに近年ではバイクシェアと呼ばれる自転車の共用サービスなども普及し、「環境を考慮した移動」が民間人にも浸透してきている。一方、アメリカでは事前にアプリで車を予約し、乗車することができるGig Car Shareが普及している。このサービスは、乗り捨て可能なカーシェアリングで、従来のものとは異なり専用の駐車場を必要としない為、地域住民にとってより身近なものとなっている。他にもトヨタが開発したプリウスは、フルハイブリッド電気自動車であり、米国環境保護庁とカリフォルニア大気資源委員会から米国で最もクリーンな車両の1つとして評価された。このように環境に配慮した交通手段が両国で開発されている一方で、それぞれの国に課題も残っているのが現状だ。たとえば日本は、都心部における公共交通手段は非常に発展しているものの、地方ではまだまだ自動車文化が浸透している。アメリカでは、公共交通機関の乗り心地が悪い、犯罪率が高い、自動車文化が粘り強く遍満している、などの理由によりなかなか公共交通機関が普及しない。技術が発達し環境に優しい交通手段が脚光を浴びている一方、こうした課題が未だに山積していることを再認識する必要がある。

- 廃棄物マネジメント

リサイクル率はアメリカが35%、日本が20%と両国ともに低い数値を示している。この現状を改善する為には、より細かい分別をより多くの人にしてもらう必要がある。既に多くのキャンパスタウンではビン、缶、ペットボトルなどの分別を絵や色で示すことでリサイクルに貢献している。さらに、日本の徳島県上勝町ではリサイクル率が全国平均の約4倍である81%に成功している。この町では非常に細かい分別を住民に促す為、NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミーを中心として教育に力を入れている。リサイクル活動は一見手間が掛かる行為だが、教育を通してそれを習慣にする事が不可欠だ。

- 再生可能エネルギーの活用

環境に与える影響を最小限にするために、以下の2点に注目した。クリーンエネルギーの創出、そしてエネルギー使用量の削減である。これら2つの問題を同時に解決する為に、わたしたちはある仕組み(システム)を考案した。それはエネルギーマネジメントシステムを利用したものである。これを使用することで、住民はエネルギーの使用量、その前月比、今月の目標値などをWeb上で閲覧する事ができる。仮に目標値を超えた電力を使用すると電気代が跳ね上がるという仕組みだ。そしてこの目標値は、各電力会社がクリーンエネルギーをどれくらいの割合で創出しているかによって決める。たとえば、電力会社が創出しているエネルギー全体の9割をクリーンエネルギーが占めていれば、目標使用量も上がる。そうすることで、顧客はより多くの電力をより安く使用する事ができ、企業は安い電力を供給する事でより多くの顧客を手に入れることができるのだ。さらに政府は、そうした再生可能エネルギー創出に力を入れている企業に補助金を出し、化石燃料における厳格な法律も立案する。こうすることで経済的にも環境的にも優しい今までにない画期的な仕組みになると確信している。

個人ページ

	名前：鈴木 龍一郎
	所属：国際教養大学国際教養学部グローバル ビジネス学科2年
	興味/関心：多様

「激しい議論と友情」

アメリカの政治に興味があり、多くニュースを見るようにしてるが、実際のところとても偏った情報しか取り入れられてないと感じることも多々ある。また、アメリカに住んでいる当地人たちが1つ1つの政策に関して何を思っているかも詳しく知ることができないということも多々あった。日米学生会議では、実際にアメリカに住んでいて様々な意見を持った学生が集まるということで、熱い意見交換を行えることをとても楽しみにしている。

また、僕の所属している大学のキャンパスの立地上、あまり他大学、ましてやアメリカの大学生と関わりを持つことはとても稀だ。この3週間という短い期間ではあるが、お互いをさらけ出し、かけがえのない友人たちを作れることを楽しみにしている。

「JASCだから学べたこと」

分科会の活動の中で1番学びが多かったのは、本会議前に開催したフィールドトリップだ。環境保全を企業にコンサルトするのを仕事になさっている方や、環境保全のNGOの方との会話を通して、自分にはない判断の基準や、環境保全というものに対する見方を学ぶことができた。環境保全が利潤を生み出すことや、どういった正義感に基づいて環境を守っていくのかなど、プリンシパルのレベルでの考え方を教えていただき、今まで漠然とした環境保全へのイメージが、実際にどういった行動を起こせば環境を守ることになるのかということを実感することができた。

また本会議の分科会メンバー全員での議論の中では、グループワークの難しさに悩まされた。言語の壁や、性格の違いなどから、発言する人の偏りが見られたり、明確な結論に至らぬまま議論が終わってしまったりなど、建設的なコミュニケーションの難しさを痛感した。来年度のJASCの実行委員として、今後多くの議論やコミュニケーションをするにあたって、RTでの成功や失敗を振り返りながら対話をしていけたらと思う。



名前：細田 佳絵

所属：

慶應義塾大学環境情報学部環境情報学科2年

興味/関心：舞台/映画鑑賞

「多様性に魅せられて」

私か中高時代に所属していたミュージカル部では様々な時代背景の異なる人種、思想を持つ人物をたくさん演じた。他人の人生を理解し演じることは容易いことではなかったが、何度も仲間と意見をふつけ合い作品を読み解く中で、違う考えを持つ人を理解する難しさとその「面白さ」に気つかされ、私は多様性の虜になった。そんな折に見つけたのが日米学生会議である。生まれも育ちも全く異なる学生が一同に集い、寝食を共にしながら日夜議論を交わす、そんな体験ができると知ったとき全身に電気が通ったように興奮した。ここでなら多様な価値観を持つ人と、日米間の平和という共通の目的のもと本気で語り合えらと思った。そして会議について知れば知るほど惹きつけられ、これこそ私が求めていた場所であり、ここが私の居場所だと感じた。そして私はこの会議に参加し耳を塞ぎたくないような意見にも耳を傾けて、その思想と正面から向き合い、自分の意見をふつきたい。

「不可能を可能にできる場所」

環境とテクノロジー分科会に所属して初めて感じたのは自らの無力さである。この美しい地球に生まれたからには、それを次の世代に残す義務があると漠然と感じていた私だが、正直なところ以前は環境問題に対して常にアンテナを張り巡らせているような生活を送っていたわけではなく、むしろ消費社会に溺れていた部分があった。それでも仲間と議論を交わし、実際現地に赴いて企業の方々の取り組みを学ぶうちに、事態の深刻さに衝撃受け、意識や価値観が大きく変わっていった。そして自分もなにか環境のために行動を起こしたいと考えるようになった。しかし環境問題の難しさは、人員や巨額の資本が必要で、誰もが「なるべく環境に配慮しましょう」の定義のもと開発するが、多くの場合予想外の新たなジレンマが生じてしまうところだ。かといってライフスタイルの停止縮小を強いられることも持続可能ではない。「心豊かに」を犠牲にすることなくその課題に取り組む、そのために学問やテクノロジー、そして私たち学生の柔軟な発想力が役立つはずだ。その為に1人でも多くの学生が声をあげれば不可能なことも可能になる。そう気づかせてくれたのが環境分科会であり、JASCである。



名前：野村 紗里

所属：九州大学共創学部 2年

興味/関心：環境問題、メキシコ料理、音楽

「自分の弱点に立ち向かう」

私が環境問題に興味を持ったきっかけは、セヴァン・スズキの国連でのスピーチだ。当時まだ13歳だった女の子が国際会議の場で大人を一蹴するスピーチに感銘を受けて、自分にも何かができることがあるかもしれないと思い、高校生の時にメキシコでのウミガメ保護ボランティアに参加した。その経験がきっかけで自分も環境保全に携わる仕事をしたいと考えるようになった。日米学生会議では、学生の立場から環境問題についてどのような考えを持っているのか、生まれ育った環境や文化がどのように考え方や価値観に違いをもたらしているのかを知ることとても楽しみにしている。また、JASC71が終わった時の理想は「自分の意見を妥協せずに（必要な時もあるけど）言えた」と思えることだ。その過程で相手と対立したり、辛いこともあるかもしれない。そんな経験も必要だと思う。これまでの私は相手が少しでも説得力のあることをいうとすぐに「確かに！」と納得して流されていた。そんな自分を変えるため日米学生会議に臨む。

「前提を疑え」

議論をする上で1つ厄介な点があった。それは、環境問題は解決すべき課題であるという無意識の前提、リサイクルはすべきものであるという固定観念だ。リサイクルは環境に優しい技術であると言われているが実際はどのようなのだろうか。リサイクルする際にかかるエネルギーは、ゴミを燃やす時のエネルギーに比べてどうであるのか。もしそれが燃やすエネルギーを上回るならばリサイクルすることの意義はどこにあるのか。そもそも環境はどうして守らなくてはならないのか。「環境問題は解決しないといけない」ということは誰しもが知っていることだと思う。しかし、それを知っていてもなお人々が解決のための行動を起こすことができないのは、どうして解決しないといけないのかという、基盤の部分知らない、もしくは忘れているからだと考える。JASCではこのように、今まで当たり前すぎて考えたことのないことを考え直すきっかけを与えてくれた。私はもともと環境問題に興味があり、将来も環境保全に携わる仕事をしたいと考えていた。だからこそ持っていた自分の固定観念を問い直すことができたことはとても貴重な経験であったと思う。



名前：大澤麻璃

所属：明治大学国際日本学部国際日本学科2年

興味/関心：美術館巡り、映画鑑賞

「己に挑む夏」

「自分を誇れる人間になる」という人生目標の1つを達成するため、今回JASC71への挑戦を決意した。私は幼い頃から自己否定感が非常に強く、自分自身に価値を感じたことは正直ほぼない。そんな自分をどうにかして変えたいと思っていた最中、このJASCに出会った。知識、意欲、そして可能性に溢れる学生たちが日米から集まる中で、自分の無知や力不足を痛感し、逃げ出してしまうようになる瞬間も必ずあるだろう。しかし、そこで逃げ出すのではなく自分自身の弱さや問題点と徹底的に向き合い、研修やJASCerとの議論から吸収して学んで考えてを繰り返し、自分を誇れる人間に成長していきたい。何に挑むにもはじめは不安で不安で仕方がないが、臆病になって踏み出さなければ迷子にもなれない。JASC71のテーマにもあるように、対話と衝突から己を拓き、想像以上の成長を遂げられるよう精進していきたい。これまでのJASCerが築き上げてきた伝統と実行委員の方々が多くの時間を割いて選考してくださったことへの敬意と感謝を忘れず、身を引き締めて、よりよい議論のために全力を尽していこうと思う。

「『答え』より大切なもの」

「持続可能な社会を」と叫びながらも、人々が有限な資源や商品を大量消費し続けることに、私は常に違和感を感じていた。環境問題が深刻化していること、そしてその問題が人間の生活に起因していることを知りながら、なぜ我々はその解決のために十分な行動を起こせないのか。その理由を明らかにし、人々を環境問題の解決に向けた行動に促す糸口を見つけることが、この分科会における私の目標であった。悔しくもその目標が達成されることはなかったが、この問題と向き合い、意見を交わし合ったその過程とそこでの学びや気づきにこそ意義があったのではないかと思う。環境やテクノロジーに関する専門知識が無い中で、議論に貢献できるようたくさんの文献を読んだり、フィールドトリップを通して現場での学びを深めたりすることで、複雑多岐にわたる環境問題のその深刻さに危機感を感じ当事者意識を持てるようになったうえに、その解決に向けて汗を流している人々が存在するのだということをも身を以て知ることができた。

本会議が始まってからは、メンバーそれぞれの追求したい分野が全く異なるが故に議論のトピックが定まらないという苦しい状況にも陥ったが、なんとか打開策を見出し無事にファイナルフォーラムを終えることができた。この苦労は議論において寛容な心を持ち、互いの意志を尊重することの重要性を教えてくれた。

この分科会を支え、そして私にたくさんの学びを与えてくれた環境とテクノロジー分科会のみんなに改めて感謝したい。本当にありがとう。そしてここで終わってしまうのではなく、得た教訓や知識をもとに、これからも環境問題に対して向き合い続けていきたいと思う。

5.2 スポーツが作る健康

～フィットネスと私たちの肉体・精神～

Health and Exercise

Modern Fitness Trends and Their Effect on Physical and Mental Health



【概要】

健康とは何か。

WHOが提唱する健康の定義では「健康とは（中略）肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」（日本WHO協会訳）としている。このように健康は、大きく2つに分けて肉体的な健康と精神的な健康を考えることができる。前者は、先進国において過度なダイエットや肥満が主な問題として挙げられている。後者は、特に日本において重要な問題だ。日本の自殺率は同国の自己死亡率よりも高く、様々な取り組みがなされている。以上の様に、現代人が健康に対して抱える問題は多い。

それらの問題を解決する方法の1つとして、スポーツが挙げられる。当分科会では、スポーツを通じて私たちの肉体と精神を健康に保つために必要な要件は何か、物質的に充足した人類が大切にしていかなければいけないものは何かについて議論する。

加えて、近代スポーツが現代社会に与える影響についても考察する。2020年に開かれる東京オリンピックが日本や国際関係にどのような影響を与えるのか。日米のビジネスとしてのスポーツの捉え方の差や、教育におけるスポーツの問題について議論することを目的とする。

事前準備期間の議論/活動

【春合宿】

春合宿でスポーツRTのメンバーと初めてオフラインでの顔合わせをした。相手を知り、みんながJASCにどのような気持ちで参加しているのかを共有するため、なぜJASCに参加したのかなどを話し合った。そこをベースに、分科会全体としての目標と個人の目標を設定した。

- RTの目標：1番仲の良いRTにする
- 個人の目標：自分で自分の可能性を狭めない、後悔しない選択をする、など

またRTタイムでは本会議での議題のテーマを何にするかということについてブレインストームを行なった。その中で分科会のテーマである”スポーツ”という言葉にフォーカスをあて挙げた意見が、”スポーツが健康的な精神状態に与える影響とは”、また、”スポーツがどのようにして人と人とを繋げるか”、などであった。

さらに、FTで訪れたい場所についての話し合いや、7月までの目標として、RTのメンバーで肉体的健康と精神的健康という言葉の定義を共通認識することを決定した。RTのフリータイムでは、メンバー全員の親睦を深めることを第1の目的に設定し、プリクラや脱出ゲームなどのアクティビティを行なった。

その効果あってか、初日はまだぎこちなかったRTのみんなが、フリータイムの終わりにはすっかり打ち解けていたのであった。

【防衛大学研修】

残念ながら防衛大学研修ではメンバーの体調不良により、RTのメンバー4人全員で挑むことはできなかったが、普段は関われない防大生たちとの学生討議は想像していたよりも遥かに充実



したものであった。学生討議では始めに、上下関係について議論した。スポーツRTのメンバーは、上下関係についてネガティブな意見を持っていたが、防大生はそうではなく、上下関係が徹底している防衛大学ならではの、新鮮な意見が沢山聞けた。まず、”縦の関係”や”ホラクラシー（上下のないフラットな関係）”、などの組織形態というものは、状況により適正が違う。緊急時にどう正確かつ迅速に情報を共有していくかが重要な自衛隊の世界では上下

という関係が適していること。”縦の関係”、”ホラクラシー”どちらも信頼関係があってからこそ成り立つものであること。このように単純ではあるが、重要なことを再確認できた。

また、次に議論した健康とは何かというトピックでは、防大生は肉体的な健康を第一に考えている知った。健康の定義は人それぞれ異なり、肉体的に健康でなければ自衛官としての資格がない防大生たちにとっては肉体的に健康であることが、最も重要とされるとされるのである。スポーツRTの話し合いの中では、精神的な健康にフォーカスがいきがちであり、最も基本的かつ重要と言える肉体的健康はあまり話し合わなかった。この経験を通し、健康定義は立場によって違いがあること、広い視野に重きを置きすぎると、健康という肉体などの基本的な要素から目をそらしがちであると気づくことができた。

【FT: RIZAP】

スポーツ分科会は、健康にフォーカスし、健康を発信しているRIZAP社に、RIZAPの社員である、JASC OBの齊藤和平さんの協力元にFTを開催させて頂いた。

FTに行く前は、RIZAPはぼっちゃりした体型のモデルが、スリムなボディーを手に入れ生き生きとしている姿を描いているため、細身の体型が理想であるという認識を社会に広げているような印象があった。しかし、若者の利用するテレビなどでは、細くなりたいという需要に応え応えるそのような宣伝戦略をとっているが、年齢層が上の人が利用する雑誌や新聞では、血糖値などの医学的な観点から健康になるという宣伝をおこなっており、あくまでRIZAPの目標は自己実現と健康ということをFTを通して知ることができた。

さらに、単なる一般的なパーソナルトレーニングの会社と違い、医学とも連携し、dのようにして病気を未然に防ぐか、手術後の患者の筋力低下をどう施術前のトレーニングで軽減できるか、という課題にも力を入れていることを知り、RIZAPに対する見方が大いに変わったFTであった。

【直前合宿】

直前合宿でのRTタイムが防衛大研以来、最初のミーティングであった。本会議で話したい議題をRTメンバー1人につき2トピックずつ挙げてもらい、なぜその議題を話し合いたいかということを発表してもらった。中から投票を行い、1番票の多かった3つを仮定の議題とした。

- オリンピック関連（猛暑の時期に開催する意味など）
- 精神的な健康状態について
- 社会の思う健康と個人の思う健康は一致すべきなのか

本会議では、この3つをアメリカ側と共有した。

本会議中の流れ及び総括/考察

【高知サイト】

私たちはまずトピック決めのため、お互いの興味のある分野についての情報、意見共有から始めた。ジャパデリは事前に話し合ってきた①オリンピックの目的が変わってきてしまっていることについて（選手主体ではなく、経済効果ばかり重要視されるようになってきてしまっている）②社会で定義されている「健康」と個人が求める「健康」の定義の違いについて側から見て不健康であるが、本人は地震の健康状態について満足している場合、不健康である事を指摘しても良いのか（病的に痩せている女性に対しその事を指摘しても良いのか）の2点に焦点を当てた。私たちのRTにはアメデリが2名しかいなかった事もあり最初の議題共有は円滑に進んだ。1つ目はスポーツ選手のドーピングについて。2つ目はチームの社会的プレッシャーについてである。以上の2点がアメデリの用意してきた議題である。

これらの意見を出し合ったのち再度皆で健康とは何かの定義のラインを合わせる事が必要であると感じた為、まずはWHOの健康の定義についての共有を図った。それを踏まえた上で各々が思う健康の定義について共有がなされ、個人個人の価値観などに触れるラインまで話合う事ができた

- 世界的な健康の定義を踏まえた上で各々が思う健康の定義について共有
- 精神的な健康に着眼する人や肉体的な健康に着眼する人など様々
- 身体的健康と精神的健康は常に一致するわけではない
- 国によって健康の定義が違う

前述した個々の価値観の相違が垣間見られたのが特に以下のトピックであった。またこれらの問題に対する個人の意見だけでなく、そもそもこれらの議題をとり扱う事が倫理的に問題なのではないかというところまで議題が及び、その点について話あったのも大変印象的であった。

- 安楽死について
- 政府は自殺を合法化することになるのか
- 身体的には健康であったが鬱病で安楽死を選んだスイスの少女の例について議論→時と場合によるのではないか
- 本人の意識がない中、家族が安楽死させるか否か決めるのはいかなるものか
- 出生前診断
- 倫理的な問題である
- 障害を持った子だと分かった時点で中絶率が高くなってしまうことについて
- 遺伝子検査
- 自分たちならどうするか
- 難病と診断されると希望を失うリスクがあるためやらないという意見、病気の対策になるからやるべきだなど個人により異なった
- 政府や企業がこれらの個人情報を採用などに悪用する危険性もある
- 中絶
- 認められて良いのか
- いつ胎児を人間として意識し始めるか

※安楽死、出生前診断、遺伝子検査、中絶の議題は不本意のうちにに他者を傷つける可能性があるとし、却下された。

【岐阜サイト】

- 田舎と都会の比較

→機会の少なさ、

都会に比べロールモデルが身近にいない

→その違いが子供や若者の成長、

将来にどのような影響を与えるのか

- 子供に大きな影響を与える媒体として

絵本に着目

→アメリカと日本の

誰もが読んだことのある絵本を比較

→アメリカは1人のヒーローが問題を解決するものが多いが、

日本は複数のヒーローが力を合わせて問題を解決するものが多い

→幼少期からアメリカでは個人主義を、日本では団体主義を無意識に植えつけている

- 若者に大きな影響を与える媒体としてメディアに着目

→メディアが作り出すbody image :

女性は長い足、細いウエスト、綺麗な肌、全体的に細い方が望ましい

男性は筋肉質な体型、割れた腹筋

→メディアが作り出すbody imageは果たして健康なのか？

→メディアが考える健康と私たちの考える健康は異なる



【東京サイト】

- メディアの変化

→例：スポーツブランドのナイキは様々な体型のマネキンを使用

下着ブランドのAerieは様々な体型のモデルを使用、そして写真を一切フォトショップしない

「ぽっちゃり」体型の女子向けの雑誌

「ぽっちゃり」体型の渡辺直美がTIME誌が選ぶ「ネットで最も影響力のある25人」に選ばれる

- body imageにとらわれ過ぎてしまうと過度に痩せなければならないと思い、摂食障害になりやすい
- 精神的な健康のために何ができるか？

ファイナルフォーラムが近くなるにつれてデリみんなに焦りが見られた。ファイナルフォーラムでどのような内容を発表するかは事前に決めてあったが、最後になって迷いが出てきたのが1つの原因であった。他のRTが着実に準備を進める中、比べても仕方がないとわかりつつも、私たちは本当に間に合うのだろうかと常に不安に感じていた。

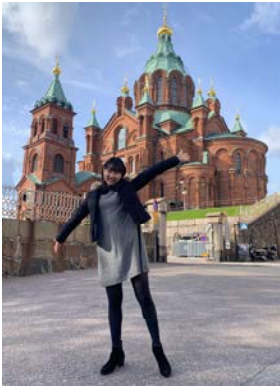
今までの議論で共通してデリが興味を持っていたのがメンタルヘルスであったため、健康的なメンタルヘルスを手に入れるために必要なものはなにかを考えるようになった。そこで初めてemotional intelligenceという概念が1人のデリにより紹介され、あまりにも画期的な概念であったためファイナルフォーラムでの発表内容を急遽emotional intelligenceに変更することにした。しかし、ほとんどのデリにとって新しい概念であったためリサーチから始めなければならず、時間との勝負であった。決して妥協はしたくなかったので、寝る間も惜しんで議論を重ね準備を進めた。だからこそ満足いくファイナルフォーラムを作り出せたのだと思う。

分科会議論の結論

- 身体的な健康（例：病気にかからない）だけではなく、精神的な健康も幸福へ欠かせない大切な要素である。
- また、幸福に繋がる精神的な健康を獲得する為には、自己内省と他者とのコミュニケーションの際に必要な対人感受性の涵養が重要である。
- この自己内省と相手の感情を理解する能力を”Emotional Intelligence”という。
- Emotional Intelligence は、自己認識力、自己管理能力、社会認識力、対人関係管理能力の4つからなる。
- これらは、教育を通してより効率的に習得されるのではないか。なぜなら、コミュニケーションと対人関係の質や形態は、いつも文脈に依存しているからである。
- 教育が行われうる機関の例：(1)学校 (2)会社
- ある研究によると、こうした文脈に即して、Emotional Intelligenceを教育から習得する事は、幸福度の上昇だけでなく、そのグループに対する帰属意識の向上や、その波及効果として生産効率性も向上するという



個人ページ

	名前：藤波 玲
	所属：慶應大学法学部法律学科 3年 スウェーデンのルンド大学に1年間留学中
	興味/関心 食べ歩き、スキューバダイビング、旅行、 和菓子作り、美味しいお店探し
「世界中の人と友達になりたい」 父の仕事の関係で住んでいたシドニーで、小学2年生の時私が書いた七夕の願い事。シドニーでは日本人学校から飛び出し、現地校にも通った。現地の水泳チームに所属し、同じ目標を目指す仲間に出会い、全国大会にも出場。帰国後、日本の高校では、それぞれが何か光るものを持つ多才な同級生から刺激を受け、部活動ではラクロス部に所属し、始めて“部活”を経験した。高校2年の時には様々な国からの生徒が在籍するアメリカのボーディングスクールへ1年留学。留学先でもフィールドホッケー、水泳のチームに加わり、その合間に先生方の子供達に水泳を教えるボランティア活動を行った。 そして大学三年の夏には高校時代からの目標の1つであった日米学生会議に参加することになった。そこでは他のメンバーの圧倒的な知識量、経験値、語学力、そして強い好奇心を目の当たりにして自分の無知を再認識した。彼らから強烈な刺激を受け、私も彼らに負けたくないと思っただけでなく、強く思った。 2019年の夏はJACSのみんなと過ごせたおかげで、今までで最も暑い夏になった。	
「最高の仲間と最も暑い夏」 私たち「スポーツが作る健康」分科会は、限られた時間の中で何に焦点を当てるべきか協議した結果、「メンタルヘルス」、その中でも「感情を上手にコントロールしながら行動する」という欧米では主流になりつつある「Emotional Intelligence 感情知性」を核に進めることを決めた。これに関して、1人のメンバーを除いては、ほとんど知識がなかったため、まずは全員で寝る間も惜しんで情報収集した。他の分科会がすでに議論を始めている中、我々は情報収集にかなりの時間を費やしていたので、焦りを感じることもあったが、今思い返せば1人1人が十分な知識を得て、自分の意見を確立してから議論に臨めたからこそ「本音の対話」をすることができたと思う。最初は円滑に議論を進めるために意見の衝突を恐れて遠慮がちだったメンバーだが、異なる文化、言語、育ち、経験から衝突はあって当たり前であり、これこそが日米学生会議の面白さであると気づき、議論の幅が広がった。「日本人としてどう思う？」とアメリカ側に尋ねられた時は日本人としての自分の発言に責任を感じるのと同時に、自分の日本人としてのアイデンティティを再確認した。衝突してもみんなが納得するまで話し合った結果、大変濃厚な内容の満足のできる議論をすることができた。 私の人生で一番濃い3週間を作り出してくれた素敵な仲間たちに改めてお礼を言いたい。	



名前：井口 りと

所属：慶應義塾大学環境情報学部2年

興味/関心

ダンス、読書、舞台鑑賞、食

「『できない』を追い続けて」

好奇心。私の言動の根底にある言葉だ。カゴの中の鳥状態だった中高では外の世界への興味が抑えられず留学。大学のダンスサークルでは敢えて自分ができないジャンルに挑戦。交友関係を築く上でも自分と対照的な生い立ちや生活をしている人に惹かれる。常識では選ばない道があればそちらを選ぶ。経験せずにその道が悪しとするのが気になる。新しい価値観を見い出すが好きなのだ。

大学では初めチアをしていた。最高の同期に巡り会い華やかに遊び、練習に勤しみ充実していた。だが同時に念願叶い入った慶應でチアだけをしていて良いのかという焦燥感もあった。そんな時見つけたのがJASCだった。私の周りにはこのような会議に参加する人はいない。新しい考えに沢山出会えるだろうと胸が高鳴った。賢そうな人たちが集まる会議に私なんかが入ってしまっているのかと不安もあった。だが、ここには本気で何かに取り組みようという強い意志がある人達が集まる。怖いけれど私もここで価値観を広げたい、ここは飛び込んで行かないといけない場所だと直感した。春合宿で周りに圧倒される部分もあったが、71期にならせて頂いたからには全員で有意義な時間を作れるよう頑張りたい。

「Life Changing Experience」

私たちの分科会は初回のRTタイムから議題を決める際に対立が生じ、話し合いの結果センシティブな議題を避ける事が決定した。「本音の対話」私はこれが出来なかったと他のRTが時に涙しながら議論する様子を傍目にずっと感じていた。だが今「本音の対話」は特に討論の時間を設けずとも日常会話の一環として行われていた事が想起される。RT外の時間に集まり話し合った時が価値観の相違を最も感じた。似たような志の元集まったJASCという団体の中でもこれほどまでに考え方は違うのかと無限に広がる社会の構図を垣間見た気がした。自らの経験やそれに基づく価値観、社会問題に対する意見の交換や主張。当たり前のようにこれらの事が行われる空間は学びの深い、かけがえのないものであった。

その反面、自分の無力さ、至らなさを痛感する日々でもあった。だからこそ私はこの会議をlife changing experienceであったと結論付けたい。本会議を通して学んだ事を糧に今後少しずつ社会に還元していきたいと強く思う。

参加者、EC、アラムナイの方々はじめ、JASCの活動を支えて下さっている全ての方々には感謝しきれない。



名前：山崎 敏幸

所属：獨協大学外国語学部英語学科4年

興味/関心

コーヒー、サッカー、移民、留学

「学部4年間の集大成」

私がJASCに応募をしたきっかけは、シンプルで、日本の魅力や日本が抱える問題を自分の言葉で伝えられる人間になりたいと思ったからである。更に、米国の大学院進学も視野に入れているので、JASCは日米両国について学ぶよい機会だと思った。日本側メンバーの中でも1人1人がユニークなライフストーリーを持っている。JASCを通して、多くのものを仲間と共有しながら、見て、聞いて、食べて、触って、嗅いで、時には第六感を駆使し、そこで起こる自身の内面の変化や成長とじっくり向き合い、おまけに自分達だけのオリジナルなJASC71となり生涯付き合える友人ができればという意気込みで本会議に挑んだ。

こうした経験ができたのも、戦前から始まり現在までに諸先輩方が積み上げてきた交流の歴史があつての事である。その一員として歴史を担うことが出来る事への感謝を忘れず、JASC71が終わったこれからもJASCerとしての誇りを胸に自分の分野で社会に貢献をしていきたい。

「自分と他者を知るとは—Emotional Intelligenceの活用」

今でも鮮明に覚えている。レントゲンを見た医者に、「もう君はサッカーは続けられないよ。」と言われたことを。腰のケガで15年間続いたサッカー人生が、突然日常から無くなった時、次は鬱に苦しんだ。個人の経験を基に、普段はタブーとしてなかなか話せないメンタルヘルスについて議論を深めていった。私たちのHealth & Fitness 分科会では、健康であるとはどういうことかについて議論したのちに、そうした定義がいかにもメディアや文化的規範に影響を受けているのか議論した。メインフォーラムでは、Emotional Intelligenceを学校や会社で教育していくべきだという意見を発表した。特に印象に残っているのは、自らの精神状態をどのようにコントロールするかである。過度な一般化は避けるべきだが、日本とアメリカでは異なったアプローチを取るようだ。道徳の授業で、他者との関係において善悪を考える日本に対して、アメリカでは学校のカウンセリングなどで個人の内面に焦点を当てるようだ。半年間この分科会で得た、かけがえのない仲間と様々な学びを、これからの人生に生かしていきたい。もちろん、Emotional Intelligenceの実践を忘れずに。



名前：山崎 綾香

所属：法政大学 グローバル教養学部2年

興味/関心

映画鑑賞、読書、カフェ巡り、児童関係

「特別養子縁組とJASCへの挑戦」

私は子どもが大好きで、高校の頃から児童関係のボランティアをしている。韓国のインターナショナルスクールに通っていたとき、沢山の先生方が養子を家族に迎え入れており、時には人種の違う子どもたちと素敵な家庭を築いている姿を見て感銘を受けた。そこでの経験をもとに将来、日本でも特別養子縁組を普及させたいと思っている。そのために、学生である期間に色々な経験を積んで、将来の夢の糧にしたい。そのうちの1つとして、色々な見方や意見を聞けるJASCへの参加を決意した。

JASCについては大学のメールで知り応募したいと思っていたが、選考が厳しいことに加え、何よりも朝から夜までバイトに明け暮れる春休みを過ごしていた私は、応募用紙を記入する時間がなく応募を諦めていた。だが、奇跡的に締め切りが延び、偶然にもその締切の日は日中時間があったため、これも何かの縁だと思い応募だけはしようと午前中に必死に選考の用紙を埋めた。私はあの時頑張って応募した私自身に感謝したい。光栄にも71回目の参加者として選ばれた私は、個性あふれる様々な経験を積んできた学生達と三週間意見を交わし合い、成長できる機会を得ることができた。自分が居れる環境に感謝し、悔いの無いようJASCでの時間を過ごしていきたい。

「焦りと経験価値」

初めての日米混合のRTタイムでは今後の議題案を話し合った。安楽死などの暗いトピックが数多く上がり、中でも中絶の話を議題にするかでアメリカの参加者と私で意見が対立した。初回から衝突してしまい、私は相手を傷つけてしまったのではないかと不安に思った。だが、それは杞憂だったようで、共に日々を過ごしていくうちに、その参加者とは分科会1仲良くなっていた。この経験を通して、討論の場は言葉の配慮はしつつも言いたいことを言う場所なのだと再確認できた。

本会議も中盤に差し掛かると、刻々と迫り来るタイムリミットに皆が焦りを感じ、ひとまず発表するトピックを決めて安心したいと思い始めた。ファイナルフォーラム当日、発表を無事に終え安堵したと同時に、私達のエモーショナルインテリジェンスに関するテーマがリサーチベースであり、同様の研究を大学でもできたのではないかと感じた。JASCや学生の特権を最大限に利用し、物議を醸している議題を取り扱うべきだったと、焦りに身を任せて決めてしまった私自身に後悔の念が残る。しかしそれと同時に、同世代の参加者と三週間学術的な話し合いに身を投じて得たものも多く、貴重な体験ができたと思う。

5-3. ダイバーシティ

～多様化する社会における人権～

Diversity: Dissecting Human Rights Concerns within A Diversified Society



【概要】

21世紀の今日、私たちが生きる社会は常に多様化しており、人種や民族の多様化のみならず、経済・政治的な多様化も急速に進展しつつある。女性活動家マヤ・アンジェロウの言葉を借りれば、多様性の中には美しさと力強さがある。だが、現代社会においては、多様性は諸刃の剣と言えるだろう。

グローバル化が進んでいる中、多様性は経済成長の礎と言われ、社会に潜在的な利益をもたらす。しかし、急激な社会の多様化は社会的軋轢の原因となることが多々見られる。トランプ政権による米国の不法移民弾圧政策、警官による人種差別暴行事件、女性へのシステム的な差別、LGBTQ+コミュニティに対する憎悪犯罪など、社会の多様性および社会システムの欠陥に起因した問題が起きている。当分科会では、現代社会における多様性の意義を検討し、人権の視点から多様性に関する様々な問題およびその解決策について議論した。

事前準備期間の議論・活動

ダイバーシティ分科会は週あたり2日程MTを行い、火曜日をダイバーシティに関する諸問題について議論する日、金曜日をJASCに関わる情報共有の日として割り当てた。また、ダイバーシティ勉強用のグループチャットを作成し、その中で知識や情報を共有した。議論の中では、個々人が文献や動画を持ち寄り、LGBTQ+や移民・難民、男女不平等などに関わる諸問題について意見の交換を行うと同時に、「ダイバーシティとは何か?」という様な抽象的な問いについて考える議論も行った。ときより、意見の対立や発言機会の不均等さによって衝突することもあったが、その都度MTのルールを作ったり、本音を言い合う時間を設けるなどして円滑に議論が出来るよう努めた。以下は、事前準備期間を通じて各々が学んだことである。

- ダイバーシティ分科会のメンバーは、それぞれ専攻の学問領域が異なっていた為、議題によって「当事者ではない私がどこまで関与して良いのか」など、自分自身に厳しく問いかけなければいけない場面が多々あった。そういった意味で事前研修期間は、「自分自身の在り方」を真剣に考え、自身の見方・考え方を改変することができた貴重な半年間であり、このような意義深い学びを共に築き、分かち合うことができたメンバーに、改めて感謝したい。
- MTではそれぞれの専門や興味などが違う多様なメンバーで、ダイバーシティや人権というテーマについて話し合うことができたため、より幅広い知識を得ることができた。大学では同じ専攻の学生と似たような視点からの意見交換しかしておらず、その意見やアイデアには新鮮味がなかった。しかし、RTでは異なる学問を専攻している4人のメンバーが集まったゆえ同じトピックに関して話し合っていたとしても、今まで知らなかった分野の知識や異なる立場からの意見など普段の生活では得られない真新しい知識をたくさん得ることができた。それと同時に自身の学問的立ち位置も意識させられた。今まで無意識ではあったが、私自身がどのような視点からダイバーシティという社会問題に取り組んでいるのか考えさせられたMTだった。
- そもそもJASCの醍醐味とは何か。本会議ももちろんだが、その前の分科会の仲間4人との濃い時間も、私にとってとても大切だった。最初は全員興味も専攻も異なり知識レベルに差があって、議論のコツが見えなかった。しかし、春合宿以降は距離が縮まり、週に1回はFT企画、1回は掘り下げた議論と、最終的には週2回も顔を合わせて議論していたのだが、全く飽きなかった。次第に互いの考え方の傾向や、議論の中の立ち位置を掴んでから、私は自分が議論の中で「ストッパー」として、進んだ議論を振り返って整理し、もう一度見直すことを促す役割なのだと発見した。それまでアクセル役が多かったのだが、チームでは1つずつ論理を組み立てる慎重派だという新たな自分の一面を発見したのは、アカデミックな面と並ぶくらい大きな学びだった。

- 週に2回と理解度の差や意見の齟齬が生じた。それでも、分科会で双方向の学び合いや多くのFTを積極的かつ継続的に進めていく中で、多くの知識や理解を得ることができた。加えて、ダイバーシティは社会を構成する全ての人に関わる項目であるため、「どのような立場から考えを述べているのか」やどのRTよりも積極的にMTを開いておきながら、本会議1か月前からは毎朝30分ずつ電話を始める程、ダイバーシティ分科会には情熱の熱いメンバーが揃っていた。そんなメンバーと真っ向からダイバーシティに向き合えた思い出は、専攻の学問領域が異なっていた為それぞれが多忙なスケジュールの中で時間を割いては、個人プレゼンを準備し、日英両言語でRTメンバーと共有し合った。時にはそれぞれの専門分野の講義で学んだ面白いテーマについて共有し、お互いの知的好奇心を刺激し合っていた。私は、当初はイエスマン的な存在であったが、RTメンバーとそれぞれの他己分析をし合った際に自分の意見が弱いと指摘され、周りに流されずに自分の意見を持つということに意識をし始めたことで、本会議中は私の価値観と異なった価値観を持ったメンバーと本気で主観をぶつけ合うことができた。メンバー同士がそれぞれの個性を認め合ったうえでの、本音のフィードバックのおかげで適材適所な役割分担と本音の対談の上での信頼関係を築くことができ、この出会いには感謝してもしきれない。

【防衛大学研修】

防衛大は、当初は多様性と真逆のベクトルをもつ場所に見えた。しかし、夜の討論会は白熱し、「いざというとき、日頃の信頼が生死を分けるなら、体力的にどうしてもハンデのある女性をリーダーにはできない」という、国防を担う立場からくる言葉が深く心に残っている。私も将来生死に関わる職業を担う者として、生死の前にはダイバーシティも無力なのではないかという視点をもつようになり、その後の議論にも繋がったと感じる。



【Field Trips】

「東京レインボープライド」

春合宿中に東京レインボーパレードに参列することができた。ジェンダーとセクシャルマイノリティであるLGBTQ+についての感覚がまだ十分に掴めていなかった私達にとって、当事者の思いが顕著に反映されたあの空間で、インプットすることや感じる事が多々あった。LGBTQ+についての問題を討論する上で悲観的になっていた私達の背中を押すかのように、多くの人から激励の言葉をかけてもらえ、アライとしてLGBTQ+の問題が身近に感じられるようになった。



「TOPIA訪問」

春合宿中に東京大学でセクシャルマイノリティの支援をするサークル「TOPIA」を知り、実際にミーティングに参加した。テーマは温泉同好会とコラボして温泉に入りやすくなるような工夫を考えるなど様々だったが、その時間いた「LGBTQにとって過ごしやすい空間は、誰にとっても過ごしやすい」という言葉はダイバーシティ実現のヒントになると感じた。

「Debito Arudou氏とのインタビュー」



外国にルーツを持つ人々（以下外国人とする）に対する偏見や差別を学ぶためにDebito Arudou氏にインタビューを行った。Arudou氏は日本国内における外国人差別を専門とする研究者であり、実際に差別を経験した当事者であり、アクティビストでもあった。そのため、学術的な視点に加え、在留外国人の現状や解決に向けた糸口を学ぶことができた。特に、その外見だけで「外人」と扱う潜在的な差別意識は、日本社会が向き合うべき重要な問題であると感じた。

「北九州人権啓発センター」

北九州人権啓発センターでは、北九州市のダイバーシティ促進に向けた取り組みを学んだ。婦人会が中心になって公害問題を克服した北九州市は、今日においても「市民力」を重視したボトムアップの施策を市政の中心に据えている。北九州市は、人権問題の認知拡大や「約束事運動」等の市民主体の取り組みを積極的に進めており、国内外の評価も高い。地域レベルの取り組みの重要性を再認識する上で、このFTから学ぶことは多かった。

「JICA移住博物館」



JICA移住博物館では主に日本からアメリカ大陸へ移住した人々の歴史を学ぶことができた。特にアメリカやブラジルへ移住した日系人に関する資料が数多くあり、移住したのちの日系人の世代を超え抱える問題などについて知ることができた。普段、移民問題といわれて考えがちなのはホスト国という立場からどう外国人労働者や外国にルーツのある子どもたち

と向き合っていくかということである。しかし、この博物館では送り出し国として日本を離れた日系人の人々がホスト国でどのような生活をしているのか学ぶことができ、常にホスト国という立場からしか議論していなかった私たちに新たな気づきをもたらしてもらった。

「新大久保の取り組み」

新大久保は外国人住民との共生について向き合い続けてきた先駆的な地域だった。90年代から短期的な滞在者が増え始めていたが、現代では家族とともに定住する外国人住民が増えていく上でどのようにより良い生活のために住民同士でコミュニティを形成していくかともにまちをつくるNGOとして活動している市民団体の共住懇では地元の住民がどのような工夫や意識で新たにやってきた住民と向き合ってきたか学ぶことができた。

「武田先生との勉強会」

防衛大学研修後に青山学院大学を訪れ、JASCのアラムナイでありながら、現在青山学院大学で教授をなさっている武田教授と英語で日米についてのみならずJASCについても貴重なお話しをお伺いすることができた。最後には、初代JASCの記念写真が撮られた場所にJASC史料館ができるというお話を聞きながら、私達がJASCの歴史を受け継ぎ、刻み込んでいく存在であるということを改めて実感することができた。



本会議議論の流れ及び総括・考察

【高知サイト】

高知で初の顔合わせを果たした私達は、出会ったその日の夕食から同じ席に座り、気が付けば議論が始まっていた。あまりにも自然とディスカッションをしていたので、RTコーディネーターから笑われたほど、お互い居心地が良く、こんなに熱い意思を持ったメンバーと共に三週間を送ることが楽しみで仕方なかった。

高知サイトでは、主にジェンダーについて話を進めた。というのも、夕食中にジェンダーの話で盛り上がり、そのままそのテーマでの議論が始まったからである。まずは、日本とアメリカの現状についての共有から始まり、その中で共通点と相違点を考察した。お互いの国の価値観の違いや、国民性による考え方の違いに驚くと共に、その中でも"gender inequality"という概念はどちらにも根付いているということを実感した。分科会内では女性のメンバーが多く、女性の観点から自分の経験談や、いかに女性としてハンデを感じているか等の意見を交換するだけでも、日米で大きな違いがみられた。しかし、議論の最中も、誰一人男性を責めるフェミニズム的な被害者意識を持った女性メンバーはおらず、どうしてこのような概念が生まれてしまったのだろう？と冷静に分析することができた。歴史的背景や社会の風潮を読み取り、なぜ男女においてこのような格差が生じてしまったのかを日米両国の観点から考察した。

議論を進める中で出会ったのが「特権ダイアグラム」である。それは、様々な特権方向に軸が何本にも伸びる、自分がいかに特権を与えられているかを可視化する図だ。私達は、ジェンダーという軸をとったときに、「マイノリティ」である女性ではなく、「マジョリティ」である男性からの視点を取り入れた。女性だけが声をあげるだけでは解決できないが、そこにさらに男性が参加することによって大きな声となり、この問題への意識が大きく変わるのではと予測し、多方面から問題の解決策へ歩み寄った。

【京都サイト】

京都サイトでは、移民・難民問題について中心に議論を行った。日本の難民認定者数は、米国のそれと比較して著しく少ない。また、移民政策についても、日本政府は否定的な立場をとっている。米国側の参加者からは、少子高齢化による労働者不足やUNHCRへの民間寄付額が高いことを踏まえ、「もっと受け入れるべきではないか」という指摘を受けた。一方でアメリカ側参加者から米国の状況を聞くと、米国は移民・難民の受入数は多いものの、近年、学歴や職歴の優秀な者のみを受け入れる傾向があり、移民へのスタンスが変化しているという指摘も出た。移民・難民の受け入れは、人権保護の側面に加えて、彼らの送金が出身国のGDPに貢献していたり、受け入れ国の労働者不足を補っていたりと、様々な方面に恩恵をもたらすため、各国の前向きな検討が

必要ではないかという意見が多くあった。その一方、受け入れ体制が不十分である場合、人種や宗教間の対立を生む懸念もあり、そこから生まれる差別・偏見を中心に議論を進めた。

移民について議論するときに、常に念頭に置いたのは、日米で状況が全く異なるテーマだということだ。アメリカは、移民国家であり、国の創立時から人種の多様性がある。よって、アメリカ社会においては、外見だけでは第一世代の移民なのか、近年渡米してきた移民なのか区別することは出来ない。アメリカ社会において人権問題が議論される際は、アメリカ人か否かということよりも、人種や宗教等のアイデンティティに焦点が当てられることが多い。白人には特権があり、社会的に優位な立場にあるが、人種や宗教によっては社会的・経済的に不当に扱われることがある。その一方で日本社会は、「日本人」と「外国人」という2分化された構図の中で、個々人が扱われる。単一的な日本文化への同調圧力や、外国にルーツを持つ者に対する差別・偏見は解決すべき課題である。

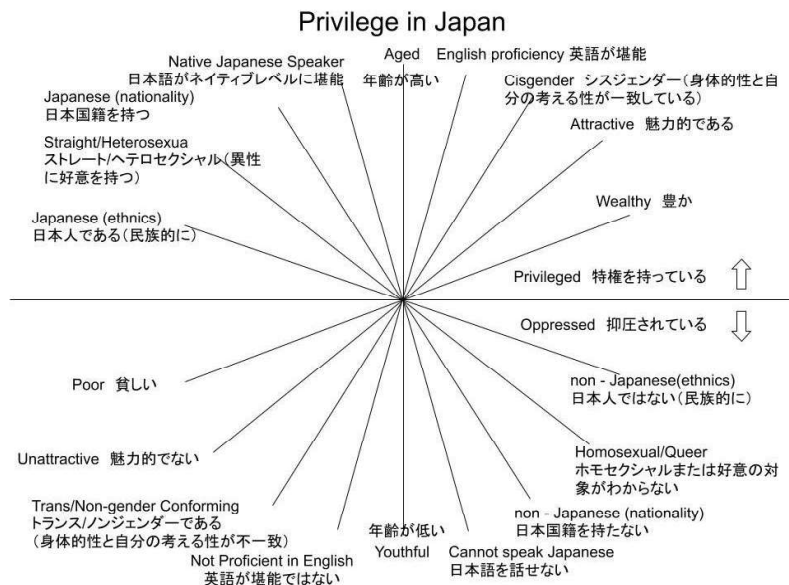
【岐阜サイト】

岐阜サイトは、本会議でダイバーシティ分科会が最大の困難に直面した時期だった。これまでメンバーの関係も良好だったし、RT Timeを行うたびに議論は一定の着地点に落ち着き、このまま岐阜サイトも順調に進むだろう、と思っていた。しかし、予想とは大きく異なる展開が待ち受けていた。それは、初日の夜に、初めてLGBTQの話を始めたときだった。そのときの「議論」は、今までの議論と何かが違った。議論というより、豊富な知識を持つメンバーが持たざるメンバーに知識を共有する場と化していた。議論の軸もブレたまま、多分メンバー全員が議論のゴールがどこかわからず、迷子になっていたと思う。その事件の後、初めて、分科会内でお互いの関係に綻びが生じた。アメデリの思いを完全には汲み取れないというのは、英語を使って議論する以上わかっていたつもりだった。でもこのときほど、英語のせいだけではない、根本的な伝える力と聞く力が決定的に欠けている自分を悔しく思ったことはない。目の前で話しているのに、どうして誤解が生じるのか、悩んだ。

議論は、アカデミックな交流の場だけなのではない。背景も価値観も違う多様な人間が集まり、コミュニケーションを通し、お互いを理解し新たな考えを創造する場だ。つまり、コミュニケーションは議論の土台だ。岐阜の最終日にはアカデミックな議論から休み、全員で互いへの本心を語り合う時間を設けた。出会って10日。初めて心の内を共有したことで、本当のコミュニケーションができた気がした。この試練を全員で乗り越えたことで、国や言葉、育ってきた環境...何が違えど目の前の「人」に向き合えば、必ず分かり合える、そしてより大きな絆を結べると、私は確信した。「岐阜の乱」はJASCのハイライトとして強烈に記憶に残った。

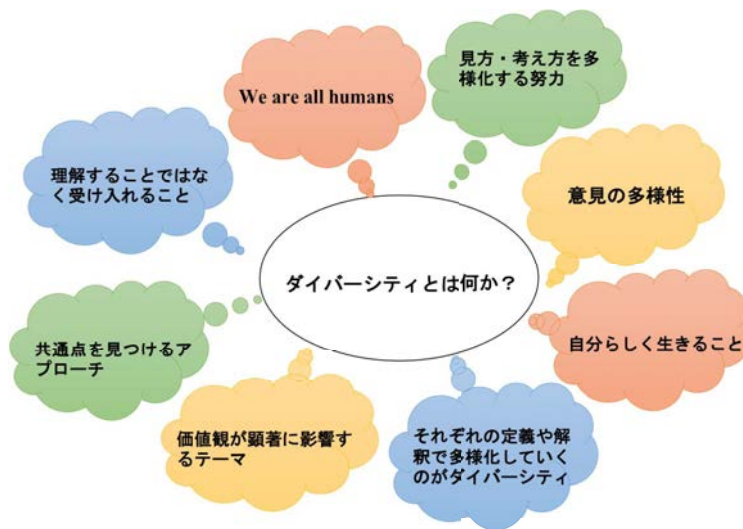
【東京サイト】

今振り返ると、ファイナルフォーラムではこの三週間の集大成としてふさわしい私たちらしい発表ができたのではないと思う。私たちは三週間ではとても語りきれないはずのジェンダー・移民・LGBTQ+と奥が深く、幅広いトピックを議論のテーマとして扱った。1人1人がそれぞれの分野に思い入れが強かったが故に、時には認識の違いや価値観の違いなどから誤解が生じることもあった。しかし、常に全員に共通していたのは、お互いに本心から向かい合う姿勢だったと思う。お互いの意見を尊重し、異なる考え方や意見を理解しようとする姿勢は、本会議中、何時も共通して持ち合わせていた。ファイナルプレゼンテーションでは、参加者に向けたアクティビティを取り入れたり、ビデオを作成したりした。このRTでの三週間の議論で得た結論こそ、ダイバーシティというテーマにおける答えなのである、と私たちの考えを一方向的にシェアすることが目的ではなかった。プレゼンを聞いた参加者1人1人が、その後の日常生活に戻ったときに、ダイバーシティについて意識をもち、考え始めるきっかけになるように、という願いがあった。「ダイバーシティ分科会」の私たちらしい発表になったのではないだろうか。LGBTQ+ sessionは、常に私たちが向き合ってきたLGBTQ+というテーマについて他のRTメンバーや、長年このテーマの前線で活躍しているパネリストがどのように考えるのか知ることができ、とても価値のある時間だった。分科会の議論では煮詰まってしまい、なかなか話し合うことができなかったAllyに関して、AllyとしてのLGBTQ+コミュニティへの参加の仕方について、登壇者それぞれの立場から活発な意見を得ることができ、LGBTQのテーマへの自分なりの向き合い方のヒントになった。



分科会としての結論

"Diversity?"、"YAHH!" ダイバーシティの合言葉。そして、私はダイバーシティの一員なんだ、そう実感させてくれる言葉。本会議では、出欠確認として分科会ごとに手をあげる場面が多々あるのだが、ダイバーシティは最初から最後まで"YAHH!"と全員で手をあげながら叫んでいた。流石ダイバーシティ分科会というべきなのか、自由人の集まりだったこの分科会では、議論以外で固まって行動するということが少なかった。自由時間になれば、各自が思い思いに回り、バスの座席は、後ろで爆睡する人もいれば前で他の分科会の参加者と議論する人もいた。普段はバラバラなのに、出欠確認のときだけは、自然と声揃った。ダイバーシティとは、まさにこんな感じなのかもしれない。それぞれ個性を確立しながら、いざとなるとまとまる9人の小さなグループだったが、1人1人が違う色で輝いていて、それが集まると新しい1つの光になって輝いた、そんな3週間だった。



個人ページ

	名前：岩淵 丈和
	所属： 福岡教育大学教育学部初等教員養成課程英語選修4年
	興味/関心：教育、人の移動、移民難民、アイデンティティ
「四年間の学びの集大成に」 私の夢は「子どもが主人公である世界」を実現することです。「子どもが主人公である世界」とは子どもの自由や権利が優先事項とされる社会の在り方を指します。学校教育に限らず国家やNGOなど様々な立場からこの夢の実現を達成する一端を担っていきたくと考えています。私は、日本・米・スウェーデンでの教育実習に加え、スウェーデンでは、移民・難民のバックグラウンドを持つ子どもへの教育支援を体験的に学習してきました。大学では英語教授法や教育システムなどに加え、外国人児童や帰国子女への教育や多文化共生について学んでいます。また、在福岡米領事館と協力しながら市民に公開する形で講演会の企画・運営を学生の中心となって行ってきました。大学卒業後は大学院に進学し学術的知見を広げると同時に、移民・難民の教育支援に実際に関わっていきたくと考えています。JASCでは教育の専門性を持って議論に新しいテイストを加えながら他の学生と協働的な学びを重ね自他共に実りのあるものになりたいです。事前研修や本会議を通じて大きく成長できる半年間にしたいです。	
「ダイバーシティ分科会で学んだこと」 ダイバーシティ分科会ではLGBTQ+や男女平等、移民・難民など多岐にわたる項目を取り上げたが、その当事者が議論の場にいる中で話し合いを進めていくことは決して簡単なことではなかった。主観や感情が深く関わる人権に関する議論においては、各々が持つコンテキストや価値観の多様性に向き合わなければならず、議論の中でときに誤解や不信感を生み、メンバーの間に溝をつくった。それでも、他者の意見を真摯に受け入れながら自身を省みる姿勢を続けてきた私たちは、本会議を通じて大きく成長できた。「ダイバーシティ」は、世間で広く使用されている言葉であるにも関わらず、その本質は見出し難い。社会における「ダイバーシティ」達成に向けた明確な答えも無ければ、各々が考える「ダイバーシティ」の定義も多種多様である。この難題を解く上での重要なヒントはJASCが与えてくれた気がする。それは、「受け入れること」の大切さである。ときに意見の不一致があるかもしれないが、それでも他者の思いを尊重し受け入れ続けたい。一見地道で非効率的のように思えるこの姿勢こそが多様性に溢れた社会の実現のために必要なのではないだろうか。	



名前：岩田 純奈

所属：慶應義塾大学医学部 3年

興味/関心：

グローバルヘルス、公衆衛生、歴史、世界遺産

「本当にやりたいことを見つける旅の途中に立ち寄った、JASC」

学生生活6年間の中で、最後の自由な夏。JASC71に捧げると決めました！

ダイバーシティ分科会では、自分のアイデンティティはなんだろう、と私自身を見つめ直す瞬間に幾度も立ち会いました。その度に私はどんな風に輝きたいのかと考え続けていました。小学生の頃、世界の歴史や世界遺産に強い関心を寄せており、「こんなに未知の世界が日本の外にはあるのか」と感じたことを今でも強く覚えています。中高では、英語を用いて様々な人々と接する中で、世界中にかけがえのない友人や恩師に出逢うことができました。これらの経験が、世界で働こう、「人」と関わる仕事をしよう、という思いへ繋がり、私は医学を学ぶことを決意しました。

今の夢は、世界中全ての人が健康であるような環境を作ることです。健康は全ての基本である＝医学は全ての人がポテンシャルを最大に発揮できるための、「人」を支える学問です。医学を修めれば世界中どこに行っても必要な人間になれるのではないかと信じて勉強し、公衆衛生の研究を行いながら、将来はWHOで働くことを目標にしています。学外では小学校での保健授業活動やNGOでのインターンなど様々な経験を通して視野を広げています。今私は、自分の熱意を傾けたい場所を探す、長い旅の途中に立っています。

「向き合うということ」

「答えの出ない問題に挑戦したい。でも、みんな違ってみんな良いという結論ではなく、少しでも答えに近づきたい」一面接でこう話した。ダイバーシティについて議論すると、見方が様々で、全ての人が納得するゴールを見つけられなかった。アメリカの参加者が加わると、価値観が違いすぎて更に難航した。それでも互いの立場を尊重しつつ、手探りで少しでも合意を得ようと議論した。

ジェンダーについて話し合ったとき、私の考えるGender Equalityとは何か、必死で説明して、メンバーが「そうだね」と同意を表すスナップをくれた。その時ダイバーシティという、学生が扱うには大きすぎるのではないかと思うテーマでも、議論を重ねれば必ず着地点が見つかるのだと実感した。

議論以外では、ミスコミュニケーションから生まれるメンバー間の人間関係の纏れに苦労したが、最後の夜に1対1で対面で話し、綻びを解くことができた。相手がいかに自分と違って本音をぶつけてみることに受け止めること。まずは目の前の1人に向き合ってみること。分科会での大変な経験が教えてくれた「違いを乗り越えた本当の絆の作り方」は、これからの私の人生の糧となるだろう。



名前：白石 智鏡

所属：立命館アジア太平洋大学 2年

興味/関心：開発学、心理学、個性学(個性心理学)、
自己分析、セルフエスティーム、多文化共生

「人生の岐路」

自分の愛する家族のイニシャルと同じ”JASC”を、初めて知った時どこか運命を感じた。私の人生の分岐点は、中学生の時、少年少女国連大使九州代表としてニューヨークの国連本部でスピーチをしたことだ。その際に受けたスタンディングオベーションによって、私の人生は一瞬で天地一変した。その一方で、現地の学生との討論の際に上手く英語でコミュニケーションを図ることが出来ず悔しさも味わった。JASC71は、私にとって2度目の人生の分岐点、そして、中学生の時のリベンジとして挑戦した。私の夢は大きく2つあり、1つは誰もが自分の輝く個性を愛せるような社会を作ること。そしてもう1つは、国連職員としてもう一度国連本部に戻り、貧困に苦しむ人々、特に子ども兵として戦場に立たされている無邪気な子供達を救うことだ。現在は、90カ国以上からの留学生が半分を占める立命館アジア太平洋大学に通い、学生寮で寮長として日々多様な価値観に触れながら国際交流を満喫している。また、多文化協働クラスのTAとして、異文化間における衝突や葛藤をサポートするために日々修行中だ。これからも感謝の気持ちを忘れずに、一期一会を大切にしていきたい。

「単純な答え」

「あなたにとってのダイバーシティとは？」そんな問いで、私達の最終プレゼンは幕を閉じた。「現代における『ダイバーシティ』とは、意味を持たない言葉である」と初期のRTミーティングで耳にして以来、「言葉の意味を追求するのはナンセンスなのか？」と懐疑的になりつつ、3週間互いの主観と主観をぶつけ合った。「他者との違いを受け入れる」—たったそれだけのことができず、議論は右往左往し、平行線を辿り、理解不能な状態に陥り、何度も悔し涙を流した。「LGBTQ+」「移民・難民問題」「男女平等」等の社会問題に対し、当事者意識の低かった私は、マイノリティーの人権を守ろうとする偽善者だったのかもしれない。「弱者を助けたい」という純粋な思いが時として誰かを傷つける武器となり、感情的に主観や価値観がぶつかり合うこともあった。自分を完全に理解できる人すらいないのに、それでも他者を理解しようと全力を尽くした結果、「完全に理解できなくてもいいから、認めよう」と心から思えるようになった。そんな単純な答えを探す過程を、糸が絡まるように複雑化しては自暴自棄になった夏、『ダイバーシティ』という言葉に対する、私なりの意味が見出せた。



名前：高橋 真央

所属：東海大学教養学部国際学科 3年

興味/関心：

移民・難民、差別・偏見、ジェンダー、社会統合

「何事にも全力で挑戦！」を大学4年間の目標にしています、高橋真央です。

身長は小さめですが、人一倍大きな「熱意」とともに生きています。

中学生の時、初めて日本を離れ、自然豊かなニュージーランドでの異文化体験から日本以外の国・地域の文化・言語・人などに興味を持ち始め、現在は英語・国際学・社会学を軸として、グローバルな視点から様々なことを学術的かつ体験的に学んでいます。

日本とアジア各国・地域との間で対日理解促進交流プロジェクトでマレーシアを訪問し、日本文化を発信するとともに、現地の教育制度を学びました。また、アメリカ留学の際に現地の難民に対して英語のクラスを提供しているボランティア団体でアシスタントスタッフとして働きました。移民大国アメリカで実際に難民の人々と関わる中で、移民・難民の社会統合について市民ボランティアの視点から学ぶことが出来ました。これらの経験から、現在、大学では、特に移民問題を中心に学んでいます。「外国人住民と日本人がともに活躍できる社会を実現する」といテーマのもと学んでいます。JASCはそんな私が新たな自分自身への挑戦として参加を決めました！

「私にとってのダイバーシティとは」

現代の社会では「ダイバーシティ」という単語が1人歩きしてしまい本質について考える機会は少ない。実際、ダイバーシティは社会で広く浸透しており人によって定義や意味が変わっている。本会議を通じても「ダイバーシティとは何か？」という本質は見つからなかった。しかし、そんなことを考える必要性はないのではないかとさえ思えるようになった3週間だった。男女平等や移民・難民にまつわる分野のことやLGBTQ+について話す際、日米という2カ国から集まった社会を少しでも良くしたいという同じ目標を持つ、たった9人でも意見は多種多様だった。さらに、センシティブなトピックだったからこそ言語の壁や認識の違いから私自身の言葉が直接的な英語表現のせいで誰かを傷つけたり、価値観の違いや認識の違いから傷つけられたりもした。しかし、全員に共通していたのは相手を理解しようとする姿勢だった。時には完全に相手のことを理解することや、意見を受け入れることは難しいかもしれない。それでも相手を理解しようとする姿勢こそが1番大切なのではないだろうか、そんな単純だが見落としがちなことに気づけた時間だった。

5-4. ナショナリズムとグローバルの関連性

～現代における日米の政治的・社会的パラダイムとは～

Nationalism and Globalism: Shifting Paradigm in the Modern Era



【概要】

現代社会は、政治的また社会的にどのような特徴があるのか？グローバル化の潮流は日本や米国のみならず、国際社会を席卷した。多数の企業が国境をまたいでビジネスを展開し、ヒト・モノの流れはますます流動化している。環境保全や人口の移動といった、伝統的に国家という枠組みで対処されていた問題は今やその国境を越え、国家間での対話や協力が求められている。しかしながら、最近のナショナリズムの再燃を見逃すことはできない。米国では白人主義者がより厳しい移民政策を要求し、トランプ大統領は「アメリカ第一主義」の外交を展開している。日本では、安倍政権が憲法第九条を主とする憲法改正に力を入れ、右翼団体は第2次世界大戦中の日本政府・日本軍に関する歴史修正を唱えている。当分科会では、日本・米国社会におけるグローバル化とナショナリズムの現象を比較しながら、現代におけるパラダイムとは何か、我々の社会はどこに向かっているのか等の命題を探求する。様々な議論・アクティビティを通し、幅広い視野と行動力を持つ世界市民となることを目指していく。

事前準備期間の議論/活動

実行委員はアメリカ側1人のみ、さらに私は本会議直前までミャンマーでインターン中という難しい状況だったが、それを感じさせない取り組みができた。合計で半年にも満たない短い期間であったが、非常に充実した事前準備期間であった。ここでは本会議までの期間の有効な使い方や、具体的な議論内容およびチームビルディングの工夫について述べたいと思う。

【春合宿】



まずは、1時間程度のキックオフミーティングを行った。主にナショナリズムやグローバリズムといった単語の定義や、お互いの関心分野の確認に時間をかけた。

次にフィールドトリップとして靖国神社およびレインボーパレードの見学を行った。戦争やそれに付随したナショナリズム、またLGBTQに対する各々の考え方を共有したことは、できたばかりのチームの相互理解のきっかけ

となってくれたと感じる。また、夜は遅い時間までお互いの価値観の確認や今後の指針決めを行った。週一度オンラインミーティングを実施することとし、週ごとの担当者が文献を選んで共有し、残りの3人に議論テーマや質問を提示するというシステムをとることに決めた。

このように時間が短い中でも、RTのデリ同士でコミュニケーションを多くとることができた。これがその後の充実につながっていたことは明らかである。

【オンラインミーティング】

春合宿後は早速オンラインミーティングに取り組んだ。結論から言えばかなり充実した時間を過ごすことができた。その要因は大きく2つだ。まずはECであるShunjiとサポーターをしてくれたKokiのハードワークである。2人による進捗管理やリマインドが徹底されていたことで、着実にミーティングを進めることができた。オンラインミーティングを上手く進めるためには、ECの仕事に徹する姿勢は必要不可欠であると思う。1人のデリとして心から感謝している。次にデリ4人のお互いへのリスペクトと責任感である。無断で欠席したり仕事をしていなかったりということが全く起こらなかった。最低限のことと感じるかもしれないが、それを徹底することは本会議までの準備において最も重要なことであった。議論については象徴天皇制に始まり、自衛隊、日本人の民族性、グローバル、グローバリズムそのものの定義、米国のナショナリズムおよびグローバリズム、などのテーマに沿って各回90分を目安に実施した。

【防大研修】

ナショナリズムとグローバリズムという自衛隊と関わりの深いテーマであるため、集団的自衛権などの防衛法や天皇制について防大生と活発な議論を交わすことができた。特に「自分は国のために命をかけてもいいと思っているから、自衛隊のことをもっと理解してほしい」というある防大生の意見は心を打つものであった。また、このRTのデリ全員が集まる最後の機会であったため、防大研修終了後にミーティングを開いた。いいメンバーに恵まれたと実感した瞬間であった。



【直前合宿】

1時間程度ミーティングを開き、これまで議論した内容の確認とアメリカ側と議論してみたい内容の整理を行った。また、東アジアRTとの合同ミーティングを模擬国連形式で行った。憲法9条をテーマに各人が違う国の立場から意見を出し合い、夜遅くまで活発な議論ができた。最後に、海外にいた自分を気にかけてくれ、協力してくれたECやデリのみんなに心から感謝したい。そんな彼らと出会えたことは大きな財産である。

本会議中の流れ及び総括/考察

【高知サイト】

- ・ 事前期間活動の成果を共有（日米各サイドが何を話し合ってきたか、各々の関心分野）
- ・ 分科会としてのゴール決定
（本会議期間中何を話し合っていくか）
- ・ FTはどこへ行きたいか。
本会議中の体験でRTとして何を学ぶか。
－当初は靖国神社（東京）を検討
- ・ アメリカのナショナリズムの特徴とは。
日本のナショナリズムの本質とは？そして両者の違いとは。
- ・ ナショナリズム形成を助長するmythとは。
－日本：単一民族性という虚偽/日本文化の固有性という疑問
－アメリカ：自由・平等の限定性/Manifest Destinyによる民衆の扇動
- ・ 象徴天皇制について：日本側から見る天皇制、アメリカ側から見る天皇制



【京都サイト】

- ・ NationalismとPatriotismの違いとは？
- ・ ベネディクトアンダーソン
『想像の共同体』：「nation」とは何か。
「日本人」とはいつたい？
nationalityを規定するのは文化的同一性か、
言語や人種、法律か？
- ・ ファイナルフォーラムに向けた準備開始
（分担/プレゼン資料作成）
- ・ アメリカの歴史とナショナリズム
（独立宣言/南北戦争/公民権運動/2016年大統領選/2050年問題:白人のマイノリティ化）



【岐阜サイト】

- 東アジアRTとのJoint（憲法第9条をめぐって－安全保障とナショナリズム）
- プレゼン資料のグループ内共有

【東京サイト】

- 愛国心について：自国のどの部分を誇ることができるか（歴史/平和/民族性 etc..）
- ファイナルフォーラムに向けた最終準備
- ファイナルフォーラム本番

本会議を通じて分科会の仲間と共に活動した時間は、私にとってまさにJASCのハイライトであった。世界中でグローバリズムの限界が叫ばれる中、近年の国際社会において大きな存在感を放つナショナリズムという概念について、本会議期間では事前準備期間よりも、さらに多角的にそして詳らかに考察することができた。

この3週間を振り返れば、当分科会は日米の学生が持つ価値観の相違を度々認識した。これは私たちにとって小さくない困難であった。しかしそれと同時に、これは未知の領域への邂逅を可能とする非常に刺激的な機会であることを意味していたように思う。私は分科会テーマの議論を進める中で、日米のナショナリズムは様々な異なる特色を有しており、またその形成を助長する背景も大きく異なることを強く実感した。例えば、日本では天皇や歴史、単一民族性がナショナリズム形成に重要な要素である。その一方で、アメリカでは人種や民主主義、幸福自由の追求などがナショナリズム形成に極めて重要な要素である。また、日米ナショナリストの活動形態の相違（日本では比較的非暴力的かつ修辭的、アメリカではより暴力的、行動中心的）や、ナショナリズムが社会や市民の生活へもたらす影響といった観点でも大きな相違点が存在した。こうして本会議を通して、私たちはアメリカへの理解を深めるとともに、日本について再発見する機会を得ることができた。3週間の対話の日々は他を知ることで、己自身の認知を深めることの重要性を教えてくれた。また、本会議中を回顧すれば、ナショナリズム分科会は自らがJASC71を創り上げていこうと主体的な意思を持った参加者の集うグループであったと思う。当分科会のほとんど全員がサイトフォーラムや各セッションの場で登壇し意見を述べる機会を自ら創り出した。特に岐阜のサイトフォーラムでは、JASC参加者側の登壇者が全てナショナリズム分科会でであったことは大変印象深い。そして最後に、本会議の3週間にわたって共に志高く挑戦した経験は、メンバーそれぞれの今後の歩みにおいて、非常に大きなターニングポイントとなることであろう。

私たちナショナリズム分科会は3週間生活を共にし本音の対話を繰り返す中で、強い信頼と絆で結ばれた。将来それぞれの場所で、何10年先も常に互いを励まし高め合えるような関係であり続けることができると私は確信している。

分科会議論の結論

私たちナショナリズム分科会がファイナルフォーラムにて提案した結論は、nationalismという排他的かつ煽動的な政治的概念をpatriotismに置換しようということだ。私たちはnationalismという言葉を形成するnationとは何か、という素朴な疑問から始めた。著名な社会学者であるBenedict Andersonの議論に依拠しつつ、nationとは人為的な境界線、すなわち国境に基づく人工的な産物に過ぎないという着地点を見出した。nationから派生したイデオロギーであるnationalismとは反グローバリズム、xenophobia、自国中心主義を構成要素としているとの議論から、nationalismの源泉に隠れた「謎 (myth)」についてくまなく分析した。日本という国の歴史を紐解くと無視できない天皇制についてのmythや、自由や平等を謳う米国が抱える矛盾というmythなど、nationalistが自国民を煽動すべく利用するレトリックの中に隠された非整合性を徹底的に追求した。こうした知的作業の中で私たちを最も悩ませたのは、「国を誇りに思う気持ち」とnationalismの差異だ。そこで「自国を誇りに思う気持ち」を表現することができる概念がまさしくpatriotismだと私たちは考えた。私たちはタレントショーで日米両国の国歌を堂々と歌い切った。

日本側参加者にとっては直前合宿に始まり、RTミーティングや防衛大学校研修などで議論を交わし、知見を深め、本会議で米国の学生ととことん議論できたと感じている。

私たちはニュースや新聞に目を向けるたびに第71回日米学生会議を思い返すだろう。昨今の世の中において、ナショナリズムとグローバリズムは密接に関係しており、世界が不安定な均衡を保つ中で最も重要な社会的概念だと言っても過言ではないだろう。私たちが生き抜く世の中の現実と向き合い、グローバリズムが世界を横断しようとした折に世界史に刻まれたナショナリズムの興隆を熟考することを通して日米の学生が議論することができたことは一定の価値があったと言えるだろう。

次は、本稿を読んでくださった読者諸賢の皆様が私たちのRTに参加し、ナショナリズムとグローバリズムについて考える番です。What are your thoughts on nationalism and globalism?



個人ページ

	<p>名前：安藤 飛悠吾</p> <p>所属：名古屋市立大学薬学部生命薬科学科 3年</p> <p>興味/関心</p> <p>薬学・哲学（デリダ、ヴィトゲンシュタイン、カント、キルケゴール）・歴史・政治 サッカー・将棋</p>
<p>「歴史を考えるための一期一会」</p> <p>『差別感情の哲学』や『不幸論』（いずれも中島義道の著作）によれば、いわゆる「原罪」は不可避であることが示唆されるが、同時に「原罪」と「誠実」に向き合う不断の努力も重要であることが分かる。</p> <p>自分自身の知的体力が残っている間に、関心のある題材についてとことん「誠実」に議論すべきだという直感がふと湧いてきた。中高6年間の友であります第71回日米学生会議の日本側実行委員長がJASCを紹介してくれなかったら、このような直感を得ることがなかったと考えると、一期一会という言葉が大変重いものを感じられる。</p> <p>僕自身が最も興味があるのは歴史を駆動する力学だと考える。世界大戦の主要な原因だと考えられるブロック経済への反省から生じた「globalisation」の興隆が「nationalism」という概念にどう関連しているのかという疑問について、米国・日本の学生との議論を通じて考えることができた。</p> <p>名古屋で生まれ、幼少期に米国およびメキシコに在住し、高校1年の冬には英国Eton校に留学した。第71回日米学生会議は僕にとってはこれらの経験の次に来る振り返るべき「next stop」となった。</p>	
<p>「歴史の本質への探究」</p> <p>昨今、ナショナリズムの興隆は議論され続けている。世界が不安視するアマゾンの熱帯雨林の火災にもナショナリズムが関連していると多くの識者が指摘するように、現在の国際政治においてナショナリズムという概念は無視できない。こうしたトピックを日米両国の学生と屈託なく議論し分析するというアカデミックな活動は、薬学を専攻する者として大変有意義であった。また、初心としてRTでの議論を通じて「歴史の駆動力」を研究したいという気持ちがあったが、ナショナリズムの源泉を歴史に求める話題が多かったことから、ナショナリズムとグローバリズムの独特な相関関係が「歴史の駆動力」となりうることを再認識できた。</p> <p>米国の学生と議論していると、ナショナリズムという非常に悩ましい問題を皮肉とwitで笑い飛ばそうという雰囲気があり、とても楽しかった。決してふざけているわけではなく、問題の本質を捉え、言葉を使って「笑顔」をつくるという態度は、日本にはない知的営みであると感じた。</p> <p>イートン校への留学を通してイギリスにかぶれた私を受け入れてくれたRTのすべての仲間がこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとう。</p>	

	<p>名前: 井上 大誠</p> <p>所属: 明治大学国際日本学部 アジア太平洋政治経済専攻 4年</p> <p>興味/関心 サッカー/読書/バックパック/歴史巡り旅/デジタル覇権と国際関係/BREXITとヨーロッパサッカー/東アジアの地政学的パラダイムシフト</p>
<p>「学生時代の集大成—自分を信じて—」</p> <p>世界中の人々により多くの挑戦機会が与えられるような社会を。私が描く将来の大きなビジョンとは対照的に、これまで20年余りの人生は決して国際性に富んだものではなかった。私はそんなコンプレックスを反骨心にして、大学では誰よりも積極的に自分の常識を変えていこうと努力を重ねてきた。ここ数年間で経験したアメリカへの交換留学やボランティア活動、韓国にある高麗大学の学生との学生対話の機会など、私にとっては全て大きな成長機会であった。私はこれらの経験や想いの全てを表現する学生時代の集大成の場として、大志と覚悟をもってJASCに挑戦したい。</p> <p>「登る山を決めるための挑戦」また、このJASCという大きな挑戦は私にとって登る山を決めるための挑戦である。この人生で私は一体何をなしたいのか。人生のゴールをまっすぐに見つめ、登り始めるための大切な挑戦なのだ。太平洋を越えて集まった日米の仲間たちとの出会いはとても楽しみであり、互いの価値観や専門性を「越境」して掛け算することができれば、それはかけがえのない財産となり私の「山登り」を力強く後押ししてくれるはずだ。仲間とそして自分自身と本気で向き合い、いま登り始める時としたい。</p> <p>最後に、私は幕末の雄である坂本龍馬に強い憧れを抱いている。150年前、龍馬が当時の日本社会の常識や限界に屈せず近代日本の夜明けを切り開いたように、私もJASCから世界に向けて、より一層賢明にそして力強く羽ばたいていきたい。</p> <p>「人として生まれたからには、太平洋のようにでっかい夢を持つべきだ。」 (坂本龍馬)</p>	
<p>「JASCを彩った分科会活動」</p> <p>JASCの長旅を終えた今私は思う。分科会で過ごした時間は私にとって最も大切なJASCの財産だと。本会議前までの準備期間、日本側は毎週ミーティングを行い、多角的な視点からナショナリズムやグローバリズムについて知見を深めた。非常に観念的かつ広範なアプローチが可能なテーマであったため当初は苦戦を強いられた。しかしメンバーの強い知的探究心に助けられながら、天皇制や歴史教育など具体性の高いトピックを紹介することで、日本ナショナリズムの本質に徐々に迫ることができた。だが、この分科会を根底から支えていたのは無尽蔵な知的探究心だけでない。メンバー各々が抱く他者への「リスペクトの精神」こそが、私たちを素晴らしいチームへと導いたと私は確信している。本会議中、日米9人の分科会メンバーは異なる価値観や見解をぶつけながらも、常に相手と向き合った。夜遅くまで語り合うこともあった。言語や価値観の壁はリスペクトの精神をもってすれば必ず乗り越えることができる。私たちは本会議の3週間でそれを証明したと思う。彼らの献身性と寛大さに感謝を伝えたい。本音の対話を交わした分科会メンバーは今後も私の戦友であり、そして家族である。</p>	



名前：徳永 大貴

所属：九州大学工学部機械航空工学科3年

興味/関心

宇宙、航空、教育、途上国支援、戦争史、
自分自身の研究

「宇宙に届く階段をつくる」

宇宙飛行士になって、宇宙で仕事がしたい。10歳の頃からそのために生きてきた。そんなことを口にすれば、正気か？なれなかったらどうするのか？という返答をする人がほとんどの中、JASCの仲間たちは至って自然に自分を受け入れてくれた。周りのブーイングを振り切って目標へ向かうために、自己中心的に振る舞う癖をつけていた自分にとっては衝撃的だった。素晴らしい仲間ができたことをとても嬉しく思う。

アメリカ留学、ミャンマーでのインターンを終え、1年間の休学の集大成としてJASCに参加した。今後卒業までは専攻の工学を必死で勉強し、世界で通用する自分だけの武器を確立していく所存だ。できないことをできるようになること、そして自分で自分に課したハードルを乗り越えていくことを積み重ねていけば、宇宙に届くと信じている。

熱い想いを書き連ねたが、私は柴咲コウとお酒、そしてラーメンが大好きなただの福岡人である。宇宙に続く階段を建設しながら、たまに手を止めて宴をする、それを楽しみにこれからも生きていきたい。

「世の中を変えるには」

100点満点中50点。今回の日米学生会議に対する率直な感想である。分科会の仲間とはそれぞれ違う国、場所にいながらも4月から週1回のビデオミーティングに取り組み、コミュニケーションを密にしたことで素晴らしいチームを創ることができた。本会議においてもお互いへのリスペクトを忘れない彼らの姿勢に感動すら覚えた。他の参加者たちも宇宙飛行士になるという夢を持つ自分を理解してくれた。この50点は自分以外の参加者たちからもたらされたものだ。心から感謝したい。

一方、自分自身には迷いなく0点をつけたい。議論、批評するだけで行動の伴わない会議に意味はない。香港で若者が命をかけて闘っているというのに、安全なところで喋っているだけの会議など何の価値があろうか。そんな思いに悩まされつづけ、どうすればいいのかと1人で思慮に耽るだけで終わってしまった。宇宙飛行士という夢に命を燃やすことはもちろん、今後はこの悔しさや失意をバネに社会的活動にも取り組んでいく所存だ。行動しなければ、1部でも人生を差し出さなければ、世の中は変わらない。

素敵な友人に恵まれ、自分の至らなさを痛感した、そんな日米学生会議であった。



名前：若井 香穂

大学学部学年：明治大学国際日本学部国際日本学科 2年

現在コペンハーゲン大学に留学中で、ヨーロッパを旅行しつつ北欧の社会福祉とキルケゴールの哲学について主に勉強しています！

興味/関心

飛行機・スキー・北欧の社会福祉・幸福論・アフリカと日本を繋ぐようなプロジェクトや仕事（観光業で何かやりたい）・foodsharingやveganism・Søren Kierkegaard

「私のターニングポイント」

部屋掃除中、たくさんの資料を勢いよく断捨離していた。そのうちの1つだった「日米学生会議」のリーフレットを手にとり「こんな説明会には行ったけれど自分には無理無理」と一度はゴミ袋に入れた。しかしなぜかそれを戻して要項をみて、明日までが小論文の期限であること・お金を振り込まなければいけないこと、あとは何かに導かれているような感覚で期限ギリギリに申し込んだ。何か変わるかもしれない、その思いだけだった。

終わった今、自分が将来したいこと・そのために足りない点に気づけたこと・応援してくださる沢山のOBやOGの方々・何かにチャレンジする勇氣・悔しさ・家族のような暖かく刺激しあえる仲間・・・数えきれない素敵な経験と仲間ができた。感謝と心からの尊敬でいっぱいである。

何かに挑戦したことで「失敗」はあったとしても何かを「失う」ことは決してない。そしてその中で見つけた心からドキドキ・ワクワクすることに突き進めば怖いことは何1つないと気づけた。好奇心と挑戦があれば失敗はスパイス、いつか必ず自分らしい何かの形で実になる。仲間と自分を信じ何かを成し遂げよう試行錯誤した熱くて濃い三週間がそれを教えてくれた。5年後も15年後もこの会議が色々な意味でターニングポイントだったと、間違いなく言っているだろう。

「私の原動力」—日米学生会議を通して—

初めて日本側参加者と出会った春合宿、自身の知識量の足りなさを実感して「もうやっていけない」と落ち込んだ。毎週日曜のミーティングはいつも緊張していたのを今でも鮮明に覚えている。初めてアメリカ側とジョイントミーティングをした時、これが毎日何時間も、そして三週間も続くのかと期待2割と怖さ8割の感情を抱いていた自分に、三週間の本会議を終えた今、はっきりと自信を持って言えることがある。それはこのRTは「自分が試される場ではない、お互いを受け入れ認め合い成長していける場である」と。議論だけでなく観光やキャンプファイヤー、深夜まで語り合い多くの時間を共有した彼らとの関係は友達や仲間以上のもの「家族」であると思う。本会議が終わり少し感じるこの空虚感は彼らと離れたからなのかもしれない。彼らと次回あった時に一回り、ふた回り成長した自分であられるよう、一生懸命、でも楽しみつつ色々なことに挑戦していきたいと思う。ありがとう！

5-5. 東アジアにおける日米関係

～21世紀の日米関係の役割とは～

US-Japan Relations in the Context of East Asia

Change and Continuity in the 21st Century



【概要】

第2次世界大戦後、日本と米国は安全保障・経済・文化など多岐にわたる分野で密接な関係を確立し、東アジアの安定と繁栄に貢献してきた。だが、21世紀に入ると東アジア情勢は中国の台頭を皮切りに著しく変化した。中国は日本を抜いて東アジア最大の経済国家となり、政治面では、一帯一路構想や、南シナ海における領有権を主張するなど存在感を高めている。また北朝鮮の核・ミサイル能力の向上は、2018年6月に前代未聞の米朝首脳会談までもたらした。こうした現状は東アジアの勢力図の変化を反映しており、日本国憲法第9条改正を巡る議論や環太平洋パートナーシップ協定(TPP)、米中貿易摩擦などは、こうした変化に対して日本と米国が示した対応と言えよう。

日米関係は、21世紀の東アジアでどれほどの重要性を持つことになるのか。日本と米国は、東アジアの安定と繁栄へ何を寄与し、どのような利益を求めていくのか。政治に限らず多様な視点から、東アジアという舞台での日米関係の役割を再考する。

事前準備期間の議論・活動

【春合宿】

東アジア分科会が正式に発足して以降行ったミーティングでは今後5ヶ月間に渡って議論する方向性を考えるとともに、「東アジアにとっての現在の脅威は何か」という問いについて議論を進めた。初めての顔合わせとなった今回の春合宿ではこれらについての日本側の決定を行った。この分科会に所属しているメンバーは皆自分なりのアウトプットや観点のある学生で、JASCでも随一の多種多様な視点を持っている。それにも関わらずこの脅威に関する問いにおいては4人全員が「中国」と答えた。この問いと答えこそがこの分科会の原点となった。なぜ中国が脅威なのか、我々は東アジア情勢という分野において、その国籍や教育背景によって考え方を固定化されているのではないかと、東アジアにおいてもっとも脅威として捉えるべきは本当は日米関係そのものなのではないかと、等この春合宿においては議論の根本となる内容から偏見や固定観念をぬぐい去るための努力をした。これが功を奏し、のちの最終フォーラムにおけるそれぞれの発表内容の充実化ならびにアメリカ側参加者が参加した際の多角的かつ深い議論の達成に繋がったと確信している。

【春合宿から防大研修まで】

春合宿で気づいた「中国が東アジアへの1番の脅威である」という固定観念をぬぐい去るため、分科会の各メンバーで話し合った結果、春合宿以降の課題として、毎週行う議論の他に調査を行うことにした。この調査は前述の通りの狙いがあるためメンバーそれぞれに中国以外の国、地区を振り分け、その観点から東アジアについて調査するというものであった。これを行うことによって日本に住んでいること、日米というフィールドに限ることによって持っていた視点以外からの観点も導入をしたより広い視野からの議論を行えるようにした。またこれを行うことにおける工夫として、模擬国連等で用いられる Position Paper の形式に基づいて調査レポートを行い、これを通し各々東アジアという地区を巡る情勢や国益の衝突に関する理解を深め、共有することができた。これと平行して無論議論そのものも進め、調査の共有を行いつつも具体的に議題を絞ってディベートをする、などの手段を用いて議論を展開した。具体的な議題としては「日本は核武装をするべきか」等があった。以上のように議論を進めていくことによって防衛大学校での学生との議論に備えるべく、春合宿での議論の展開からさらに視野の広い議論へと進められるよう勉強と議論を重ねた。

【防大研修】

本分科会の安全保障関連の議題が必然的に多くなるという性質や、また分科会の参加者の1人が防衛大学校生徒であったことから、東アジア分科会にとってこの防衛大学校研修は一大イベントであった。結論から言えば、安全保障についての知識が議論をするには明らかに足りないことを認識しつつも、同大学校学生との議論を充実したものにすると言う目標は達成できた。具体的には、日本の防衛に携わる将来の自衛隊幹部候補である学生たちがどういった見解をもちどのように東アジア情勢をみているのか、また生活の中でその考えがどうやって構築されるのかを考察する貴重な機会となった。防衛大学校に行ってみず気づくのが学生たちの使命感、責任感の強さだ。国民の税金によって自分達が学生生活を送れているからこそ、母国の安全のために働く上で欠かせない訓練や勉学に励むのだという確固たる意志を同年代の学生達の態度や言動からひしひしと感じ、日米学生会議として防衛大学校に研修に行っていなければ経験できないものであったと感じた。また寮生活の様子を見学した際には、防大生の1日の暮らしを間近で見るだけでなく、JASC側参加者1人1人に対して防大生がエスコートしてくれたおかげで、フランクな形で学びと交流の機会を持つことができたように思う。

こうした交流面での発見で得たものに加えてこの防衛大学校研修の充実化に貢献したのが研修初日に防大生、国際関係学科の学生との議論である。この議論においてはまず防大の学生から現在の安全保障面を見た東アジアの情勢についての見解が提供され、それに対するレスポンスという形式から議論が展開された。こうした議論を進めていくうちに出てきた大きなトピックの中にはアメリカとの同盟強化はいいことか？日米同盟を守りつつ、自国の自主性を保つためにはどうすべきか？日本は自国防衛以外に関与すべき？など行った命題が登場した。これらを議論していくうちに1つJASC側の大きなその後の議論の発展にも繋がった命題として防衛に際して自衛関係者はどの程度民意による理解を得るべきなのかというものが上がった。これは昨今の防衛関係費の必要性に対してJASC側が疑問を呈したところから始まったが、この防衛、安全保障関係者と市民という構図の縮図がいわば実現された場において議論としてもっとも白熱したものであった。これはこの後も日米関係および東アジア情勢における各国の立ち位置について思案するにおいて大いに貢献した議題であった。

【防大研修以降のオンラインミーティングの流れ】

防衛大学校研修を終えたのちは時事ニュースに応じたトピックを扱った会議の進行を行なった。まずはこの時期激化し始めていた米中貿易摩擦について取り扱った。この議論においては記事をいくつか取り上げた上で現在の米中貿易のそれぞれの国の内政、選挙ならびに東アジア地域全体におよぼす影響を分析し、これに関しそもそも貿易摩擦というのはどれだけ他国の経済圏に直接的な影響を及ぼすのか、また日米貿易摩擦と比べたときの動向分析を参考にしつつ、日本が今後このやりとりにおいてどのように関わっていくべきかを議論した。この内容に関してはまた、このクライシスにあってそれぞれの国がG20など公共の目に触れる外交的意味合いを持つ場をどのように活用しているのかを考察することも、すなわちこの外交的なコミュニケーションの手段等に当たっても関心ごとの1つとして議題に上がった。また香港のデモについても議題としては上がったが、より多くの時間をかけたのは当時悪化していた日韓関係についてであった。そこでそもそも日本と韓国はどういった経緯で今の関係性に望んでいるのかを踏まえ、歴史問題をどう取り扱うか、謝罪等の要求を飲んだ場合状況は変わるのか、これに応じて日韓米の三国の関係性はどのように変わっていくのか、等歴史問題を起爆剤として悪化していく三国の関係性に対してどういった対話と理解がなされていくべきなのかを現地メディアソース（韓国語の記事を翻訳）を用いて議論した。

【日米ジョイントミーティング】

日米両国のデリゲーションが全員揃っての初の顔合わせとなってこの電話会議ではまずビデオ通話にてお互いの自己紹介を行ったのちに、日米それぞれにおいてどういった議論をこれまで行って来たかをシェアする流れとなった。また、この電話会議の数日前に締め切りとなっていたRT Paperの内容の共有も行い、それぞれの学生がどういった関心を持っていてどういった考えを持っているのかを理解する機会となった。経済的な観点から東アジアにおける日米の役割を考える者、安全保障の観点から東アジアを考察した者、東アジア情勢が両国の内政事情や選挙に与える影響を考察した者等様々な観点が目立った。これらの導入を踏まえた上で、日米両国の学生が本会議に向けてどういった議論をしていきたいのかということを考えることがこの会議の目的であった。この方向性を決めるにあたってぜひ議論を深めたい内容としてあげられていたのは「アメリカにとって日本はどういったプレゼンスを持つ国なのか」「米国の脅威とは」「憲法9条について日本人はどう思っているのか」「安全保障に市民の支持は必要か」などがあげられた。初のジョイントミーティングにて行なったこうした共有を踏まえ、本会議への期待を膨らませた。

【直前合宿】

直前合宿においては東アジア分科会でこれまで行なってきた議論の振り返りを行い、米国との議論における焦点、その臨み方、どういった手段でこれを充実したものに変わっていくかなどといった本会議に向けての準備を行う傍、ナショナリズム分科会との合同ミーティングを行った。議題は憲法9条の改正案について。まずこの導入プロセスとしてまた Position Paper を用いた前準備を行い、その上で日本におけるこの改正案の是非とそれが東アジア情勢や日米安全保障条約に及ぼす影響についてを議論した。その中で興味深かった点としてはやはりその多様な視点があった。改正案に賛成と反対の真っ2つに別れるだけでなく、その中でも改正案の中の条文の一部改正は可能とする見解や、これが外交カードとしてもたらす影響を憂慮するとタイミングを逃したとする見解などが目立った。現実性とは別に意議論をした際に、やはり防衛大学校に研修を行ったこと、そこで行った議論が功を奏し、アメリカ側からのデリゲーションを迎える前はかなり内容の濃い、多角的な視点の提供がなされた議論ができた。

本会議議論の流れ及び総括・考察

【高知サイト】

高知サイトではそれぞれの議論したいテーマの共有を行った。

テーマとして出たものなかには以下の様なものがあった。

- ①米国と日本それぞれにとっての最大の脅威あるいは信頼できるものはなにか
- ②安全保障同盟とは何であるのか
- ③友好条約等との大きな違いは何か
- ④台湾と中国の確執があたえる日米関係への影響
- ⑤日本周辺の領土問題とそれに対する各国の認識等である。

【京都サイト】

京都サイトでは日本の宗教と帝国主義との関連性をテーマに以下の質問を設定して討論した。

- ・大日本帝国における神道やその他の宗教の国家による後押しと第2次世界大戦期の極端な軍国主義的な統治との関連性はどれほどなのか。
- ・日本は右傾化しているのかどうか、また日本における右傾化は宗教や歴史における観点と関連しているのだろうか。

【岐阜サイト】

岐阜サイトでの主な活動はナショナリズムRTとのジョイントRTミーティングであった。

このミーティングでは以下の問いについて議論し、お互いの考えを深め合った。

- ・米国と日本のナショナリズムの違いについて
- ・ナショナリズムはその国の政策にどれほど影響しているのか

【東京サイト】

東京サイトでは来たるファイナルフォーラムに向けてRTごとのプレゼンテーションの内容をどういったものにするか、と言うことについて議論した。集大成として議論したすべての事項をまとめるのは困難と判断したので、分科会での1番最初の議論であった、日米関係における脅威とは何かについて発表することとした。

本会議全体の考察

本会議全体を通して、様々な分野にわたる議論を行うことができたように思う。ここではそれぞれのサイトでの議論のなかで特に印象的だったとことを取り上げつつ、本会議全体を総括したい。高知サイトでは、それぞれの議論したいことの共有を行った。そのなかで特に興味深かったのは、日米で観点が多少異なっていたことだ。邦題が東アジアにおける日米関係と、題されただけあり、日本側は日米同盟を意識したハードポリティクスに関するトピックに関心が強かったのに対し、米国側はどうしても、日本社会そのものや経済に関するトピックに興味が強かったように思う。ただ、現にこうした日米での同盟に対する認識の差を知ることができた点において有意義な議論ができたと考える。また、個人的に台湾に強い関心をもっていたが、中華系のアメデリから直接それらに対する認識を聞くことができ、大変勉強になったサイトだった。高知での一連の活動の後に向かったのは、京都である。このサイトでは、議論よりも、様々な活動をしている時間が多かったが、その中でも、しっかりと議論することができた。京都サイトの議論では帝国主義の拡大と宗教の関連性についての議論をした。このトピックはかなりセンシティブな内容だったといえるだろう。日本の第2次世界大戦期の拡大政策の核心をつく内容であり、日本人としては、大変考えさせるトピックだった。また、全般的に宗教を自国の利益の為に活用した、という観点で日本の帝国主義を考えるという切り口自体も今までになかった新たな知見を得たように感ぜられ、京都での議論は特に意義の深いものとなった。岐阜では各RTの議論の時間とは別にナショナリズムRTと、ジョイントミーティングをし

た。普段ミーティングをしているメンバーとは異なるメンバーの中でも、しっかりと自身の新たな知見を得ることのできた議論となったように思う。

最終サイトであった東京ではファイナルフォーラムに向けたプレゼンテーションの準備を主に行った。本会議を通した全体の討論を公表することは分量的にも時間的にも難しいと考えた我々は、原点に立ち返り、日米同盟の脅威とは何か、と言う点に焦点を当てて発表をおこなった。折しも、このファイナルフォーラム準備期間はちょうど香港情勢が逃亡条例をめぐる紛糾していた頃であった。そこで香港の情勢に関して中華系の人々の考え方を目の当たりにすることができた。発表にあたり民主主義的な観点の例として、香港のデモ風景を持ち出した際に強い嫌悪感を中華系のデリが唱えた。とうのも本土出身の人は、香港という地域自体に疑問を抱いている人が多いそうだ。これはさすがに私も予想しておらず、その現状に大変びっくりした。時間があつたならもう少しこの点の議論を深めたいと強く感じた。これだけが本会議中の悔いである。

分科会としての結論

日米関係における最大の脅威は何か

1. 憲法9条
2. トランプ政権
3. 日米安全保障
4. 民主政における市民の政治的無関心

私たち東アジア分科会は、準備期間と本会議期間で取り扱った数多くの議題を、15分のプレゼンテーションに集約するは難しいと判断したため、当分科会が1番初めの議論の議題として取り上げた、日米関係における脅威、に関する報告書を作成することで合意した。日本側とアメリカ側、計六人のデリがそれぞれ脅威だと感じるものを提示し、共通の、または、関連性の高い、“脅威”を感じるデリ同士でペアを組み、考察を加えた。

1.憲法9条という脅威

第一の脅威の要因は以下の通りである。まずはじめに、2019年九月現在の、安倍政権の軍事力強化と、日本国憲法の再解釈への意欲の高まりだ。2つ目は、日本の再軍備化に伴う、韓国と中国の懸念の高まりである。最後に、いかなる結末に関わらず、日本のアメリカへの片務的依存が挙げられる。現在の、憲法9条には、国際情勢に武力の行使が認められていない。しかし、自国の安全を保障するという口実のもと、自衛隊の存在を正当化する憲法13条や、軍事力を含む行政権の発動権を内閣が持つことが明記されている、憲法65条の存在が、日本の平和憲法に矛盾すると度々、指摘の対象とされてきた。また、日本で、改憲への動きが進むことで、中国や韓国をはじめとする、周辺国間の、外交的緊張感が高まる。日本の改憲への意欲は、最大の同盟国であり、アメリカのアジア最大規模の、日本駐留アメリカ軍基地の存在意義を再定義する必要がある。また、世界最大規模の軍事力を誇るアメリカ軍の撤退に伴う東アジア周辺の国際情勢の乱れを懸念する一方、日本国内に憲法改正に対する強い反発が生じるため、一連の憲法9条改正に繋がる動きを脅威であると考えられる。

2.トランプ政権

トランプ政権が東アジアに与える脅威の要因として三つの理由が考えられる。トランプ大統領が強調する、自国第一主義と、アメリカの主要貿易同盟国間で繰り広げられる、貿易摩擦だ。日本を含む世界各国のアメリカの同盟国が、トランプ政権の同盟国への関心の薄れを懸念する背景を踏まえ、私たちは、トランプ政権にとってもっとも重要な同盟国はどこか、もっとも敵対国意識の低い同盟国はどこであるかなどの議論を中心にトランプ政権が東アジアに与える脅威を検証した。日米関係に緊張感を与える要素に、北朝鮮の軍事的挑発、日米安全保障条約そして周辺国との同盟関係が挙げられた。また、トランプ政権が中国と繰り広げる貿易摩擦や、アメリカのTPP離脱、そしてCTPPの創案が、日本の中国とアメリカへの輸出量の減少、アメリカの日本に対する、米国産牛に課する関税の値下げと日本産自動車に課する関税の値上げの要求に繋がる。

3.日米安全保障

第三の脅威は、アメリカと日本の政治的、安全保障的、利害関係の不一致に起因する。日米安全保障条約を取り巻く脅威の内的要因として、沖縄の在日アメリカ軍基地問題や日本のアメリカ軍基地の負担費を指摘した。また、日米安全保障に内在する脅威の外的要因に、日本が直面している、周辺国との領土問題、緊迫するペルシャ湾情勢を例に見る、国際社会が日本に求める役割が考えられる。

4.外交政策決定における市民の存在感の薄れ

第四の日米関係の障壁要因は、民主制における市民の政治参加意欲の低下と考える。先進国の市民の個人主義化に伴う政府への依存度の高さ、市民の、政治国際情勢に関する政策決定での、役割の不透明性、そして日常生活との関連性の低さに伴う、日本とアメリカ市民の外交的諸問題に対する関心の薄さが、第四の脅威の要因であると考えた。参政権を保有する市民が、外交間の政策決定を、自らの生活に直結する問題であるとの認識をもち、日米両政府の外交政策に参加し、政策決定者の監視する役割を担う必要があるのではないだろうか。

個人ページ

	名前： 木村 勇人
	所属： 慶應義塾大学法学部政治学科 2年
	興味/関心： 国際政治、ギター、ロックミュージック

「満を持しての参加」
高校生の時から憧れていた学生会議でした。日米学生会議への参加を決意したのは高校2年生の時でした。グレン・フクシマ氏にお会いする機会があり、その際に大学で参加するべきものとして紹介をされたことがきっかけで知り、JASCに参加をするために高校生と大学1年の時の経験を積んできました。日米にとどまらず、世界の今後を担っていく学生達とともに答えのない問いを追い続け、議論をすることへの期待を膨らませつつ望んだ春合宿以降の日々は充実したものでした。JASCに集まる学生は出身大学、勉強している学業、ともに多種多様です。そんな中彼らに共通しているのは学生であることを生かして、学生であるからこそできることを存分に楽しみたいという気持ちなのだと思います。社会に出て、立場を持って、責任を持った時にはできないような議論やインプットをして学生同士で「非日常的な経験」を得たい。その思いで集った学生とともに会議を行うことが将来にどういった影響を及ぼすか、それどころか何かに資するかどうかすらわかりませんが、学生の持つ可能性をもっとも引き出した体験だったことは確信しています。この学生会議で得たものはこの可能性の追求だと考えます。

「『脅威とは何か。』から始まる視野を広げる試み」
私の日米学生会議での経験と学び、その考え方のありようは東アジア分科会での活動なしでは語り得ない。春合宿で初めて他の日本人メンバーと話をした際、その会話の内容の濃さや、東アジアにおける問題について中国が脅威であるという同じ考えにも関わらず、その根拠の切り口の違いに驚きを未だに覚えている。その大きな発見は始まりでしかなく、日本側参加者3名ならびにアメリカ側4名、コーディネーターとともに話を進めていった4ヶ月間は発見の連続であった。その発見と成長を認識することができた1番の要因として、春合宿の最初のディスカッションで取り上げた議題をそのままファイナルフォーラムでの発表のメインテーマとしたことが挙げられる。「脅威とは何か。」この質問を防衛大学の学生、東南アジアの歴史について勉強してきた学生、日本国民がなぜこの議論に関心をそこまで持たないのかという前提に疑問を提示してくれる大学生。このように多様な学生と議論をし、各々の関心にに基づき答えを、春合宿からは視野をさらに広げた上で出した学生としての答えを提示できたことは、今後も誇れる大きな財産になったと自負している。



名前：マーロー 瑛実利 メガン

所属：

国際基督教大学教養学部 3年

University of California Santa Barbra で現在、
交換留学

興味/関心：筋トレ、カフェ巡り、スケボ、
Bible study、人種/移民問題

「本音の対話を求めて」

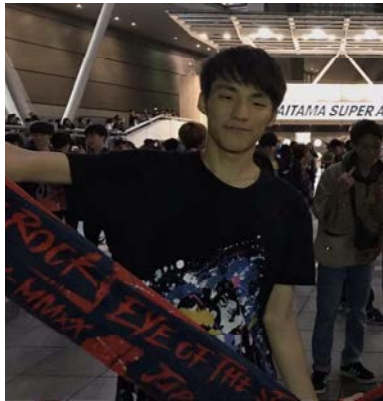
国際基督教大学 3年、社会学専攻のマーロー瑛実利メガンです。

私がJASCに応募したきっかけは、単純に、本音でぶつかり合うことの真髄に触れる経験がしたいと思ったからだ。もちろん、優秀な学生と関わりを持つことで、自分の知見を広げたり、普段は話じづらい議題に自分たちなりの答えを模索することもJASCの魅力の1つである。しかし、やはり、どこかで、心から分かち合える仲間との出会いを求めていた自分がいる。大学に入学して以来、私は、学業とサークル活動漬けの忙しない日々を送る中で、たくさんの人々と関わるにもかかわらず、どこかで、空虚感と物足りなさを感じていた。そんな中JASCの存在を知り、仲間とぶつかり合うことを恐れずに、熱意を持って本音で語り合う、JASCerが非常に輝かしく見え、そのような経験ができるJASCerが羨ましいと思った。私は今まで自分の弱みや恐怖に正直になることなく、自分に壁を作ることで、真の心の繋がりを築きあげることを避けていた。JASCの活動を通して、自分の弱みをさらけ出すことができることを、最大の強みにしたいと強くおもう。今までにないくらい最高にアツい夏になるときは間違いのないです。至らない点が多いですが、71の参加者と切磋琢磨して悔いのない4ヶ月を送りたい。

「私のJASC Experience」

日米関係における脅威は何か。この本質の見えない質問から始まったRTは私にとって、非常に挑戦的であった。普段、東京で忙しい大学生活を送っている私にとって、日本を取り巻く脅威について日常生活で考え、意見を持ったことがなかった。私と異なり、大学で国際情勢を専門的に学び、自分の考えをしっかりと理解している、RTメンバーと同じ土俵で議論する為に必要な知識量と情報の圧倒的な違いに劣等感を覚えたことは言うまでもない。しかし、私の、国際情勢に対する無頓着さを否定的に捉えるのではなく、むしろ、日米関係が、私を含めた、多くの日本国民にとって親近感の薄いテーマであることを問題視し、私の存在を、多くの国民の代弁者として扱ってくれた彼らの姿勢に非常に感心した。アメリカ側の参加者が加わり、日本国民以上に、日本の国際社会での役割を理解している、彼女たちとの議論を通して、いかに国際問題が日本では、国民にとって遠い存在であることが許されているのかを痛感し、危機感を覚えた。このRTを通して、無知、無関心でいることは、容易である一方、非常に危険であることを身をもって感じた。また、今まで、積極的に情報収集をし、社会問題の要点を理解し、自分の考えを確立するといった、人間としての義務を蔑ろにしていた自分への怒りさえ感じた。何もかもが、新鮮で、心細かった私に、辛抱強く、助けの手を差し伸べてくれた、ジャパデリの存在は、大変、心強く、感謝しても足りない。JASC71がlife changing experience であったか。正直、胸を張って、Yes とは言えない。しかし、JASC71の経験を生かして、より多くの大学生に、今まで馴染みの薄かった問題に、親近感を抱いてもらい、議論を形作る、一員となってもらいたい。私の知見を広げ、人間的成長させてくれた、RTメンバーに感謝する。みんなありがとう！！

	<p>名前：小俣 裕紀</p>
	<p>所属： 防衛大学校人文社会科学群国際関係学科第3学年</p>
	<p>興味/関心：旅行・登山・ランニング</p>
<p>「日米学生会議に飛び込む前に考えたこと」</p> <p>私は自分が日米学生会議で自分が自衛隊員であるということが長所である一方で短所であると考えています。我々は安全保障関係の知識は広範に持っているゆえに、その方面の議論ではこの会議を活性化するためにリードできると考えていますし、その知識をほかの参加者へ共有することもできます。</p> <p>一方で、我々は自衛隊というとてもとても狭い世界で生きています。ですので、自ら求めない限りは広く浅く多様な知識を持っているわけではないゆえに、思考もやはり限られてきてしまう可能性があります。</p> <p>安全保障は軍事・外交・政治等多様な分野を持ち、非常に複雑かつ流動的な状況下であるのにもかかわらず、我々は自衛官である以上国防の専門家である必要もあります。この矛盾した状況を生き抜くためにはゼネラリストでありスペシャリストである必要があります。</p> <p>このような実現困難な目標を達成するためには、防大の同期と違う世界に飛び込んでみるしかないと思います。日米学生会議に参加しました。この会議は日米の大学生が多様な舞台・目線で熱い議論を交わす場であり、そこで得られる経験は自分に現在足りていない「多様な」目線・分野を得る絶好のチャンスになりうると考えています。</p>	
<p>「いつもと違う世界での自分を省みて」</p> <p>東アジアRTは非常に活発なRTであったと感じている。</p> <p>各々がジャバデリ、アメデリ問わず興味・専門分野を持ち積極的に発言し、時には意見の違いが見られた時もあったが、そういうことも含めて非常に盛り上がったと今思っている。私は、唯一の Military Personnelとして、参加したわけであるが、特に印象に残ったのは「いつもと異なる目線」での議論である。我々防大生は、防大という中ではあるが各自が意見を持ち、考え、自由に議論をしている。その考えのベクトルは「自衛隊員」という立場があるせいか偏りがちであるといわざるを得ない。</p> <p>しかし、JASCにおいては各自が様々な考えを持って議論をぶつけあうことから「いつもと異なる目線」を獲得することができた。なぜ、これが印象に残ったのかというと、将来ともに仕事をする事務官・政治家はCivilianであり、我々とは「異なる目線」を持ち合わせている。その中で、自分の意思を持ちつつも、「異なる目線」の存在を知っていることこそ、最良の選択肢の創造へつながる。と考えたからである。</p> <p>最後に、熱い議論を交わした東アジアRT、すべてのJASC71メンバーそして、JASC71への参加許可を出してくださり、支援をくださった納富陸将に感謝の意を表す。</p>	



名前：武末 崇義

所属：東京外国語大学国際社会学部 2年

興味/関心：

国際政治、歴史、ロックミュージック

Don't be afraid to dive, be afraid that you didn't try.

-Wasted Nights, ONE OK ROCK-

思い返せば、中学でも高校でもずっと外国に行っているいろいろな人に会う機会を求めていた。人と話し、自分が知らなかったことを知ることが楽しくて仕方がなかった。小学校に入る前になんとか身につけられた英語を忘れてくなかったのもあるだろう。ところが大学生になって気付けば日々を過ごすので精一杯でそんなことも忘れていた。部活は疲れるうえ、勉強の量も多く家に帰ってはすぐ寝る、そんな生活が続いていた。そんなときにJASCを教えてくれたのは母だった。学業や部活に加えJASCもやるのは無理だと聞いた時は思っていたが中高での経験は、JASCは必ず自分の為になる、と告げていた。終わってみて考えると自分の経験とJASCにかけた期待は正しかったのではないかと感じている。飛び込んでなければ絶対に出会わなかったであろう人達、自分の意見に絶対に何かしらの反応が返ってくる集団はいままで経験したことがなかった。そんなJASCのデリとしての活動はさながら春の夜の夢の様だった。こうした環境に身をおけたことに感謝しつつこれからもいろいろな人と交流していきたい、と考えている。

「新たな視点を得るということ」

東アジアRTの様子を一言で例えるなら、それはカオス、だと言えるかも知れない。ジャパデリ、アメデリ問わずみな面白い話が大好きで、よく笑っていたRTだったように思う。議論の途中でさすがに冗談が飛び、議論が脱線する、と言うこともよくあった。しかし、その中でも有意義な議論はできていたと言えるだろう。我々のRTはそのトピックの性質上、軍事的な話をすることもあった。その中で、デリの1人に専門分野として軍事を勉強する防衛大生がいたことは議論に弾みが付くきっかけとなり、自分になかった視点をくれる人ともなり議論していて本当に楽しかった。我々が一般の市民である以上、彼のように専門性をもって勉強することはなく、たとえ勉強していたとしてもどうしても政治学的な観点に偏りがちであった。その中で、軍事的な観点をもらえたというのは自分にとって良い経験になったと思う。いずれにせよ、こうした機会をもらえたのは本当に良かったと思っている。RTメンバーにはとっても感謝しているし、是非また会って議論をかわしたい。RTメンバーとはこれからも仲良くしたいと心から思っている。

5-6. 法・技術の真価と人々の倫理

～人口問題から考える、豊かな暮らしの本質～

Law, technology and ethics: Responsible approach to population issues



【概要】

少子高齢社会は日本の将来を考えるうえで重要なキーワードだ。労働力人口が減少し、高齢者人口が増えた社会、いわゆる現役世代1人が高齢者1人を支える「肩車社会」が与える暮らしへの影響は大きい。高齢社会は日本だけの問題ではない。日本の未来、特に超少子高齢化を考えることは、先進国の未来を考えるモデルケースとして重要な位置づけになるだろう。新技術のAIは代替労働力になり仕事の効率化につながりうるのか。現在、様々な議論がなされ、日米間で見解は異なるようである。対照的に、新興国の総人口は増え続けている。国連の世界人口推計によれば、2030年までに80億、2050年には98億人に達する見通しだ。生活が豊かになり”中産階級”の世界人口が増える為、食料や水、資源などの量やエネルギー供給や公衆衛生の質など様々な点の改良や法整備が求められている。以上を踏まえ、人口、労働人口に関する問題に対し、法律、テクノロジーはどの様に人々の暮らしに貢献できるのか、また人々の倫理観はこの先どう変化するのかを考える。

事前準備期間の議論・活動

【春合宿】

初顔合わせを果たしたメンバー間で、オンラインミーティングで話し合っていた内容を整理し、大まかな議論の進め方を決定した。法と技術と倫理という広い範囲の中から、自分たちでいくつか問いを選定した。加速する人口問題に対し、他国民を労働力として活用することはどこまで正当化されるのか。自動化や人工知能といったテクノロジーの利用はどの範囲まで許されるのか。これに関して、どのような法制度を整えるべきか。GDPは本当に幸福につながるのか。このような問いに焦点を当てて考えることになった。

また、フィールドトリップの時間を使い、日本科学未来館へ足を運んだ。そこでは、テクノロジーに関する様々な展示、体験スペースがあり、実際に見て触れて学ぶことが出来る。会議室から飛び出し、テクノロジーの進化が社会に与える影響について手触り感をもって考えることができた。



【防衛大学校研修】

防大生と昼夜を共にし、普段の学生生活とは180度異なる世界に圧倒される中、1番の刺激を受けたのは学生討論である。私の分科会では、事前に防大側の担当者と話し合い主に以下の議題に絞って議論を進めた。

- ・ 自衛隊と平成という文脈で、平成の30年間でどう感じたか？
- ・ 今の政治家(政治)をどうみているか？
- ・ 各国と比べた日本の防衛費、その意義と妥当性について。増額は本当に必要なのか。
- ・ 防大生は改憲議論をどう見ているのか
- ・ 人手不足をAIで解決することの責任・リスク

どのトピックにおいても、丁寧な資料や論理に裏打ちされた防大生の知識量と考えの深さに感銘を受けた。中でも防衛費に関して、どうして今のタイミングで増加させる必要があるのか、生の声を聞いたことは非常に興味深かった。最も意見が分かれたのは平成の30年間でどう感じたかという議題であり、日々自分が日本の軍事の未来を担っているという防大生に対し、一般大(彼らの中で私たちはそう呼ばれる)の私たちは楽観的・理想的な考えを持っていることに気付かされた。



(まいまい2人で乗り切った防大！)

【課題図書】

事前準備期間中、当分科会では『ロボット・AIと法』（編 弥永真生・宍戸常寿、有斐閣）を課題図書とし、各自当書の内容に対する疑問点・不明点を共有した後、対面ミーティングでそれらに対してディスカッションを行った。『ロボット・AIと法』では、ロボット・人工知能等の進展により著しく変革する現代社会に焦点をあて、規制緩和など法律が果たすべき役割について言及している。既に争点化された問題から近未来に起きうる問題まで幅広く視野に入れ、法学からの知見を提示するものである。

読書後私たちで定義した疑問点として以下のようなものがある。

- ・ロボットとAIに特化した新しい法律を作成すべきか
- ・ロボット税の導入の是非
- ・デザイナーズベイビーなどのエンハンスメントの人権問題、
- ・ブロックチェーンのあるべき形
- ・自動車の自動運転技術と法整備
- ・AIに付与する忘れさせる権利
- ・裁判とAIの活用方法
- ・ロボティクス規制は民間主導で行うべきか、政府主導で行うべきか
- ・アルゴリズムをどの程度社会に導入していくべきか
- ・アーキテクチャとナッジ理論の違い
- ・AIの利用に関して国際的な運用基準が必要か、またそれらは現実的に作成・運用可能か

ご覧の通り、文系であった私たちに膨大な知識を与えてくれただけでなく、ロボット・AI・法の三者に関係する内容に幅広く触れ、自分なりの意見を持てるようになった。これらのインプットは本会議の議論にも活かすことができた。例えば、『ロボティクス規制を民間主導で行うべきか、それとも政府主導で行うべきか』という議論は、本会議中の「機械化は誰の責任下で行われるべきか」という議題を提案することにもつながった。事前準備学習が本会議に有効に生かされた一例と言えるであろう。

【直前合宿】

直前合宿では、最終調整として今までの議論を整理をした上で、最も価値観の相違があった議題をJoint RTのトピックに選び、他の分科会のメンバーに考えてもらった。議題として提示したのは以下の2つだ。

- ①GDPは本当の豊かさに繋がるのか？
- ②デザイナーズベビー等倫理的に物議をかもし問題について、
(どこまで人権が認められ、正当化されるべきか？)

上記ともに、3人では思いつかなかった視点を得ることができ、アメリカ側と会う前に今までとは違う側面が見れる良い機会であった。

Bitgrit「ブロックチェーンの可能性」

参加者は3人とも文系であり、テクノロジーに関するディスカッションを行うにあたって事前知識を蓄積する必要があった。そこで他の参加者からbitgritというアジア圏にデータサイエンスを広めようとしているITベンチャー企業を紹介してもらい、JASCとのコラボイベント開催にこぎつけた。bitgritは弱冠19歳のデータサイエンティストによって立ち上げられた会社であり、テクノロジーに関する知見だけでなく、年齢を言い訳にしないCEOの芯の強さを実感できるイベントとなった。私たちとbitgritは7月上旬に「ブロックチェーンの可能性」をテーマとした講演会を行った。初めにBitgritCEOによりブロックチェーンについての説明、次にゲストスピーカーによる具体的なブロックチェーンの今後の展望、具体的には医療現場でのブロックチェーンの適応法に関する講演が行われた。講演後の懇親会ではブロックチェーンに興味を持っているイベント参加者たちとの交流もはかることができた。

【オンラインミーティング】

4月：主に話したい内容のすり合わせとpre-RT paperに取り組んだ。

Pre-RT paperでは、本会議に向けて話したいトピックを英語で論じる、私たちは今回、幸福とは何か、環境倫理学について、そして以下の個別に話したい議題について論じた。

- 1.How should we treat the decline of labor force in Japan
- 2.Where should Japan's future policy focus be?
- 3.The ethics of artificial intelligence
- 4.Nudge Theory

5月：春合宿を受けて、「AIと豊かさ」の関係についてのブレインストーミングを行い、扱うトピックを2つに絞った。『**日本国内における人口問題**』と『**世界共通のAIに関する問題**』

6月~本会議まで：上記2つを隔週で議論。

『**日本国内における人口問題**』では、以下のような問いについて考えた。

- ・「人口減少」は社会にとって悪なのか？
- ・GDPを上げることは豊かさに繋がるのか？
- ・社会保障費の国庫圧迫と、これに付随する懸念はいかに解消されるべきか？
- ・日本のプレゼンスは高められるべきか？
- ・アメリカの人口問題（移民、選挙）

『**世界共通のAIに関する問題**』：では、以下のような問いを考えた。

- ・そもそもAIとは
- ・産業革命と失業の関係
- ・無くなる職、生まれる職
- ・AI導入の現状分析と将来像について
- ・ロボット・AIに関しての法整備
- ・デザイナーズベイビーの誕生と倫理
- ・異なるレベルの自動化における責任の所在について
- ・AI導入は政府主導であるべき？それとも民間主導？
- ・アルゴリズムvsプライバシー
- ・vision 2045

本会議中の流れ及び総括/考察

【高知サイト】

[本会議前の活動や興味関心分野などの情報共有]

「法・技術の真価と人々の倫理～人口問題から考える、豊かな暮らしの本質」という私たちの分科会テーマから分かるように、議論が大きく広がりすぎないように留意し、どのような議論の道筋を辿るべきなのかを決める重要な話し合いであった。アメリカ側参加者はAI、移民問題、そしてジェンダー問題の3点に焦点を当てて議論を進めてきており、日本側参加者は日本の人口問題とAIを含めたテクノロジーを中心に議論を進めてきていた。大方の議論の方向性は両者で相違している点は少なく、このテーマに対して自分たちが話し合いたい方向性も大枠で同じであることが分かった。両者の話し合いをすりあわせた結果、基本軸を人口問題と設定し、それらの諸問題を解決するキーワードとしてAI、ジェンダー問題、移民問題を置いた。また、今までの話し合いを踏まえた上で、自分たちが今後のRTタイムでどのような話し合いを行いたいのか、個々人が興味のある分野や事象についてフリートークをした。第1回目のRTタイムは今後の議論の方向性を決める大きな回であったが、建設的な意見交換により上手く進行することができたと感じた。その後の高知サイトのRTタイムでは、AIテーマの傘の下挙げられた「AIと職（仕事）」について議論を行った。AIが今後どんな規模で、どのような仕事を奪うのかを中心に議論した。その中でも最も印象的であったのは、アメリカ人と日本人のAIの脅威に対する認識の違いと両国の根本的な就業状況の違いである。学術的なデータを用いて議論を行った訳ではないが主観的に、両国間で大きな違いが見られた。アメリカでは職を見つけることは容易でない上、AIが職を奪う脅威を切迫したものと捉えているという話がアメリカ側からは出た。一方で、日本においては少子高齢化により労働力不足が顕著であり、職を見つけることに関してアメリカと比較すると深刻性は低いのではないかという意見が出た。また、新聞やニュースなどからAIが職を奪う脅威も認識してはいるものの、その新時代が迫ってきていることを自らの問題として捉えていないように思われるという意見も出た。

【京都サイト】

[議論の方法を考える]

第2サイトである京都へ向かうまでのバスの中で、アメリカ側の1人とが議論の仕方を変更しないかという案を持ちかけてきた。今までは直前のディスカッション終了時に決めたテーマについてフリーディスカッションをするという方針をとっていた。しかし、高知サイトでの話し合いの中で確実に発言回数に大きな差が出ていた。英語という言語の壁もあり、日本側よりもアメリカ側が議論の殆どを占めている状況が続いていた。そのような現状を打開したいと考えてくれた1人が日本側がより意見を出しやすいような議論の場を作りたい、アメリカ側だけの話し合いではなく日本側の意見もきちんと聞きたいという重いから、議論の方法について再考することを持ちかけてくれた。様々話し合った結果として、必ず次回の議題に対して自分が考える問い、それを深めるために自分が話し合いたいと思っていること等を1人1回発言をするという決め事を作った。自分自身がどのように考えているのか述べるための自由に使える時間が1人1人に設けられたのである。この方法は本会議を終えた今に振り返ってみても有効的であったといえる。頭の回転が早い人そうでない人、英語が流暢である人、そうでない人など様々が同じ場にいる。個人が「自分自身の時間」として自由に話しをできる時間を設けることは、様々な背景を持つメンバーがいる中で、それぞれの考えを引き出すために重要な役割を果たしていた。その他の京都サイトでのRTタイムは京都の町並みや伝統を理解するためのフィールドトリップとして使われた。

【岐阜サイト】

[地方創生とセーフティネット・広がる議論]

第三サイトの岐阜サイトでは、社会における自動化の推進によってどこまで人々の搾取が許容されるべきか、また新たなテクノロジーの導入によって社会的に駆逐された人々を守るためにどのようなセーフティネットが施行されるべきかについて話し合った。結論として、自動化の推進や技術革新は様々な分野において広がっているのでどこまでを正当化するのかどうかを定義づけることはなかなか難しいため、まず搾取された人々を守るための社会的なセーフティネットが必要であるに意見がまとまった。そのセーフティネットとしてあげられたのが、



ベーシックインカム制度と再雇用制度の2つである。ベーシックインカムは最低限の社会保障を国が担保するシステムで、政府から一定の期間に一定の金額が国民に支給されるシステムのこと意見がまとまった。現金給付のことだけでなく、期限付きの金券やフードスタンプにして、あくまで必要最低限の生活のため、という用途を遵守させる方法についても議論は及んだ。制度はテクノロジーの革新によって職を失ってしまった、プログラミングなどの特定のスキルを持たない人々が必要なスキルを得て社会復帰できるように再教育し、彼らを再雇用するための統括システムを作るという制度である。もちろんそれぞれの制度に実質的な導入を考えた際の障壁がある。しかし、テクノロジー導入のセーフティネットとして機能する可能性十分に秘めた両案であるという結論に至った。

【東京サイト】

[本音の議論とファイナルフォーラム]

最終サイトの東京では、人口問題を解決する第2のテーマとしてあげられていたジェンダー、女性の社会進出に関する問題について話し合った。男性の育休システム、保育所の増加、テレワークなど既に多くの企業で導入済みのシステムについても意見が出た。これらの制度は仕事におけるジェンダー差を埋めるための福利厚生として遂行されてはいるが、実際にそれらを受容できている人々の数が少ないことが問題点として挙げられた。昔ながらの慣習が抜けていないこと、それらを受容するためのインセンティブを与えることが必要であると考え、男性が育休をとった場合には、一定の分野において減税をするなどの新提案も為された。また、AIを含めたテクノロジーや自動化がどのように男女の役割や社会的価値観に影響をもたらしているかについて話し合った。サービス業ロボットには女性の声や身体的特長が用いられる傾向にあり、それらがジェンダー格差をより強固なものにしているのではないかという意見も出た。第三テーマとしてあげていた移民問題については話し合う時間がなかったため、ファイナルフォーラムではテクノロジーとジェンダーの問題について発表した。

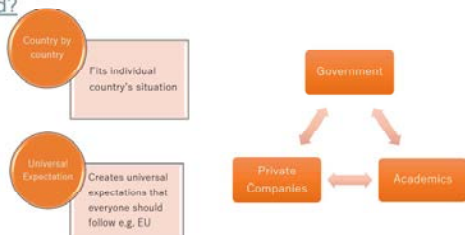
分科会議論の結論

2018年、日本における合計特殊出生率は1.42を記録するなど、人口維持に必要な2.07を大きく下回り、深刻な少子高齢化問題に直面している。出生率が低迷し労働生産人口が減少していく一方、高齢者人口は拡大を続け、国内における人口バランスが崩壊しつつある。人口問題に付随し、国内市場規模も年々縮小し、現在の生産力を維持するためには何らかの解決策が急務に求められる時代となった。この状況下において、様々な潜在的な解決策が想定される、当分科会での議論の末、着目することになったのが、労働の機械化である。

時代と共に目まぐるしい進歩を遂げる技術は、実に多様な用途に用いることができ、将来的な経済停滞の打開策として妥当性を擁す。既に小売り商店の会計の無人化や、お掃除ロボットの家庭普及など、機械化の兆しはありとあらゆる所に存在し、これからもその存在感を増していくことであろう。

日本における機械化を考える上で問題となるのが、誰がどのように機械化を決定し、その責任を負うのかという点である。当分科会は、三権分立の構造に基づき、政府・民間企業・知識人という三者による相互監視の下での機械化の進行が理想であるとの結論に至った。（図1）

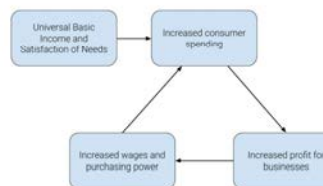
Who decides when and how automation should be used?



(図1)

Universal Basic Income as a Safety Net

- Overhaul existing social welfare systems
 - Simplify, reduce cost of inefficiency
 - Current fiscal pressures
- Implementation
 - Locality
 - Time constraints
 - Non-monetary



(図2)

政府は法整備ができる唯一の機関であるが、機械化の実行主体にはなりえない。民間企業は、機械化を進展させる主体とはなりえるが、社会全般の利益よりも自社の利益に固執する可能性があり、それらの団体に規制を一任することは望ましくない。政府と民間企業とは異なる視点で機械化とそれらが社会に及ぼす影響を提言することが可能であるのが大学教授等有識者であり、それら三者の統一見解の下で機械化が振興され、また規制されるべきであると考えられる。

次に、機械化による失業率の上昇を想定し、セーフティネットとしてのベーシックインカムと再雇用の訓練制度の構築について提言をまとめたい。ベーシックインカムとは、最低限所得

保障の一種で、政府がすべての国民に対して最低限の生活を送るのに必要とされている額の現金を定期的に支給するという政策を指す（図2を参照）。

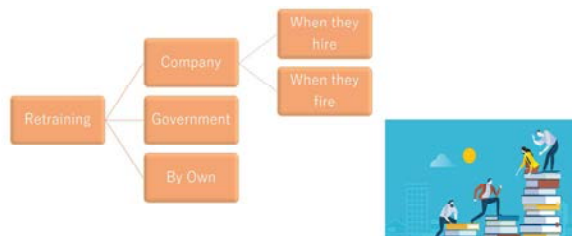
ベーシックインカムを採用することにより、消費者の消費行動が活発化され、最低限の生活を維持すると同時に景気を活性化させる事が可能になる。それらの資金が貯蓄に回される懸念に対しては、現金以外の形でベーシックインカムの支給し、貯蓄を不可能にする措置を採用することで防ぐことができる。再雇用の訓練制度の構築については、訓練環境を提供する主体を三者に分け、計四通りの可能性を提示する（図3を参照）。訓練環境を提供する主体が企業である場合、それらの提供の機会を従業員を解雇する時と新しく採用する時の2通りに分ける。加えて、訓練提供主体を政府とする案、自力での再雇用に向けた準備を求める案も議論され、それらは柔軟に当時の社会環境に従って採用されるのが望ましい。

労働の機械化を中心に議論を進めたが、その他の労働力確保の手段として、女性の活躍を推進することを提案する。具体的には、補助金や保育園の設置の増加を政府主導で進めることで、潜在的な働き手である女性が自国経済の発展に貢献できるようになる。そこで留意しておきたいことが、上記で述べた機械化を家事労働に適用したとしても、必ずしも性格差を埋める結果に繋がるとは限らない点である。確かに、一家事労働単位に必要とされる時間は短縮される。しかし、それらを担う主体が女性である限り、男女の家庭内労働格差は縮小せず、それらを是正するために必要なのは機械化ではなく、根底にある意識の変化であることが言える。

労働の機械化と、女性の社会進出の上記の2点の他にも、地方創生や、移民の受け入れ等が縮小する市場規模に対する解決策として挙げられるが、本会議の時間の制約上、これらについての検討は、各個人に委ねられる結果となった。本会議で検討した話題は社会の氷山の一角に過ぎない。これらの思索を以上の内容で終わらせるのではなく、幾星霜を経ても各分科会員が問題解決に向けて尽力していることを強く望みたい。

Automation: Retraining

Retraining - a way of the safety net to loss of low level jobs



(図3)

個人ページ

	<p>名前：坂東 茉唯</p> <p>所属： 早稲田大学政治経済学部政治学科3年</p> <p>興味/関心： ジャーナリズム、洋画、犬、パイナップル、ピアノ</p>
<p>「中途半端な自分を変えたい」</p> <p>大学生活が折り返し地点となった今、何をどうしてどう過ごしてきたのか、振り返ると中途半端な部分が多いです。そこから抜け出したいと思い、Facebookで偶然見つけたのがJASCでした。『JASCというプログラムはあっても、それをどう使い倒すかは君たち次第』これはアラムナイの方から頂いた言葉であり、私の胸に強く残っています。</p> <p>改めて『枠』の中で動くことに慣れきってしまっている自分を見つめ直し、変わるチャンスだと確信致しました。JASCでの『本音の対話』を通して、ずっと頭にある、日本人として国際的に働き掛けるとはどういうことなのか、短期的な『やりたい』を上回る自分にとって大事なことはなんなのか、考える機会としたいです。何よりも今までの価値観(バイアス)を壊す、どこか他人事だったマクロな問題を自分ごととして捉えるという経験を得たいです。</p> <p>人一倍知らないことへの探究心、他者の意見に対する吹聴力を追求し、食らいついていきたいと思えます。ここでしか出会えなかったであろう志の高い同期と共に、悔いと妥協のない夏にします。</p>	
<p>「自分で考え続けることの大切さ」</p> <p>「L.T.E.って何を話し合っているの？」</p> <p>他分科会のメンバーやアラムナイの方からほぼ毎回開口1番に聞かれる質問でした。Law,Technology,Ethicsの頭文字を取り、L.T.E.と称された私たちの分科会では、確かにトピックに幅がありました。参加が決まり、オンラインミーティングを初めて間もない頃、私自身も同様の疑問を持った記憶があります。だからこそ、本会議では何に問題意識を持ち、どのように議論して行くのか等、議論の骨子を考えるとところに時間を費やしました。その結果、3週間の成果としては十分に議論を発展させられず、ありふれた事実や考えを列挙するにとどまった部分もありました。</p> <p>しかし本会議を終えた今、新たな気づきが芽生え始めています。</p> <p>それはL.T.E.で培った議論に対する姿勢こそ、これから社会に出て行く際必要不可欠であるのではないかということです。情報が溢れかえる現代社会において人々の考える力が麻痺してきていることが懸念される中、議論の焦点を自分で選び、考え、自分の言葉で語る機会が得られることは貴重であり、JASCの醍醐味でもあるのだと思います。</p>	



名前：本田 智巳

所属：早稲田大学文化構想学部4年

興味/関心：
女子サッカー、フルート

「学生生活最後の夏にかけた思い」

私は大学に入学する以前は海外とは無縁の生活でした。大学1年生の春、基礎英語の授業にて「英語で自己紹介をしてください」と先生に指名された際には何の英単語も頭に浮かばず、クラスメイトの前でたじろぎ恥じをかくようなレベルで英語を話すことができませんでした。ではそんな私がなぜ海外文化に興味を持ち、英語を使いこなせるようになりたいと思ったのか。人が好きだったからです。稚拙な表現かもしれませんが、もっともっと多くの人と話しがしたい、他の人が持っている自分の知らない世界を知りたいそんな思いを持っていました。私が高校生の時に夢と希望を持って書いた「大学生になったらやりたいことリスト15」の中の1つに「大学生活を使い切ることができる限り多くの人と出会う。多様な生き方に触れる」という項目があります。私は多くの人との出会いを広げるための1つのツールとして英語を使いこなし、そして様々な国を来訪しようと大学入学時に決意しました。これは自由な大学生活でしか、そして今しかできないことだと確信しました。私は学生生活最後の夏をJASCに捧げると決めました。この会議に応募しなければ、参加しなければ出会えなかった人々とこの夏に出会えることに今から胸を躍らせています。全ての出会いに感謝の気持ち忘れず、大学生活の集大成として悔いの残らぬよう全身全霊で本会議、そしてその他の活動にも取り組んでいきたいです。

「一夏を超えた葛藤と成長」

分科会活動を通して、第一に今まで自分がいかに私個人の意見を持ってこなかったのかを痛感しました。特に本会議での議論では、アメリカ側の参加者たちに圧倒されました。彼らは議題が上がってくる1つ1つの諸問題に対して即座に自分の頭で考えをまとめ上げ、そしてそれらを自分の意見として他人に発信することができます。彼らが持つその一連のスピード感に驚嘆するばかりでした。私は言語力が足りないことを言い訳としていましたが、本会議を終えた今振り返って感じるのは、言語力の不足というより自分の頭で考える力、そして意見を発する力の弱さが足りなかったことです。ここで終わりにするのではなく、3週間の議論を通して足りないと感じた気づきをこれからの課題として挑戦し続けていきたいです。第2に枠組みがない中で、議論の方向性を決めることがいかに難しいかを感じました。それぞれの分科会のメンバーが話し合いたい内容は千差万別であり、どこに道筋を定めるのか決めることに苦労をしました。私たちがここで得たものはそこで導きだした結果ではなく、紆余曲折した過程にあったと思います。4月から始まり、ここまでの時間をかけて仲間達と共に1つの大きなテーマに挑戦できたことは貴重な機会でした。



名前：小溝 舞

所属：

慶應義塾大学法学部政治学科2年

興味/関心：

テニス、ミュージカル鑑賞

「本音の対話」

大学に入学し、日々の授業、サークル活動、バイト、この3つをこなすことは当たり前ですが、それだけでは何か物足りない。物足りなさを補うために、短期留学にも手を出してみたが何か物足りない。一体自分の人生に何が足りていないのか、そう考え続けていた時、ふと思いついたことは「本音の対話」でした。日常の生活を普通に送ることだけを考えて、本音の対話の必要性は限りなく薄くなります。本音の対話には大変な労力・時間・衝突を伴うからです。様々な場面において相手の言葉の意味を正確に理解し、少しでも意図が不明なものはその場で聞き返し、自分の率直な意見を相手に述べることで、これがどれだけ難しいことかは身をもって理解しています。この会議は決して日米間の対立構造を前提とし、それを解消することを目的としているのではなく、計56人の参加者個人同士の相互理解に重きを置いています。本音の対話を渴望する参加者が一同に会する時、どのような化学反応が起こるのか、早くみたくてみたくてたまりません。本音の対話が上記の理念にある「平和」の達成につながるという私の考えが甘いのかどうかは、まだ分かりませんが、その点も日米学生会議の活動を通じて考えていきたいと思えます。

「Life-changing experience」

私は分科会活動の中で多くのことを学ぶことが出来た。そのうちの1つが人間関係構築、相互理解の重要性である。日米学生会議と言えば、日米間の相互理解と謳われることが多いが、相互理解が求められるのは何も日米間には留まらない。分科会においては、全員がそれぞれに相手と議論し、時には衝突することでもたらされる相互理解が何よりも求められる。本会議開始時、私の分科会はお互いがビジネスパートナーのように議論の時間だけを共に過ごし、自由時間には分科会外の参加者と時間を過ごすことが多かった。そこで京都サイトでは、仲を深める為に分科会の仲間のみでの観光に時間を割いた。伝統ある京都の観光地を散策し、とりとめない会話をする時間を設けたことで相手の考え、性格を垣間見ることができ、その後のミーティングにおいて格段に質問・発言をすることが心理的に容易になった。私はこの変化に大変感動し、また、周囲の人への接し方に関する考えが、日常の些細なコミュニケーションを重視するよう大きく変化した。この変化が私にとってのlife-changing experienceなのかどうかはまだ分からないが、自分の考えを変えてくれた同分科会の参加者、コーディネーターには感謝の念が堪えない。

5-7. メディアとソフトパワー

～文化交流から日米関係を考察する～

Culture, Media, and Soft Power

Examining US-Japan Relations Through the Lens of Cultural Exchange



【概要】

国の力とは何か。20世紀の国際社会における国家の力とは、すなわち軍事力や経済力といったハードパワーのことを指した。しかし、ハードパワーをめぐる競争は国家間の緊張を高め、世界大戦という悲劇を引き起こした。それに対し21世紀はパワーシフトの時代だと言える。グローバル化の進展や情報技術の革新により、各国は従来のハードパワーから自国の文化や思想といったソフトパワーという新たな力の重要性に着目した。例えば、戦後日米両国は音楽、映画、アニメや漫画などの文化的交流を通して日米関係を修復し、強固なものにしたように、文化的交流が両国に与える影響は計り知れない。また、その一翼を担うのがメディアである。近年、我々を取り巻くメディア環境は技術の進歩により大きく変化した。その発達により、情報を瞬時に集めることが可能となった一方、メディアが構築するイメージやメッセージを批判的に読み解くことが必要となった。個人による情報の受信、発信が容易となった現代において、私たち学生はどのようにソフトパワーを活用できるだろうか。当分科会では、日米関係におけるソフトパワーの役割を考察するとともに、メディアがソフトパワーに及ぼす影響について議論する。

事前準備期間の議論・活動

【春合宿】

「それぞれ異なる『メディアとソフトパワー』の認識」

今後の議論の方向性を決定するに当たって、明確に定義することが難しいこのテーマのそれぞれの解釈と興味のある方向性について話すと、4人見事に異なっていた。

- ・ 国際関係におけるポピュラーカルチャーの役割（文化的な架け橋）
- ・ 日本文化の文化輸出における文化のハイブリット化
- ・ オリンピックや観光政策における意図的なソフトパワーの使い方
- ・ 国家の政治的立ち位置を示すソフトパワー

【防衛大学校研修】

防衛大学校に行ったことから、分科会全体が安全保障に興味をもち、憲法改正の報道のあり方、政治参加について考えるようになった。

- ・ 憲法改正と報道
- ・ 国民の政治参加と民主主義
- ・ 政治参加を推進するソフトパワー

「アンケート調査」

防衛大学校研修から、「メディアとソフトパワー」には、政治的な側面と文化的な側面から議論できることがわかった。そこで、個々人における「メディアとソフトパワー」の印象を調べ、その内容について議論した。

- ・ ハードパワーとソフトパワーそれぞれの脅威

【オンラインミーティング】

「表現の自由」

春合宿で、クールジャパンなどポピュラーカルチャーを使った国家の戦略的なソフトパワーについての発表から、受け身の観点からしか考えていないことを指摘され、個人からの発信から、このテーマを考えてみた。

- ・ 学生運動などの背景を持つ、大学での看板の規制
- ・ SNSにおける「表現の自由」と危険性

「ジャーナリズムにおけるソフトパワー」

「表現の自由」のテーマから、分科会全体が個人というミクロな観点へと移動し、当事者意識を感じられる方向へと移行し始めた。

- ・ジャーナリストと個人的観点
- ・トランプ大統領当選と報道の偏り
- ・メディアと視聴者

「クールジャパンから見るナショナリズム」

アメリカ側の分科会メンバーと「メディアとソフトパワー」を話し合うことで、異なる議論が生まれるテーマへと移行した。

- ・クールジャパン政策とその歴史
- ・The Japanese Homogeneity

「日米間におけるソフトパワー」

アメリカ側の分科会メンバーともRT Paperを共有したことから、日米で話し合えるテーマを意識的に調べ、まずは日本側で話し合うことにした。

- ・Peace Keepingにおけるソフトパワー
- ・ソフトパワーにおけるAmericanization

「メディア分析」

RT Paperの内容を共有することで、未だ「メディアとソフトパワー」の認識がそれぞれ異なっていることがわかった。また、メディアがキーワードとして使用されていることから、メディア分析は必須であると考えた。

- ・戦時中のプロパガンダアニメ
- ・政治家のSNS
- ・広報活動におけるソフトパワー

「画像分析」

さらに何かの媒体についてしっかり考えることができるように、画像を細かく分析した。

- ・世界的人気キャラクターの特徴
- ・サーチエンジンの検索結果から見るソフトパワー

本会議議論の流れ及び総括・考察

【高知サイト】

「高知県の高校生との交流を通して考えた『地方創生』 / Regional Revitalization」

ディスカッションを通して疑問に思ったこと

- ・地域創生というトピックに関してディスカッションを行い、新たなアイデアや分科会の考えを発表した。私たちメディア分科会は少し戸惑いを感じた。それは「何かを解決しよう」とする姿勢ばかりが発表で取られていたからだ。
- ・東京を基準にしすぎているのではない？ 地方創生とは、それぞれの地の特徴や構造があり、それらを東京に似せて行くことによってより安定した地域づくりができるというわけではない。
- ・「成功している都市」とはどのような意味なのか

「メディア分科会と他の分科会の比較」

- ・私たちの分科会のディスカッションはテーマやトピックを決めて進める形式ではなかった。1人が話した内容からさまざまな捉え方があり、反対か賛成かという結論ではなく、可能性や新たな価値観の創造へと繋げることができる。
 - 文化というものの面白さと重要性を実感することができた。
- ・ハードパワーではなく、ソフトパワーを中心に考えるという面から、他の分科会とは違うという話し合いをした。
 - Final forumの形式についての話し合い
 - プレゼンテーション形式ではなく、映像を使った形式の提案

「話し合ったテーマ：Cultural Appropriation」

- ・ちょうどこの時期にネットで炎上していたアメリカの有名人Kim Kardashianの“Kimono”というブランド
 - ・内容：日本の着物からインスピレーションを受け、Kimonoという下着のブランドを立ち上げ、“Kimono”という単語にトレードマークをつけた。これに対し、日本の伝統文化を傷つけている、日本文化に対して失礼であるという意見が多くあり、#ThisisKimono というハッシュタグと共に着物の写真がSNS上でアップされた。最終的にはブランドの名前は変えられた。
 - ・この具体的なニュースから、「どこまで異文化に介入して良いのか？」という問いをあげ、さらにcultural appropriationに関する議論を進めた

【京都サイト】

「映画村」

- ・ 演出される「日本」
- ・ 強調されている物や人物、音や景色の考察をした

「Cultural Appropriation について議論を続けた」

- ・ 京都は「伝統」を前面に出している代表的な観光地であるため、「伝統」と消費者社会における「商品化」の境界について話し合った。
- ・ 観光客に浴衣を着用してもらい、本来は歴史的、宗教的意味を持つお寺や神社へほとんど写真を撮るだけのために巡ることは本当に日本の魅力を伝えることができているのかという疑問がでてきた。
- ・ 「日本文化」とひとくくりしてしまうことの危険性
- ・ 「伝統を守ることは政府の責任であるのかどうか？または富を促進させることなのか？」という質問に最終的に京都サイトフォーラムで至った。

【岐阜サイト】

「Cultural Appropriation とは何か？」

京都サイトに続き、「Cultural Appropriation (文化の最適化)」というテーマを軸に、

- ・ 「女子高生」と検索して出てきたイメージの中で印象/象徴/衝撃的だったもの
- ・ 「〇〇(都市名)」と検索して表示される写真のリスト

をお互いに見せ合いながら、「育ってきた国や文化、検索履歴の違いによって、同じ対象が、どのように異なって映るのか？」について議論を深めた。

「進行で良かった点」

ファイナル・フォーラムに向けたスケジュール管理としては、最終地である東京での撮影場所や編集方法についても話し合った。その中で、毎回、RTミーティングの開始直後、本題に入る前に、「今日はこちらまでやり、今後は、こういうスケジュールで進めましょう」と仕切ってくれる人がいたのが、頼もしかった。RTミーティングでは、とめどなく議論しがちだが、常に全体を俯瞰し、「残り時間」と「締め切り」を意識して進める姿勢は大切である。

【東京サイト】

「ファイナル・フォーラムへ向けた最終仕上げ」

東京到着後は、ファイナル・フォーラムへ向けて、議論の内容を映像化する作業が始まった。具体的には、まず、公式イベントで出かける度に、合間を縫って、街角で電車や新宿の人波を撮影し、近代日本の姿を映し出した。

次に、

- ・「アメリカの文化や生活様式が日本へ流入した背景」について、明治時代以降の歴史/政治/経済的な流れを調べた上で、
 - ・「日本文化が海外へ与える影響」、特に、「KAWAIIに代表される、ポップ・カルチャーやCool Japanが、国内外でどのように受け止められているか?」
- を独自に分析したナレーションに、史実を反映した資料(歴史的写真)と手書きのイラストを背景として繋ぎ、1つの映像に仕上げた。

「進行トラブルから得た学び」

分科会の内容そのものも大変興味深いものであったが、最も勉強になったのは、ECとのミスコミュニケーションはじめ、作業の進め方の相違や意見の食い違いが起こった際、どうやって妥協点を見つけ、期限までに完成させるかを体験学習できたことである。

私達は「メディアと文化」の分科会である為、「ファイナル・フォーラムでは、映像を中心としたプレゼンテーションをしよう」というアイデアは、会議前半の訪問地である高知や京都でのミーティング段階から出ており、動画を使用したプレゼンテーションは、分科会の担当ECを通して承認されているはずであった。

ところが、発表前夜のスライド提出締め切り直前になり、「映像がメインのプレゼンテーションは前代未聞である上、年配のOBの方々には受けないかもしれないので、やめるように」と言われ、困惑した。

結局、

- ・「メディアと文化」の分科会自体が、JASCの歴史上、初めての試みであること
- ・映像での発表は事前の了承を得ていたこと

の2点を根拠に、当初の予定通り、映像を軸としたプレゼンテーションを実施することができたが、発表前夜、且つ、既に映像が殆ど仕上がっているタイミングで、ゼロからやり直ししなければならぬ可能性が出てきたことは、相当なストレスとプレッシャーであった。

しかし、こうした危機的状況下でも、誰1人として感情的になったり、投げ出したりすることなく、「何を説得材料として、どの様に相手に説明すれば納得してもらえるか？」を冷静に考え、味方を増やし、自分達がしたかった表現をすることができた経験は、今後の人生においても良い教訓となった。



(8/23東京 ファイナル・フォーラム終了後、明治大学にて)

分科会としての結論

「日本文化とは何であるか」

これをフォーラムに集った人々に問いかけることが、私たちの出した結論である。一見、これは結論であるのかと疑問を抱く方もいるだろう。しかし「文化」は定義ができないものであり、それは分科会で議論することで明確かつ一定の回答を得られるものではないという結論に至ったからだ。むしろ「文化」とは、各人の心に内在する非言語的なものであり「日本文化」と言う言葉は存在してもその定義は人それぞれによって異なるのである。

だからこそ、私たちは観客に「文化、日本文化とはこういうものである」と言うイメージを植えつけてしまうような誘導的なプレゼンテーションにはしたくなかった。一方、スライドとスピーカーで構成される従来のプレゼンテーション形式は、非常に誘導的であり、ある一定のイメージを観客に与えてしまうだろうと言うことが分科会メンバーのコンセンサスが取れた意見であった。そのため、私たちは日米学生会議史上初である動画によるプレゼンテーションを試みた。また、プレゼンテーションの末尾に「日本文化」とは何かと言う問いを持ってくことで、明確な結論を提示することを回避した。後味の悪い発表といえば、そうであるが、その後味の悪さが観客が自身の「文化」に対する定義を考える契機となると考えたからである。

以上のように「メディアとソフトパワー」分科会は、「常識」や「慣例」を覆し、新たなアプローチを取ることで、文化の再定義を試みた。「文化」というものが明確に統一された定義ができないからこそ、このようなプロセス及びアプローチは非常に有効であったと考える。



(写真) 発表時の様子

個人ページ

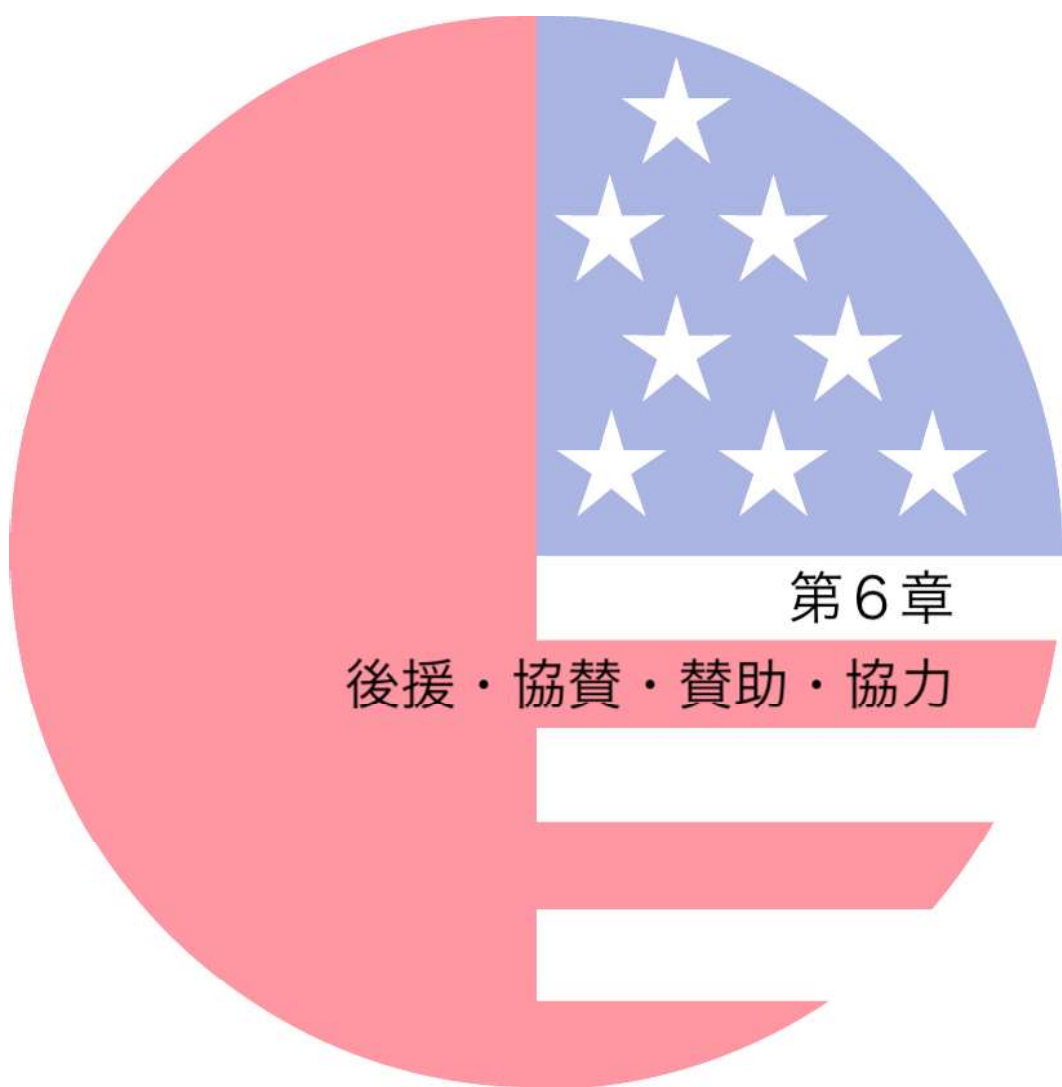
	<p>名前：植村 凧沙</p> <p>所属：早稲田大学文化構想学部 国際日本文化論プログラム2年</p> <p>興味/関心：</p> <ul style="list-style-type: none">・ソーシャルメディアの活用法・ファッション・美容・異文化接触と異文化融合
<p>「頭が良い」とは？</p> <p>日米学生会議に参加したきっかけは、JASCerである大学での教授からのメールだった。そのときの自分の生活に満足していなかった私にとって、逃してはならない、とても大きなチャンスだった。本会議前は、他のデリたちは自分より絶対に頭がいいと思い、自信を持つことができなかった。しかし会議を71回のデリと共に様々な講義や活動を進めていく中で「頭の良さ」というものは、知識の量で測れるものではないと知った。自分から発言する姿勢、どんな分野においても興味をもち、どれくらい社会と自分を結びつけるか。このような自ら率先して考えていく、発信していく力こそが「頭の良い」人なのではないかと実感した。</p> <p>堂々と人の意見に反対ができる、そんな非日常的な空間が会議にあるからこそそれぞれが自分たちの考え方と向き合い、自分に足りなかった視点に気づける。人の「常識」は他人にとっての「常識」であるとは限らない。それは、思考そのものが環境や生活社会によって形成されていくものであるから。メディアのRTを通して改めて感じた。よって、日常生活において疑うことの重要性に気づいた。十分わかり知ったもののように聞こえるが、疑うことはとても難しいことだ。知っているものを別の視点で捉えられる姿勢こそ私が今後も追求し続けたいものだと思っている。</p>	
<p>文化から考える「社会」</p> <p>Culture Media Softpower分科会は、人間というミクロな存在から「社会」というマクロなものまで幅広く考え議論した。外交政策はもちろんのこと、ソフトパワーは私たちの日常の中に溢れている。それによって無意識に人々の考え方や思考が形成され、人々のもつイメージまでも変えることが可能となる。ハードパワーとは違い、日常的に触れているからこそ発揮できる力がある。議論を進める私たちもどれほどメディアを通してソフトパワーの影響を受けているのかを実感させられ、非常に興味深かった。また、文化とは一体何なのか。高知、岐阜、京都そして東京の4つのサイトを訪問する中で重要なことを再認識した。それは「文化」は国単位で語るものではないということ。1つの国の中でも様々な価値観が存在し、その中でも1人1人が「自文化」というものを持っている。したがって、どこまでが自分にとっての当たり前なのか、この見えない境界線について考えていくことに意味がある。そして最も難しいと感じた質問は、どこまで「異」とされる文化に介入して良いのか。異文化、自文化の共生のあり方には答えはないからこそ模索していく必要性が大いにあり、追求していくことに面白さがある。</p>	

	<p>名前：野澤 玲奈</p>
	<p>所属：早稲田大学文化構想学部 国際日本文化論プログラム3年</p>
	<p>興味/関心：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 読書 ・ お笑い鑑賞 ・ 映画鑑賞
<p>「世界における自分の立ち位置」</p> <p>第71回日米学生会議は、自分とは何かについて再認識させてくれるものだった。参加者のみならず、講演や訪問などで出会った人と関わる中で、新たな価値観にぶつかり、時には批判され、自分の意見の本質を考えることができた。また、日米学生会議の文化である本音の対話を通じて夜通し語り合った参加者とは、今後も一生お互いを支え合える仲間になったと思う。</p> <p>本会議が始まると、政治学、法学、国際関係学、医学、薬学、文学など、普段はまったく異なる専門分野の学生が集まっていた。そして、それぞれの分野によって同じ事柄に対する考え方も大きく異なった。特に「国益」に重点を置いた考え方をする社会学系の学生との議論は、「個人」を中心に物事の解釈を行う自分の考え方とは大きく異なり、幾度となく白熱した議論になった。相手に自分の意見を伝えていく過程の中で、考えの根源や正当性を吟味し、異なる意見が混在することの大切さと美しさを実感した。日米学生会議は、世界における自分の立ち位置を考えさせてくれた。そして、まったく異なる専門を持つ同年代の人々とともに、私なりにできることをして社会の役に立ちたいと思うようになるきっかけを作ってくれた。</p>	
<p>「メディアとソフトパワー：ミクロな視点からの政治」</p> <p>2019年を生きる人として、メディアとソフトパワーから目を背けることはできない。それは、政治や国際関係においても同様であり、日常的に目にするあらゆるメディアから私たちの意見や価値観が構成されていると言っても過言ではない。テレビや映画、舞台芸術、広告、音楽などエンターテインメントを大きな軸とするソフトパワーの存在はその力と反して、政治や国際関係など伝統的な日米学生会議の議論から遠ざけられている現状がある。しかし、グローバル化社会における国際関係はメディアとソフトパワーにおいて保たれているとも言える。そんな社会において、個々人の意見を構成、反映するメディアを分析し、その本質的な力を導き出すことで、その正当性を考えることができる。</p> <p>この分科会では、「表現の自由」並びに、「知る権利を守る」メディアと2つの観点から考えました。それぞれ全く異なる方向に話が進む一方で、ソフトパワーの脅威と必然性について議論しました。様々な議論をする中で、このプロセス自体が、情報化社会における私たちの生き方、クリティカルシンキングの大切さに気づき、常に接触するメディアを批判的に考えていく必要があると実感した。</p>	

	名前： 深津 佑野
	所属： 上智大学法学部国際関係法学科 2年
	興味/関心： <ul style="list-style-type: none"> ・ 模擬国連 ・ 美術館巡り ・ 映画鑑賞 ・ ホットヨガ
「自らの限界を感じた3週間」 <p>日米学生会議に参加した2019年の夏は、人生で1番厳しい夏であった。しかし、同時に人生で1番充実した、かつかけがえのない時間だったと振り返ることができる。</p> <p>社会科学系に偏った知識を持った私は、議論が始まった初日から自分の限界を感じ始めた。議論で話されている人文科学系の話題、特に文化に関する議論が全くもって理解できなかったのである。大学生活を通じてディベート系サークルに所属し、アカデミックな議論を日常的にしてきた私にとり、目の前で繰り広げられる議論についていけないという事実が受け入れ難く、大きな挫折感が私を襲った。</p> <p>上記の出来事だけを特筆すれば、「絶対に戻りたくない夏」という結論を迎えるのが適当であると思うが、それでもなお「1番充実していた」と振り返ることができるのはやはり3週間で共にした仲間の存在である。完璧に見えるような友人の1人は、葛藤を抱えながらも、もがきながら前に進んでいることを打ち明けてくれた。そのような存在が周囲にいたことで、私も前を向き、自分の限界を超えて行こうという強い意志が芽生えた。</p> <p>日米学生会議は、私に自身を俯瞰して見つめる経験を与えてくれた。このような人生に一度あるかないかの貴重な経験を与えてくれたことに大変感謝している。</p>	
「教養としての知識の重要性」 <p>「議論」とは通常、一定レベルの共通点を要している者同士で行われる。しかし、JASCの議論は、相手が誰なのか、どのようなバックグラウンドを持っているのかもわからない状態から行われる。我々のRTも例外ではなかった。特に手探り状態でRTメンバーと議論の方向性を決めてく過程は非常に興味深かった。どのように次のアジェンダを設定すれば良いのか、私が考えている議論の方向性は他のメンバーが考えている方向性と同じであるのか、どこでどのような発言をすれば良いのか。議論を構成する1つひとつの要素が未知であり、どのように決定を下していけばいいのか。メンバーとの交流を重ね、相手を知れば知るほど、それらがどんどんスムーズに進み、議論に没頭できるようになるという肌感覚が印象的であった。</p> <p>このようなゼロベースからの議論を経験することは大学生となった現在、なかなか貴重である。そしてそれはこれから社会に出て行っても同じであろう。こういったゼロベースからの議論をどれだけ論理的に構築できるかがその人の本質的な「議論力」である。実行委員として関わる次年度のRT議論においても、成長できるよう精進したい。</p>	

	<p>名前：雨宮 愛</p>
	<p>所属：京都大学経営管理大学院 観光経営科学コース 修士2年</p>
	<p>興味/関心：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イケメン・ウォッチング ・音楽(アカベラバイオリン/ピアノ) ・語学(英語/フランス語) ・写真
<p>「自己紹介とJASCのススメ」</p>	
<p>京大に新設された「観光MBA」1期生として学びつつ、「全国通訳案内士 兼 フォトグラファー」として、来日したVIPのエスコート・ガイドやTVの取材通訳をしています。</p> <p>政治・経済は東京一極集中で、地方で高度な語学力を活かす仕事は少ない中、「観光業」は、東京オリンピックや大阪万博の開催でポテンシャルの高い産業、且つ、関西には京都・大阪はじめ人気観光都市がある為、地方在住でも活躍でき、生まれ育った関西の文化・伝統・歴史の奥深い魅力を、世界でご活躍のゲストと一緒に楽しみ、一生のご縁ができる天職に、大変やりがいを感じています。</p> <p>私は日本で生まれ育った「純ジャバ」ですが、通訳になり、(JASCは帰国子女や留学経験者が多い中)派遣生にも選んで頂けたので、報告書をご覧の社会人や、海外経験の少ない地方在住の学生にも是非、大学や大学院へ進学し、語学力を身に付け、挑戦してもらいたいです。</p> <p>JASC応募資格に年齢制限はなく、受験時から交通費補助があり、人として尊敬でき、意識と見識の高い、素晴らしい先輩や仲間に出会えます。私自身、会社員を経て独立+大学院へ進学した知見や経験を次世代へ還元し、ポジティブな輪を広げたいと思い、JASCに参加しました。</p>	
<p>「#チームワークとは？」</p>	
<p>RT内容は他のデリが触れているので、私は、「数人でRTを進めた経験から、感じた/学んだこと」を述べる。私達は毎週、ミーティング日時を決めて進行したが、全員が揃う日時を合わせるだけでも一苦労なのに、急用や体調不良で開始直前に欠席者が出るのが度々あり、「ミーティングをスケジュール or 出席者だけで決行するか」で意見が分かれた。予定や考えが合わないのは仕方ないが、大切なのは向き合う『誠意』。例えば、「打合せ前日は、早めに帰宅+寝て体調を整える」、「休んでしまった場合、前後に食事や遊びに出掛けたとしても、SNSにはupしない」、「欠席が続くなら、その他の活動をセーブ」等。</p> <p>「JASCerになる」ということは、体調やスケジュール管理も含め、責任を持って生活や活動をする事であると同時に、例え同じ価値観や優先順位で動けないメンバーがいても、全員で1つの成果を発表する義務がある。そうした重圧の中、足並みが乱れかけた時、他のメンバーが、「どう思う?」と聞いてくれたり、「楽しくやろうね」と笑顔で声を掛けてくれたりしたことが忘れられない。RTの内容より、進め方や他のメンバーの感性や伝え方から、多くの示唆と教訓を得た。</p>	

Memo



第6章

後援・協賛・贊助・協力

第6章 後援・協賛・賛助・協力

7-1. ご協力頂いた方々

ご賛助頂いた企業・団体様(順不同)

【主催】

一般財団法人国際教育振興会
代表理事 金野 洋
事務局 伊部 亜理子
後藤 明子

国際教育振興会賛助会
名誉会長 高円宮妃久子殿下
会長 橋本 徹
事務局長 伊部 亜理子

【後援】

外務省
国際文化交流審議官 志野 光子 様
人物交流室 室長 内田 立国 様
課長補佐 村樫 真奈美 様
大臣官房人物交流室 篠崎 美鶴 様

文部科学省
大臣官房
国際統括官 大山 真未 様
国際課総務係長 原文 絵 様

米国大使館
駐日米国臨時代理大使
Joseph M. Young 様
広報・文化交流担当公使
Carolyn Glassman 様
広報文化交流部・教育人物交流室
教育・人物交流担当官
Gregory Aurit 様
Grace Choi 様
教育人物交流室
石川 乃佑里 様
井上 よう子 様

一般社団法人日米協会
会長 藤崎 一郎 様
専務理事 岡本 和夫 様

【広報活動】(役職名は2019年1月時点)

学校法人国際基督教大学
教養学部アーツ・サイエンス学科
上級准教授 Stephen R. Nagy 様
助教授 松田 浩道 様

国立大学法人東京外国語大学
英語学習支援センター 金子 麻子 様
日米学生会議アラムナイ 豊坂 竹寿
常 惠 喬

学校法人東海大学
学長 山田 清志 様
副学長 吉川 直人 様
グローバル推進本部長 中村 晃司 様
医学部 准教授 木ノ上 高章 様
国際教育センター 関根 広太 様
梅澤 智光 様

学校法人明治大学
理事 青柳 勝栄 様
教学企画部 教学企画事務室
藤田 直樹 様
小島 基史 様
中野教務事務室
深味 岳人 様

学校法人立命館大学
国際部 BKC 国際課
白崎 雄也 様

日米学生会議アラムナイ
塩見 涼太
佐藤 美緑

国立大学法人埼玉大学
広報渉外室 二川目 一 様

国立大学法人 電気通信大学
大学院情報理工学研究科
准教授 上原 寿和子 様

国立大学法人 九州大学
学務部学生支援課箱崎地区学生支援係
笹山 様

国立大学法人 筑波大学
グローバルコモンズ機構
鷹巣 朋美 様

国立大学法人新潟大学 広報室
西山 様

国立大学法人 小樽商科大学
学生支援課 国際交流室
丸山 様

国立大学法人 群馬大学
日米学生会議アラムナイ
手代木 秀太

【選考活動】(役職名は2019年3月時点)

日米学生会議同窓会
副会長 兼 地域幹事(関西担当)
竹本 秀人 様
トムソン・ロイター・ジャパン株式会社
佐野 日出之 様

学校法人京大文政大学
総合社会学部 総合社会学科
教授 島本 晴一郎 様

一般財団法人 新日本検定協会
顧問 木戸秋 圭一 様

学校法人日本女子大学 文学部 日本文学科
教授 田辺 和子 様

公益財団法人 日米教育交流振興財団
(フルブライト記念財団)
副理事長 和田 昭穂 様

NPO法人 じぶん未来クラブ
市川 比呂也 様

学校法人昭和女子大学 人間文化学部
日本語日本文学科
教授 横山 紀子 様

日米学生会議アラムナイ
今井 けい、河崎 涼太、斉藤 和平、
新郷 雅大、塩崎 諒平、中川 奈津子、
古座 匠、長谷川 信寿、金澤 つき美、
藤本 ミケイラ、押切 彩、庄坪 孝敏、
木下 朋、塩見 涼太、常 恵喬、
怒谷 彩花、手代木 秀太、
Mason Williams、Aimee Rodriguez

【事前研修】(役職名は2019年4月時点)

《春合宿》

【協力】

国際教育振興会
代表理事 金野 洋
理事・前代表理事 伊部 正信

国立オリンピック記念青少年総合センター
カフェフレンズ様

日米学生会議アラムナイ
押切 彩、堀 晃希、吉田 恵理奈

《防衛大学校研修》(役職名は2019年3月時点)

【協力】

防衛大学校

学校長 国分 良成 様
特別講義担当 河上 康博 1等海佐
武田 康裕 教官
担当学生 古賀 彩 吉田 恵理奈

《広島自主研修》

【協力】

福山市企画財政局企画財政部 部長
中村 啓悟 様

福山市市長公室秘書課

課長 草原 林太郎 様
主事 藤井 祐輔 様

衆議院議員 小林 史明 様

広島県議会議員 出原 真直 様

福山市議会議員 太田 祐介 様
喜田 紘平 様

カイハラ(株)

代表取締役会長 貝原 良治 様

アシナトランジット(株)

代表取締役社長 宮口 泰彦 様

広島大学

名誉教授 植木 研介 様

学校法人広島朝鮮学園

広島朝鮮初中高級学校高級部
教務部長 徐錫姫 様

鞆の浦観光情報センターの皆様

シャンティインディアの皆様

平和祈念資料館 ガイドの皆様

【本会議】

《高知サイト》(役職名は2019年5月時点)

【共催】高知県

【後援】高知市

【賛助】

高知県
高知県観光コンベンション協会
第71回日米学生会議 in高知 サポート委員会

(以下構成組織)

高知県商工会議所連合会
高知日米協会
高知県文化生活スポーツ部
土佐清水市
高知市
高知大学
高知工科大学
高知県立大学
高知県商工会連合会
高知県中小企業団体中央会
土佐経済同友会
高知県経営者協会
高知西ロータリークラブ
土佐ジョン万会
(公財)高知県観光コンベンション協会
(公財)高知県国際交流協会
高知青年会議所
高知県

(サポート委員会役員)

会長
高知県商工会議所連合会
会頭 青木 章泰 様
副会長
高知日米協会
副会長 内田 泰史 様
高知県文化生活スポーツ部
部長 橋口 欣二 様
顧問
高知県
知事 尾崎 正直 様

(以下サポート委員会委員)

土佐清水市

市長 泥谷 光信 様

高知市

総務課長 内川 勇介 様

高知大学

副学長 遠藤 隆俊 様

高知工科大学

学長 磯部 雅彦 様

高知県立大学

学長 野嶋 佐由美 様

高知県商工会連合会

会長 吉村 哲也 様

高知県中小企業団体中央会

会長 町田 貴 様

土佐経済同友会

代表幹事 小川 雅弘 様

高知県経営者協会

会長 竹内 康雄 様

高知西ロータリークラブ

青少年奉仕委員長 山原 一夫 様

土佐ジョン万会

理事 Arthur Davis 様

(公財)高知県観光コンベンション協会

専務理事兼事務局長 岡林 秀典 様

(公財)高知県国際交流協会

業務執行理事・事務局長 森下 幸彦 様

高知青年会議所

理事長 三谷 哲生 様

株式会社高知銀行

株式会社四国銀行

株式会社西山合名

【協力】

高知県

文化生活スポーツ部

副部長 中村 知佐 様

国際交流課

課長 山崎 生 様

課長補佐 大窪 康介 様

チーフ 吉良 葉子 様

主査 橋上 李保 様

主事 安岡 佳乃子 様

公益社団法人高知青年会議所

副理事長 和田 信治 様

専務理事 中東 真一 様

高知県公立大学法人高知県立大学

副学長 五百蔵 高浩 様

学生支援部長兼国際交流課長

柏木 理男 様

学生支援部国際交流課 林 真理子 様

国立大学法人高知大学

研究国際部国際交流室

室長 門脇 英雄 様

留学支援係

主任 岡本 依里 様

高知県公立大学法人高知工科大学

事務局次長 谷本 和広 様

教務部国際交流課

課長 久保 健作 様

主事 高増 実可子 様

永国寺キャンパス教務部教務課

主任 藤井 里香 様

高知県IYEO(日本青年国際交流機構)

会長 前田 正也 様

高知市総務課

課長補佐

管理主幹

国際平和・文化担当

国際交流員

内川 勇介 様

横田 由紀子 様

川添 美樹 様

柳鶴 太郎 様

土佐清水市
副市長 磯脇 堂三 様

土佐清水市役所
企画財政課
課長 横山 英幸 様
課長補佐 山下 育 様
観光商工課
観光係 吉永奈穂 様
秘書係
係長 平林 伶 様
金谷 希 様

高知県立清水高等学校
教頭 田中修一 様

以布利海洋研究センター様

土佐清水市観光協会の皆様

高知サイトフォーラム
(以下、ご登壇頂いた学生様)

高知県立大学
岡 麗寿 さん
田中 有美 さん
山本 悠 さん

高知大学
野村 ころろ さん
近森 藍璃 さん

高知工科大学
此尾 友花 さん

土佐清水市役所 観光商工課
観光係長 畠中陽史様

フォーラムへご来場いただいた皆様

《京都サイト》(役職名は2019年3月時点)

【協力】

一般財団法人茶道裏千家淡交会総本部

国際部

部長 北米総局事務長 弘田 佳代子 様

次長 三田 新 様

伊藤 墨子 様

公益財団法人金剛能楽堂財団

理事長 金剛 永謹 様

理事 金剛 龍謹 様

《岐阜サイト》(役職名は2019年3月時点)

【共催】

岐阜県
岐阜市
白川村
公益財団法人岐阜県国際交流センター

【後援】

岐阜県日米協会
公益財団法人岐阜観光コンベンション協会

【協賛】

イビデン株式会社
太平洋工業株式会社
株式会社大垣共立銀行
日本耐酸壘工業株式会社
サンメッセ株式会社
公益財団法人田口福寿会
公益財団法人十六地域振興財団

【開催にあたりお世話になった方々】

岐阜県知事 古田 肇 様

参議院議員 大野 泰正 様

観光国際戦略アドバイザー
古田 菜穂子 様

岐阜県観光国際局
局長 崎浦 良典 様
国際交流課 桑原 由香 様
水野 智裕 様
田中 康宏 様

株式会社岐阜放送
代表取締役会長 杉山 幹夫 様

岐阜新聞社 編集部
報道部長 鷺見 進 様

太平洋工業
代表取締役社長 小川 信也 様
人事部部長 竹中 拓也 様

イビデン株式会社
代表取締役会長 竹中 裕紀 様
常務執行役員 河島 浩二 様
(岐阜県日米協会会長)
経営企画本部 上田 昌宏 様

株式会社大垣共立銀行
取締役頭取 土屋 暁 様

日本耐酸壘工業株式会社
取締役会長 堤 俊彦 様

サンメッセ株式会社
取締役会長 田中 良幸 様

公益財団法人田口福寿会
事務局長 松岡 義雄 様

公益財団法人十六地域振興財団
事務局長 村上 寛誉 様

十六銀行県庁支店
塩見 善彦 様

公益財団法人岐阜観光コンベンション協会
コンベンション推進課 成瀬 満江 様

岐阜大学
国際・広報担当理事・副学長
鈴木 文昭 様
グローバル推進本部
国際総務室国際総務係 小窪 拓司 様

名古屋米国際領事館
首席領事代理 Matthew Smith 様

在京岐阜高校同窓会
会長 尾関 良平 様
岐阜出身/日米学生会議OB

山田 勝 様
細野 恭平 様

岐阜高校
校長 折戸 敏仁 様
教員 大野 麻未 様

白川村
観光振興課 課長補佐 尾崎 達也 様
章 璐 様

国指定重要文化財 和田家
当主 和田 正人 様

岐阜市
市長 柴橋 正直 様
市民参画部 国際課
課長 伊藤 恵理 様
山田 哲司 様

長良川スポーツプラザ

レストラン杏 川崎 久司 様他、職員の皆様

フォーラムへご来場いただいた皆様

《東京サイト》(役職名は2019年3月時点)

【協力】

【JALワークショップ】
日本航空株式会社
グローバルマーケティング部
部長 光益 彰 様

ブランドエンゲージメント推進部
部長 堀尾 裕子 様

事業創造戦略部 事業戦略グループ
グループ長 森田 健士 様

ブランドコミュニケーション
東京2020オリンピックパラリンピック推進部
ブランド・コミュニケーション企画グループ
松尾 知子 様
柏葉 篤宏 様

【LGBTQ+パネル】
株式会社トロワ・クルール代表取締役
LGBTコンサルタント 増原 裕子 様
LGBTとアライのための法律家ネットワーク
共同代表及び共同創設者 藤田 直介 様

【ファイナルフォーラム】
KS International Strategies, Inc
代表取締役社長 島田 久仁彦 様

学校法人明治大学

フォーラムへご来場いただいた皆様

日米学生会議アラムナイの皆様

【分科会活動】(役職名は2019年5月時点)

法・技術・倫理分科会
bitgrit Inc. Community Manager, Translator
John B. Keyser 様

【その他】

会議協力者

行天 豊雄 様
明石 康 様
三原 朝彦 様

日米学生会議 同窓会事務局

国際教育振興会 賛助会

法人会員

株式会社アルコパートナーズ
伊藤忠商事株式会社
株式会社オリエンタルランド
オリックス株式会社
キッコーマン株式会社
サントリーホールディングス株式会社
株式会社CEAFOM
日本製鉄株式会社
株式会社セブン&アイ・ホールディングス
禅林寺
ダウ・ケミカル日本株式会社
タカラベルモント株式会社
デルタ航空会社
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
一般財団法人凸版印刷三幸会
トヨタ自動車株式会社
株式会社ニコン
日産自動車株式会社
日本空港ビルデング株式会社
株式会社日本政策投資銀行
日本生命保険相互会社
日本テレビ放送網株式会社
日本電信電話株式会社
ネスレ日本株式会社
野村ホールディングス株式会社
パナソニック株式会社
びあ株式会社
富士急行株式会社
富士ゼロックス株式会社
丸紅株式会社
株式会社みずほフィナンシャルグループ

株式会社三井住友銀行
三井物産株式会社
三井不動産株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
三菱UFJリース株式会社
森ビル株式会社
ユナイテッド・マネジャーズ・ジャパン

個人会員

今井 義典 様
岡本 実 様
北城 恪太郎 様
木村 浩一郎 様
橋・フクシマ・咲江 様
谷家 衛 様
富川 秀二 様
橋本 徹 様
アーネスト・エム・比嘉 様
平竹 雅人 様
山田 勝 様
茂木 健一郎 様
和田 昭穂 様

日米学生会議 賛助財団・団体

公益財団法人三菱UFJ国際財団
公益財団法人双日国際交流財団
一般社団法人尚友倶楽部
公益財団法人平和中島財団
一般社団法人日米協会
一般社団法人京都日米協会
一般社団法人霞会館
The Miner Foundation
International Student Conference
日米学生会議同窓会

日米学生会議賛助企業

日本たばこ産業株式会社
ANAホールディングス株式会社
日本航空株式会社
住友商事株式会社
東日本旅客鉄道株式会社



第7章 実行委員あしがき



2018年8月末、成田空港のロビーで70回参加者の承認を認める拍手と共に私は6名の第71回日米学生会議の実行委員会の一員となった。その次の日、予定には全く無かった1年間の休学を決め、実行委員長の大役を担うことになった。それから早1年である。1年だ。

終わってみれば一瞬だったといったありきたりな感想でページを無駄にしても仕方ないので、「理想と現実」と「後悔」という2つの観点から述べてあとがきとしたい。

「理想と現実」この言葉は実行委員としての1年間の活動中、あらゆる場面、あらゆる側面で私に重く押しかけた。自分個人の能力、コミットメント量、仕事の進行速度、チームビルディング、コミュニケーションの取り方、成果物の質、自分のモチベーションやそもそも自分がざっくり抱いていた広義での理想像など、枚挙に遑がない。それらの理想と現実の距離を自分の中で認識するだけならまだしも、実行委員長という役職の性質故か他者にそれを突き付けられるのが何よりも辛かった。そして私は突き付けられた現実と真正面に向き合えるほどの度胸もなければ、ただうまく現実に対処するだけの器用さすら持ち合わせていなかった。どこか限界ストレスの1点で強制的に自分の目を現実に向けさせとりあえずの応急処置をする、1年間がその繰り返しだった気がしてならない。結局のところ全体を俯瞰しても「理想」とはかけ離れていた。今になって振り返ると、常に理想に目を向け続けること、これが私には足りなかったと気付く。当たり前のことだが、理想と現実の間には必ずと言っていいほどある程度の距離が存在する。どんな人、どんな世界でもだ。その距離は徐々に縮まるかもしれないが、実際にその成果を実感できるのは既になんかなり理想に近づいた頃ではないか、と個人的に思う。筋トレと似ているが、いくら継続的な努力を2、3日した所で成果なんぞ現れない。そこで私を含めた大勢の人間は、縮まらない(実際は少し縮まっているのに)現実と理想の「距離」にばかり目を向け「やっぱダメだ」と感じる。自分の非理想的な現実を見てばかりいた私にもし今アドバイスを送るならば、一度自分が抱いた理想をずっと見続けること、だろう。もし距離が遠すぎて嫌になるのなら、自分の足下しか見ないのではなく最終目標の手前に中間目標を作りそこを見据えるという基本的なプロセスをしっかりと踏むことが重要だと身を以て実感した。そこら辺の自己啓発本を開けばこの程度のことをごまんと書いてあるのだろうが、百分は一見にしかずである。自分への戒めも込めて今一度ここに記す。

そしてもう一つ、私のJASCを通じての最大の後悔は、自分の前から離れていきそうな人を繋ぎ止めることが出来なかったことである。自分が原因で離れていったとは露も思わないし、私に出来ることはしたつもりだった。だが最後に彼らと交わした会話の記憶や集合写真の人数が心なしか少ないと思ってしまうのはいまだに自分の心のどこかに引っかかっている証拠だ。何がダメだったのだろう、自分は何が出来たんだろうとこれからずっと心に問わなければいけないのだろうか。当たり前だが過去は変わらないし彼らと今後の人生でどう交わるかは正直知り及ぶところでは無いが、もし次自分での届くところで声に出せないもやもやを抱えていたり助けを求める人がいれば彼らに気づける人でありたいと思う。

まだこの1年を振り返ることなど正直毛頭無理である。不可能だ。だから今筆を取りスラスラと出てくる言葉のみをここに記した。いつかこの経験を消化して、忘れられない人生の遺産の1つとなることを望む。この1年を通じて私に叱咤激励してくださった皆様、温かく見守っていただいた皆様、なんとなく気にかけてくださった方、日米両国の実行委員会メンバーと参加者の全員に感謝したい。ありがとうございました。

国際教養大学 国際教養学部 2年
タクール小迫 亜満

「実行委員あとがき」という場をお借りして、僕のJASC応募に至った背景と、似た境遇の仲間たちへのメッセージを述べたいと思う。

僕にとってJASCは未知の世界へ挑戦だった。石川県金沢市で育ち、バスケットボールに明け暮れた謂わば、部活少年だった僕にとって、外国人は他人であり、関わりのない人達だった。今では、金沢と聞いて「いいな～」と思う人が増えたが、当時は地方都市の1つという立ち位置だった。英語を少し話せるようになったのは、JASCに挑戦する事になる3か月前。たまたま、学部の必修で半年、語学留学に行っただけで必死に学んだ付け焼刃の英語力だった。

そんな僕が、何故、英語力の化け物が集まる、高学歴意識高い系リーグの頂点の様なJASCに応募できたのか。その背景には、言葉は汚いが「地方なめんなよ精神」があったからだと思う。こういった教育プログラムに参加する機会は平等だと人は言う。確かにその通りなのだけれども、その機会に挑戦するハードルが違い過ぎる。このことを、人々は分かっていたとしても、何かアクションを起こすまでには至らない。故に、教育環境に恵まれた人間とそうでない人間が交わらず、両者でエコーチェンバーが形成されると僕は思う。また、今では、本気で地方創生を目指している人も多く知っているが、当時は「地方を知らないのに、まるで知っているかのように地方創生を唱う、意識高い系」が許せなかった。「僕らは君たちの踏み台ではない。」とまで思っていた。そんな「反抗心」が僕のエネルギーとなって、応募に至らせた。今思えば、只の思い上がり、反抗期野郎だったと自負している。そして、こんな僕が日本側の副実行委員長になった。英語で皆を引っ張る自信なんて、どこを探しても見つからない。それでも、「副実行委員長をやりたい」「現状維持を黙認するのと同じではないか」という気持ちが僕の手を掴んだ。「臆病にも逃げていたら一生後悔していた」、と当時を振り返る。1年前の自分に感謝している。おかげ様で、大切な仲間と真夏の太陽の下、何物にも代えようのない時間を手に入れることができた。苦しい思い出ばかりで、後悔だらけだが、実行委員に志願して良かったと強く思う。

話は変わるが、「英語は必須ですよ？」という質問を選考活動をしていた時期によく聞いた。答えは「必須ではない」だ。英語が話せる人だけが集まる会議がしたいならなら、大学の国際課に行けば良いし、そんなに気になるなら、受かった後に必死こけばいい。JASCは「問題意識」と「拘り」を持った人にとって、最高の環境なのだと個人的に思う。偉そうに言っているが、正直僕も、英語で会議なんて、恐怖そのものだった。何が言いたいかというと、まずは応募して、全力でぶつかるとのことだ。「英語が、、、」「参加費が、、、」と挙げていけば切りがない。僕は、英語力無し、参加費自腹覚悟で受験したし、合格後必死こいた。立ち止まらずに、まず行動して見てほしいと、同じ境遇の未来の参加者達に伝えたい。

法政大学国際文化学部国際文化学科
情報文化コース 4年
南 秀弥

日米学生会議に参加したことで人生が変わったという。歴代の参加者が呪文の如く言ってきた発言は、一見ポンジスキームのようにしか聞こえない。第71回日米学生会議の広報活動を約1年間担当していた私からすれば、非常に便利で使いやすいスローガンである。しかし、この一文は単なる現実性の疑わしいスローガンであろうか。この疑問に答えるために、私の実行委員としての1年間を振り返ってみる。

2018年の夏明けからその1年後まで、私の1年間の人生は日米学生会議に尽くしていた。パソコンに向かって長い時間をかけてパンフレットを編集したり、大学のオフィスに電話を掛けたり、応募者全員のエッセイを熟読して採点したり、毎週の分科会のミーティングに参加したりする数え切れない思い出が未だに記憶に生々しい。

学生でありながら実行委員に務めるということは、当然ながら従来送ってきた学生としての生き方を犠牲にした場面もあった。卒業研究やアルバイトに割く時間を減らしたり、友達と遊ぶ余裕がなくなったり、時には寝る時間が遅くなったりすることも少なからずあった。

ここまでの対比だけ見ると、確かに実行委員になったことは私にとって不利なことだったと見える。そのように思う自分もいたが、私にとって実行委員になった真の意味は目に見えないところにある。それは、自分の道を自分で作ることの大事さである。

各回会議の実行委員会はある意味でゼロから出発し、なるべくイチに辿り着くために会議に参加者と共に作っていく。実行委員になった当時の私はそのことが恐ろしくて、大学生には到底無理なことだと感じていた。それに対し、実行委員を経験した今の私は考えは大きく変わった。実行委員になるということは、無限の可能性を実現させるチャンスを得ることと同じだ。その中でも最も掛け替えのないチャンスは、以前想像さえできなかった自分の思いを現実にするチャンスだった。参加者のLGBT+に関する意識を高める自分や、他の人を精神的に応援する自分や、自分を過剰に疑わない自分を実現させることができたと感じた。更に、自分の中にある可能性を可視化できたことによって、自分の今後の人生を考え直す機会にもなった。

上記の意味で、実行委員になったことだけでは私の人生が変わらなかった。しかしながら、私自身が実行委員という特別な機会を利用し、自分の人生というものを意識的に変えようとすることで人生観が変わったと信じる。

“Life isn't about finding yourself. Life is about creating yourself.”

—George Bernard Shaw

電気通信大学情報理工学域 I 類
メディア情報学プログラム 4年
アドリアン・ウィルダンディヤワン

第71回日米学生会議での実行委員として過ごした1年間の活動を振り返り思いをここに残す。まず、日米学生会議が特別であると考え理由を述べる。戦前1934年からの歴史を続けてきた最古の国際学生団体であり、プログラムの企画・運営はほぼ学生のみで組織される実行委員会が行っている。毎年日米交互に開催国を入れ替えて日米2チームが3週間の衣食住を共にしながら国際課題を議論するこのプログラムは他では得られない。生まれ育ち、年齢、学年、専攻、宗教、人種、多様性に富んだこのコミュニティでは面白い人たちとの出会いがある。

整理のため、プログラム運営に関する実行委員の経験と分科会コーディネーターの経験を順に述べる。実行委員の仕事は計画と実行に分けられる。約半年間の計画期間があり、4月からは毎月プログラムの実行と8月の本会議に向けた計画の両方が求められる。計画の完成度が高いほど実行が容易になり、逆は実行が困難を極める。1年間の仕事を通してこの単純な仕組みを肌で体感し、またそれ以上のもも感じた。計画を組む段階というのは楽観的になりやすく、また見過ごしやすい点が多い。このくらいで問題ないだろう、その時にならないと分からないから先延ばしにしようという考えが後の自分を苦しめる。しかし、どれだけ計画を緻密に行っても当日のトラブルは不可避であり、柔軟でリアルタイムの判断・対応は実行の最中では必ず求められる。現場の空気に常に気を配って必要なことを必要なタイミングで修正しなくてはこの仕事はやりとげられない。したがって、できる限りの詳細な計画を作成することと現場では計画をベースにした柔軟かつ迅速な対応の2点が重要だと学ぶことができた。

分科会コーディネーターの仕事はマネージャーとしてチームビルディングをすることにある。選ばれた参加者が配属された5人構成の分科会を指揮し、本会議に向けた準備をサポートする必要がある。実行委員の仕事とはことなり、分科会運営にはさまざまなやり方があり、正解不正解は存在しないことを前置きとする。ここで重視したことはオーバーコミュニケーションによる心理的安全性を確立したチーム作りである。心理的安全性とは互いの性格や考えが共有されていて、不安やためらいなく意見をチームに話すことができる状態である。グループ討議だけでなく1 on 1での対話を促進し、愚痴や不満さえからも要望を聞き出してチームの発展を目指した。参加者がやりやすい環境を整えたの一心で動き、チームファーストの能力が身につくと同時に、その献身を続けることの大変さも実感した。

運営や実行委員会の形態は日々変化するものであるだろうし、同じ実行委員でも役職や年によって経験は異なることと思うが、次世代の実行委員がこの文章を読んで少しでも参考になれば幸いである。最後に日米学生会議が今後も長く続いていくことを切に願い、あとがきとする。

明治大学総合数理学部 4年

並木 祐太

「学生時代に頑張ったことはなんですか」最近では「ガクチカ」と略されるこの言葉は、就活生が必ず聞かれる定番の質問である。この問いに対し私は、なんの迷いもなく「日米学生会議での活動です」と答えることができる。人生を振り返っても日米学生会議での経験は非常に濃く、私の価値観に大きく影響を与えてくれた。僭越ながらこの場をお借りして、実行委員としての活動を振り返りたい。

実行委員の活動を振り返る前に、日米学生会議に応募した理由と実行委員に立候補をした経緯を述べたい。

私には「コミュニティを広げたい」という強い思いがあった。大学1年生時代を振り返るとキャンパス内に寮があるということもあり、私の生活圏は大学キャンパスで完結していた。馴染みある人々に囲まれた学生生活はとても居心地よかった一方で、教室と寮を行き来する毎日に味気なさを感じていた。「大学を飛び出したい」「沢山の人の出会う機会がほしい」「刺激的な経験をしたかった」とそんな思いで応募したのが日米学生会議であった。晴れて第70回会議参加者となった私は、日本のみならず米国から集まった優秀な学生や様々なフィールドで活躍されるアラムナイとの出会いを通じて、当初の目的であった「コミュニティを広げる」を達成することができた。しかし会議が終わりに近づくにつれ、自分が日米学生会議に求めるばかりで、何の価値も提供できていないと感じるようになった。「消費者で終わりにたくない」「何か価値を提供できる人間になりたい」以上の理由から実行委員に立候補し、多くの貴重な経験を提供してくれた日米学生会議に恩返しをしようとして決意した。

次に、実行委員として活動した1年半を振り返る。

実行委員の経験を一言で表すなら「消費者から創造者へのシフト」である。参加者時代は、与えられたプログラムを淡々とこなしていけばよかった。しかし、実行委員に求められたのは「創造者」であることだった。実行委員の主な仕事は、会議の企画及び運営である。大まかなスキームは毎年共通しているものの、実行委員の方針や開催国によって会議のカラーは全く異なる。特にサイト運営に関しては0から企画を打ち出すので、企画の目的・内容・資金調達などタスクは多岐に渡る。今まで消費者側であった私にとって、0から1を生み出す作業は非常に難しく、辛かった。特に辛かったのは実行委員とそれ以外の人々との認識のギャップであった。限られた時間やリソースの中で200%をかけて作り上げたものが評価されない。そんな場面が何度かあり、やるせなさを感じた。しかし、実行委員が一丸となって作り上げた会議を参加者に提供できた経験は何ものにも代えがたい喜びとなった。会議をきっかけに新たな挑戦をはじめた人や第72回会議の運営に奔放する実行委員たちを見ていると、実行委員をやって本当によかったと心から思える。

実行委員の活動を通じて「新しい価値を提供する楽しさ」を学ぶことが出来た。このような素晴らしい経験をする事が出来たのも一重に、実行委員のメンバー、会議参加者、アラムナイの皆様、日米学生会議事務局の皆様、サイト関係者の皆様のおかげである。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

国際基督教大学教養学部
アート・サイエンス学科 3年
村上 真優

第71回日米学生会議 日本国側報告書

発行月	2020年3月	
編集長	南 秀弥	
編集委員	井上 大誠	植村 凪沙
	深津 佑野	木村 隼人
	若井 香穂	村上 真優
表紙	大澤 麻璃	
発行	日米学生会議 報告書編集委員会 〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷1-6-2 コモレ四谷グローバルスクエア3階 一般財団法人国際教育振興会 日米学生会議事務局	

Japan-America Student Conference Since 1934

主 催：一般財団法人 国際教育振興会
企画・運営：第 71 回日米学生会議実行委員会